
三顧の零 ~伏龍、魔法使いに召喚されること~

家康像

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三顧の零～伏龍、魔法使いに召喚されること～

【NZコード】

N4712P

【作者名】

家康像

【あらすじ】

太平要術を封印し、都洛陽での宴を終えてそれぞれのねぐらへと帰る乙女たち。そんな乙女の中の一人、諸葛孔明は、妹弟子の鳳統や、仲間の劉備たち三義姉妹とともに恩師、水鏡先生の元を訪ねようとしていました。その途中、霧が立ち込める森の中で、うつかり足を滑らせ、気付いた時には。

この作品は、アニメ版の『真・恋姫十無双～乙女大乱～』と『ゼロの使い魔』とのクロスオーバーで、アニメ版恋姫の朱里が才人の代わりにルイズに召喚されるお話です。恋姫関連はアニメ終了後の

キャラや世界観に基づいています。ゲーム版の恋姫シリーズのキャラや世界観とは異なります。また、作者の独自解釈や、辻褄合わせのためにオリジナル要素を入れたりもします。アニメ版恋姫のように、笑いあり、涙ありの展開でいくつもりなので、ゼロ魔側のストーリーは原作から大きく逸脱すると思います。ご注意ください。

プロローグ（前書き）

ゼロ魔と恋姫のクロスは全然無いので、どうやらやめてしましました。

でも、後悔はしません。

「なければ作ればいい」をモットーにやっていきます。

小説自体、初心者ですが、よろしくお願ひします。

プロローグ

時は後漢も末の頃。この世は乱れておりました。

そんな世の乱れに乘じ、悪しき力を以て天下を我が物にしようとしました妖術使いがいました。

その妖術使い、干吉の野望を阻止し、忌まわしき太平要術の書を封印せんと、集いし郡雄たち。

激しい戦いの末、ついに勝利を収めたのです。

そして都、洛陽での勝利の宴を終え、郡雄、すなわち恋姫たちは各自の帰るべき所へと向かうのでした。

久々の平穏を楽しもうと、桃花村へと向かう劉備たち、義勇軍の一 行。

しかし、その平穏を楽しむ間もなく、霧に覆われた森の中で、事は起つたのです。

一難去つて、また一難。

乙女と乙女が出会いの時。

世界の壁を越えた、新たな出会いと戦い、そして友情の物語の始まりです。

乙女たちは皆運命を逃れることは出来ない。しかし、いかに

。

プロローグ（後書き）

どうしていけるか。
でも、なんとかやれるだけやってみます！

第零席 ルイズ、三顧の礼にて孔明を迎えるの！」（前書き）

就活、大学と忙しいですが、皆さんの「期待に添えるよう、がんばります。

第零席 ルイズ、三顧の礼にて孔明を迎えるのこと

「朱里ちゃん、どこ……？」

霧が晴れたばかりの森の中で、大きな三角の帽子を口深にかぶつた、いかにも大人しそうな雰囲気の小柄な女の子が、おそらくは彼女にとつては精いっぱいであるつ声で、大切な人の名前を呼んでいた。

彼女の名前は鳳統。字は士元。あさな 彼女が今必死に捜しているのは、彼女の大切な真名である『離里』ひなり で呼ぶことを許している、数少ない親友にして、姉弟子である少女だ。

その親友、諸葛亮（字は孔明）がいなくなつたのは、都・洛陽での宴を終え、一人で一緒に恩師にして、母親代わりでもある水鏡先生の家に行く途中の森の中でのことだった。水鏡先生への挨拶と、万が一のためにと、孔明の友達たちである、桃花村の人たち（劉備、关羽、張飛）がわざわざ一緒に付き添つてくれていたにもかかわらず。

やけに深い霧の中を進んでいた時、孔明は誤つて足を踏み外し、崖から転落してしまつたのだ。すぐに友人の一人である張飛が助けに降りたのだが、どういうわけか孔明の姿がどこにも見当たらない。霧が晴れてから、皆で探し続けて今に至るが、おかしなことに崖の下には孔明が転落した様子は無かつたし、足跡などの手がかりさえ無かつた。

「朱里ちゃん……」

今にも泣き出しそうな表情で、鳳統 離里は孔明の真名を呼び続けた。ひどいケガをしているんじゃないのか、あるいは恐ろしい猛獸に襲われているんじゃないのか。心配であった。

一刻も早く、無事な姿を見せてほしい。一刻も早く、返事をしてほしい。

残念ながら幼き少女・離里の願いはその時その場で叶うことにはなかつた。

*

「また失敗だぞ！」

「これで一回目だ」

「いい加減にしてよね」

「後、何回失敗するか、数えてみるか？」

遠くに石造りの大きな城を臨んだ緑豊かな草原で、爆発の炎と黒

煙が噴き出すたびに、少年少女たちのヤジが飛んだ。

「」はハルケギニアにあるトリステイン魔法学院。トリステイン王国の貴族の子弟たちが魔法を学ぶための学院である。

その日の学院では、今年の春に晴れて一年生に進級する生徒たちによる、使い魔の召喚の儀式が執り行われていた。生徒たちの大半は使い魔の召喚に成功し、彼らの隣りには三者三様、様々な種類の使い魔たちが佇んでいた。ただ一人、桃色がかつたブロンドの髪の少女を除いて。

「ひるさいわね、気が散るから黙ってなさいよ！」

その少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは鬱陶しそうに怒鳴り散らした。彼女は焦っていた。

周りにいる連中は、とっくに召喚を済ましたというのに、自分だけが上手くいかないからだ。

そうでなくとも、もともとルイズはまともに魔法を成功させたことが一度も無い。だからせめて、この度の「サモン・サーヴァント」だけでも成功させたいのに、すでに一度も失敗 どちらもただ爆発しただけだった。

ルイズという少女の性格を一言で表現するなら、彼女は短気である。その上、失敗の度に周りがはやし立てるものだから、とうとう焼けっぱちになってしまったのだ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！ 宇宙の何処かにいる、賢く、華麗で美しき使い魔よ！」

お願いだから、私の前に姿を現しなさい！」

極度の苛立ちと願望のあまり、ルイズは呪文というよつけ、もはや嘆願に近い言葉を吐きながら杖を振り下ろしたのだ。二度目は正直と言わんばかりにである。

またしても爆発が起こり、誰もが失敗だと思った。ところが、そうではなかった。徐々に煙が晴れるに従つて、何かが地面に転がっているのが皆の眼に入らざるを得なくなつたのだ。

「おい、そこに何かいるぞ！」

信じられないという表情で見ている生徒たちを後日にルイズは、やつたという表情で煙の中の「何か」に目をやつた。やがて煙が晴れ、そこにいるものの正体がはつきりと映つた。

そこには一人の女の子が目を回しながら、大の字になつて倒れていた。

その日、その後のことについては、特筆すべきことは特にない。何があつたかを搔い摘んでみれば、この召喚を見ていた他の生徒たちが、ルイズが平民の女の子を召喚したぞ、とはやし立て、笑い飛ばしたこと。彼らの教師である、コルベールにすすめられるがまことに、ルイズが自分よりも年下であるう、肩口で切りそろえた金髪の少女（気絶したまま）と「契約」を交わしたこと。直後に幼き少女の額の上に、極小さくて目立たないながらも、妙な模様の印が刻まれたこと。すべてが完了して、コルベールがルイズ以外の生徒たちを先に城に帰し、使い魔となつた少女をその主と共にベッドまで運んだことくらいである。

」のことは、日常生活から世界の歴史に至るまで、後に様々な影響を及ぼすことになるのだが、この時点では当事者を含め、誰も気づく者はいなかった。

ただ一つ言えることは、召喚された少女、諸葛亮（字は孔明。真名は朱里）にとつては幸か不幸か、「契約」の口づけが気絶していた間に行われた、ということであろう。

*

余談だが、実は霧の森の中に、もう一人行方知れずになつた者がいたのだが、孔明搜索に夢中な劉備たち一行がそれに気づくのは、まだずっと先の話。

第零席 ルイズ、三顧の礼にて孔明を迎えるの「」（後書き）

思つてたより堅苦しい文になつたよくな。

なんとかいい話ができるよう挑戦していきます！

ちなみに、どうして朱里にしたのかといふと、個人的に好きなキャラだからです。優しいし、賢いし、何より可愛らしい。

あとアニメ版にした理由は、作者がもともとアニメからハマつたことと、ゲーム版よりアニメ版の雰囲気（ゲーム主人公がいない世界）の方が、ゼロ魔世界と絡ますに当たつて障害が少ないと、勝手に判断したためです。

どのキャラがいいかも迷いました。武将キャラは好きだけど、ゼロ魔世界にいくならともかく、使い魔として召喚されたらどうなるかは、作者の貧弱な頭では想像ができない。そこで、あえて力の強くない軍師キャラから朱里を選びました。故事成語があつて、題名的にも使いやすそうだったので（苦笑）。

さて、これからどうなるか、作者楽しみでまごつたいと思います。

「指摘等、ありましたら、よろしくお願ひいたします。

第一席 孔明、ルイズと初めて会話を交わすの！」（前書き）

やつと書けました。
しかし、難しい！

第一席 孔明、ルイズと初めて会話を交わすの！」

「鈴々ちゃん。孔明ちゃん、見つかった？」

夕暮れの森の中、桃色の長い髪でおっととした感じの、出るとこは出た体つきの少女、劉備（字は玄徳。真名は桃香）が息をかいしながら尋ねる。

「ダメなのだ」

そう答えたのは、赤い髪に虎のワッペンが特徴のチビッ娘、張飛（字は翼徳。真名は鈴々）だ。

「朱里のやつ、ビームを捲しても見つからないのだ」

何の成果もなく困る一人。そこに、きれいな黒髪をサイドテールにした、やはり起伏のある体つきをした少女が駆けつける。

「義姉上、鈴々！」

「愛紗ちゃん」

「愛紗　！」

桃香と鈴々がその少女、关羽（字は雲長。真名は愛紗）のもとに寄つた。彼女は離里を引き連れて、急いで水鏡の家に行つてきただころだった。

「今、鳳統殿と一緒に、水鏡殿に事の次第を話してきたところだ。もつすぐ来られるだろ？ ところで朱里は？」

そう尋ねるが、桃香も鈴々も首を横に振りあわぬを得ない。

「ダメだよ。孔明ちゃん、見つからないの」

「全然わからないのだ」

これには三人とも、溜め息をつかざるを得なかつた。

「朱里、どこにいるのだ？」

鈴々の声が夕焼け空に、むなしく響き渡つた。

*

既に夜も更け、空には大小合わせて二つの月が昇つている。

トリステイン魔法学院の女子寮の一室にて、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは困つていた。

どうして困つているのかといふと、今日、自分が召喚した使い魔

今、田の前の自分のベッドに寝かせてあげている女の子のこと

だ。

「どうして」んな『平民』の子どもなのよ……。おまけにせつときからずつと、この調子だし……」

「やつ、召喚して以来、ずっと氣を失つたままなのだ。時々、その口から「はわ……」といつ、まるで何かに脅えるかのような、小さな声が漏れるくらいだ。

「まったく、感謝しなさいよな。本来、平民の子どもがここまで貴族に面倒見てもうえることなんて、まずないんだから」

誰に言ひのでもなく、ポツリと独り言を漏らす。たしかにルイズはずつと、この気絶した少女の面倒を見ていたのだ。ただし、決して自分の意思ではない。彼女の先生の一人で、召喚に立ち会つた、コルベールの判断で、いくら平民とはいえ、流石に気絶したままの女の子を放置しておくのはまずい、といつことで、召喚のあと授業を免除する代わりに、田が覚めるまでついていてあげるよつに言われたからである。

ルイズ一人が、この少女に大恩でも売つたつもりになつていた。

動きがあったのは、その時　　ルイズが独り言を呟いたときだ。ついに田の前のやや短い金髪の少女のまぶたが、ゆっくりと開いたのだ。

*

「う……ん……」

まぶたを開けるにしたがって、ゆっくりと視界が開ける。

「あれ……！」なぜ……？」

気がつけば、暖かい布団の上にいた。いつたい、どれだけ寝ていたのだろう。意識がぼんやりする中、なんとか時間を確かめようと、手掛かりを探す。幸か不幸か、少女、諸葛孔明　朱里の田ことまたのは、窓の向こうの夜空に輝くお月さまだ。

「もう夜……！」

円を見るや否や、眠気は吹っ飛んだ。朱里は咄嗟に自分の右手で両手をまぶたの上からじっくりとすり、そして再び見る。お月さまの数は、一つだ。

「はわわ、お月さまが二つ、二つもー？」

見たことのない光景に、朱里は驚く。彼女は今まで、いろいろな所を旅してきたが、どこへ行つても月は一つだった。その時一瞬、自分が霧の森の中で、崖から転落したときのことが頭の中をよぎる。

「ううむこつたい……まさかあの世……」

「そんなわけあるかー！」

「はわ！？」

突然横から怒鳴られて朱里はベッドの上から転げ落ちそうになつた。
辛うじて転落だけは免れる。

「まつたく、人を散々てこずらせておいて、何が天国よ…」

「す、すみませ……！？」

咄嗟に謝りそうになつた時、朱里はすぐ横で仁王立ちをしている、
年は自分と同じか少し上であろうつ、桃色の長い髪の少女の存在に気
付いた。

ほんの一瞬だけ、沈黙が続いたが、すぐに破られる。

「すみませんが、どなたですか？」

「それはこっちのセリフよ！」

これが、これから長い付き合いとなる、二人の少女が初めてお互
いに会話を交わした瞬間だった。

第一席 孔明、ルイズと初めて会話を交わすの「」（後書き）

やつと、初対面にこぎつけました。

本当はもつといろいろ書く予定でしたが、どうしても話がおかしくなってしまう。

よつて、この夜の出来事は、一つにわけて書くことにしました。でも、予想はしていたけど、恋姫キャラがルイズの性格について行くのは、やっぱり難しい。この次の話は、間違いなく対立的な話になると思います。

でも、このお話の本分は、笑いあり、涙ありの王道でいくべきだと思っています。

アニメ版恋姫の朱里を起用したのは、その人づきあいの経験や、生まれ育ちの設定などから、彼女ならそれを成し遂げられると思ったからです。

もちろん、最初からうまくいくわけがないので、いろいろな展開を挟んで、より面白い話にしていこうと思います。

いろいろと、ご都合な展開もありますしあつが、彼女たちの活躍を見守つてあげてください。

なお、ハルケギニアに行くのは、朱里以外にも何人かいる予定です。誰かとは言いませんが、アニメ版恋姫が桃花村メンバーを主役にしている以上、魏や呉は出せないですし、出したらややこしくなると思います。言えることは、シリアス面で重要なキャラと、ギャグ面で重要なキャラどがいるということです。どこまでいけるかわかりませんが、よろしくお願ひします。

第一席 孔明、ルイズに詰め寄るの」と（前書き）

長かった。

そして、性格の違うこの二人を絡ますのが難しかった。
それではどうぞ。

第一席 孔明、ルイズに詰め寄るの」と

山中にある水鏡先生の屋敷の中。雛里は眠ることができず、ぼんやりと夜空の月を眺めていた。

朱里が行方不明になつて、半日が経つてゐる。あれから水鏡先生も加わつて、捜索を続けたのだが、なんの手掛かりも得られていない。先ほどは愛紗が、先に義勇軍と共に桃花村へと帰つてゐるはずの馬超、黄忠たちに急を報せに行つた。また、桃花、鈴々、水鏡先生たちが夜通し交代で手掛けりを捜し続けている。

雛里は悲しくなつた。今日は本来なら、朱里と一緒に先生に甘え、一緒に料理をしたり、お風呂に入つたり、一緒に本を読んだりして楽しんでいたはずだつた。今頃は一緒に布団の中にいるはずだつた。そして、明日は一緒に薬草を摘みに行くはずだつた……。

それなのに、こんなことになつていて、自分にはどうすることもできない。それが、まだ幼い雛里にはとても耐えられないことだつたのだ。

不安は新たな不安を呼ぶ。それが間もなく、彼女にとんでもない行動をとらせるこことになつた。

*

その夜、トリステイン魔法学院の女子寮の一室では、決して後世の史家によつて記されることのない、凄まじい論争の嵐が吹き荒れていた。それは、

「すみませんが、どなたですか？」

「それはこいつちのセリフよー!」

といつ一人の少女のやり取りから始まつたものだつた。

召喚したルイズと、召喚された朱里。お互にとつて不幸だつたことは、育つた環境も、慣れ親しんだ国、土地の文化も全然違うことだつた。それが遠因となつて、自分の名前を言うだけで大変苦労したのだ。しかも、ルイズが自分の召喚した少女のことを、ただの平民の女の子にすぎないとthoughtしたことが、さらなる不幸を呼んだのだ。それをいちいち書き記していくはキリのない話であるため、いくつか搔い摘んで話を進めることにしよう。

例えば名前を言つた時は、ルイズが字あだなを知らないがゆえに、面倒事が起こつたし、ルイズが名乗つた時は、朱里が長い名前に舌をかむ羽目に陥つた。

朱里が自分の出身について述べた時には、ルイズは朱里の言つた国や土地の名前（漢帝国、桃花村など）は全然知らず、信じようとしなかつたので、朱里は証拠として、自分の鞄の中から、眷物の地図を見せて、なんとか認めてもらつことができた。

しかし、これらのことば、朱里が魔法のこと、そして自分の置かれた状況を知ったときに起じた論争からみれば、取るに足りないものだった。

「ルイズさん」

朱里が尋ねた。

「なによ」

「『』はその、『魔法学院』とかといいましたよね？」

「やつよ。『』がかの有名な、トリステイン魔法学院よ」

「それで、あなたが、その『魔法』とかいう妖術をここで勉強する、えっと……」

「『メイジ』よ。何度も言わせないで。それにコウジコウしてなに？」

「いちらの話です。とにかく、あなたがその、『めいじ』とかいう術使いなんですね？」

「そうよ。そして、わたしはあんたの『主人様』で、あんたはわたしの使い魔として、『』に呼ばれたのよ」

「『使い魔』ってなんですか？」

「文字通りの意味よ。わたしが主人で、あんたは召使いみたいなものよー」

「なつ！？」

それを聞いたとたん、朱里は自分でもわからないほど勢いで、ルイズに詰め寄った。

「ルイズさん。私はあなたにお仕えするなどと、言った覚えはないのですが」

「知らないわよ！ わたしだって、あんたみたいな平民を呼びだし覚えはないわ！ 本当は、ドライアンとかグリフォンみたいなカッコいいのがよかつたのに…」

「その『ドライアン』や『ぐりふおん』が何かは知りませんが、それなら、私はあなたの召使いなど、やる必要はないじゃないですか！」

「うぬさいわね、平民の分際で貴族に逆らひの…？」

「今は身分の話なんかしていません！ だいたい、なんですか。いくら、あなたの意志ではないとはいって、勝手に人を呼び出しておいて、しかも召使いになれなんて。お断りします！」

「なんて生意氣なの」

「誰が生意氣ですって！？ それなら聞きますが、ルイズさん。あなたが今、私に言っていることを、逆にあなたが他の人から言われたりどうなんですか？ 『はい、やります』といいますか？」

「言ひわけないじゃない！」

「同じ」とです。誰も認めるわけがないでしょ！」

「へ、へんなやつー。」

激しい論争の末、怒ったルイズは、何やら手鏡みたいなものを朱里に投げ渡した。朱里は、一瞬呆けて、「はわ！？」と言ひて、落としそうになりながらもキャッチする。

「それで、あなたのおでこを見てみなさー。」

「おでこ。」

憤りながらも、前髪をかきあげ、確認してみる。そして見た。前髪に隠れたおでこのど真ん中に、極小さく目立たないながらも、朱里が見たことのない文字か模様みたいなものが描かれているのを。

「はわー、これはいつたい　　！？」

驚きのあまり、一瞬我を忘れるものの、すぐにルイズを見据えていつ。

「なんですか、この鯨（いわい）（刺青のこと）みたいなのはー？」

「使い魔のルーンよ」

ルイズが答える。

「とにかく、それがある以上、あんたはわたしの使い魔といつ」と
なの

「誰が認めるのですか！」

「わたしだつて認めたくないわよー。」

「それなら取り消してくださいー。その契約とかいつのをー。そして、わたしをもといた場所に帰してくださいー。それで、あなたがきちんとその、『じら』んとか何かを呼べばいい話じゃないですかー。」

「できなーのよー。」

「えつ……？」

悪い予感が朱里の頭の中をよぎる。

「じつじつ意味ですか？」

「言葉通りの意味よー。『サモン・サーヴァント』は一回しか使えないし、呼び出されるとしかできないのー。」

「どうしてですか？ ルイズさん。あなたはその、『めいじ』とかいう術を使う人なんでしょう？」

「知ったような口を聞かないでー。あのね、もう一度『サモン・サーヴァント』を使おうと思つたらね、一度呼び出した使い魔が死ななきやならないのー。」

「あ、そんな……」

口にかけては誰にも負けない朱里も、これでは言い返すことができなかつた。名軍師、諸葛孔明とはいえ、朱里はまだ子どもなのだ。これが恐ろしくないわけがない。

「わかつた？ だからあんたは死ぬまでわたしの『もの』よ

「認められるわけが……」

「まだ言ひつの？ 別に構わないのよ。わたしのもとからいなくなつても。そうなればどうなるかくらい、わかるでしょう？ 野たれ死ぬだけよ」

「ええ……」

悔しいほどわかつた。どんなに頭がよくても、名軍師と言われようとも、朱里のような子どもが、自分の知らない国で、親しい人が誰もいない状況で生きていくのは酷というものだ。まして、朱里は、水鏡先生の師匠にあたる人に拾われる前、両親を亡くし、親戚中をたらい回しにされ、姉や妹とも離れ離れになつた経験がある。だからこそ、よけいに恐いのだ。しかも、元の世界で、せっかく真名を授けあえる友が大勢出来始めていただけに、そこから引き離された衝撃は計り知れないものだつた。次の瞬間朱里は、分担してとはいえ、かつて三万もの大軍の指揮を執つたこともある名軍師、諸葛孔明としての恥も外聞も捨て、ただ一人の孤独な女の子としての行動を取つた。

「わかつたでしょ。だから不本意だけど、主人であるわたしのために、しつかり働いた分、食べさせてあげることぐらい……」

そう言いかけて、ルイズは異変に気付いた。なんと、自分が使い

魔にした女の子、「コウメイ」がその場におり崩れたかと思つと、
その両目からポロポロと涙が流れだしたのだ。

「ちょ、何泣いてるのよー。」

これにはルイズも慌てた。

「わたしが泣かしたみたいじゃない！」

事実そうなのだが、ルイズにしてみれば、完全な不意打ちだった
のだ。

「う、うわーん！」

とうとう、声をあげて泣き始めたのだ。

「ちょ、落ち着きなさいー。」

流石に放つておけず、思わず抱きしめる。あまりに不憫だつたら
だ。

*

その夜、ルイズは自分が召喚した少女、「姓はショカツ、名はリ

ヨウ、字は「ウメイ」と一緒に寝てあげたのだった。

なおルイズが、自分が召喚したものの大切さに、自ら気付くのは、
まだずっと先のお話。

第一席 孔明、ルイズに詰め寄るの」と（後書き）

こんなに難しいとは思いませんでした。

どうしても、暗い話になる。

でも、そろそろ抜け出さないといけないと私は思います。

ルイズのためにも、朱里、離里のためにも。

そして、皆さんのためにも、しっかりとやつてしまつます。

第三席 孔明、師と友に懇めりたるの」（前書き）

今回の話はとにかく長いです。また、一種の「都合主義かもしだれません。それでも読んでいただける方に、幸あらんことを。

第三席 孔明、師と友に慰められるの」と

「朱里、起きなさい、朱里」

懐かしい声がする。朱里はゆっくりと体を起こした。空が目に映る。満天の星空だ。しかし、おかしな空だった。朱里から見て前の方の彼方には、たつた一つの月が浮かんでいる。ところが後ろを振り向くと、そこには二つの月があるのだ。

それだけではない。朱里の後ろ、二つの月の下には、彼女の育った国にはない石造りの大きな城がそびえ立っている。反対に前の方、朱里が見慣れたお馴染みの、一つだけのお月さまの下には、緑に囲まれた、小高い丘の上に建つ屋敷、朱里の大好きな人の家がそこにあつた。

朱里は急いでその家の方に向かつて走った。しかし、途中で気付く。なぜか、行けども行けども、そこにはたどり着けず、同じ草原を走り続けていることに。とうとう、何かに躓いて転んでしまった。

「はう……」

足に痛みを感じ、ケガをしていないか調べる。すると、そこに懐かしい人が現れた。

「朱里、大丈夫？　どれ、見てあげましょ？」

その声を聞いた朱里は、うれしさのあまり、涙が流れる。

「先生……」

足の痛みも忘れ、その人に抱きついた。

「水鏡先生！」

「あらあら」

抱きつかれた、清楚で母性的な女性が朱里の頭を撫でてあげる。彼女こそ、朱里にとつて恩師であり、何より母親代わりだった恩人で、その名は司馬徽^{しばき}。すなわち水鏡先生だ。

「先生、遅くなつてごめんなさい。会いたかったです。」

「お帰りなさい、朱里。その様子だと、いろいろお話がしたいみたいね」

「はいー。」

「でもね、まずはちやんと足を見せてくれるかしら？」

「はわ……、そうでした」

そういうわけで、朱里はすりむいた右足を見てもらう。水鏡先生は慣れた手つきで、傷の上に砕いた薬草の湿布をし、包帯を巻いてくれた。

「これでよし」

「ありがとうございます、先生」

そうして落ち着くと、朱里は水鏡先生に向きあい、そして話した
「」とを話し始めた。

崖から誤つて滑り落ちてしまつたこと。それで氣を失い、気がついたときには、今自分の後ろにあるような、「月が一つある国」にいたこと。そして、自分はルイズといつ名前の、全然見知らぬ女子に、「使い魔」として呼び出されたらしい、ということ。話しているうちに、涙さえ出していく。

朱里は自分の置かれている状況について、一つ一つ、ありのままに話した。傍から見れば、愚痴とも言えるような話も見受けられたが、水鏡先生は丁重に全部聞いてくれた。

「どんなことになつていてるわね」

「はい、やつなんです」

そこまで言つて、朱里は表情を暗くする。

「いやら、あのルイズさんが、わざとじやないとはいえ、私を全然知らない国に連れ出して、その上、召使いをしろと言つんです。先生、私、どうすれば……」

しょんぼりとする朱里。すると、水鏡先生がポンと、頭の上に手を置く。

「やうね。確かに納得できる話ではないわ」

そう言って、頭をゆづくつと撫でながら、優しく話し続ける。

「でもね、朱里。一つだけ憶えておきなさい」

「はい」

「確かに朱里は今、すじぐく辛い目に遭っている」とはわかります。でも、そのルイズちゃんという女の子のことを怨んではいけませんよ」

「えつ……？」

首を傾げる朱里に、水鏡先生は優しく諭す。

「朱里の話を聞く限りだと、ルイズちゃんって子は、一生懸命になつてその『使い魔』という動物を呼び出そうとしていた。その時、ルイズちゃんは、朱里を呼ぶつもりは全然なかつた。それなのに、なぜか朱里が呼ばれた」

「朱里。私はね、これはきっと、何か意味のあることじゃないかな、と思つの」

「意味のあること、ですか？」

「そうよ。それが何かまでは先生にもわからない。だけど、ルイズちゃんが一生懸命にやって、そして朱里が呼ばれた。それは、朱里がルイズちゃんに必要とされているからではないかな、て」

「でも、ルイズさんは、私なんかより、その『ビーバー』とか『ぐりふあん』とかいう動物の方が良かつたというんです」

それを聞いた水鏡先生は、少し目を瞑つた後、ゆっくりと首を振つた。

「朱里。たとえ話をしましょ?」

「例えば、石が二つあるとします。片方は綺麗な宝石で、もう片方は一見ただの石にしか見えない石。どちらかをあげると言われたら、朱里はどうちをもらうかしら?」

「綺麗な方の石です」

「そうですね」

水鏡先生は答えを聞いてほほ笑むと、話を続けた。

「朱里だけじゃなく、たいていの人はそう答えると思います。でもね、朱里。一見汚い石にしか見えない石を、しっかりと磨いてみたらどうかしら?」

「あつー。」

朱里は息を呑んだ。それを見た水鏡先生は楽しそうに笑みを形作る。

「わかつたでしよう? 本当に綺麗な石というのは、最初はただの汚い石にしか見えないの。それを磨いて、初めて綺麗で立派な石になるのよ」

「やつです。その通りです。でも……」

朱里はやはり不安そうだ。

「本当に私、ルイズさん必要とされたらどうか？」

「大丈夫ですよ。必ず必要とされるはずです。いえ、むしろ、朱里の方から必要とされる人になればいいのですよ」

「でも先生……」

「朱里は昔からやうじつ子。先生はちゃんと見ていてますよ」

「鈴々もなのだ！」

「はわわーーー？」

突然目の前に割って入った顔に驚き、朱里は尻もちをついてしまった。

「んもー、鈴々ちゃん。驚かないでくださいー！」

「へへ……、ごめんなのだ」

頬を可愛らしげに膨らまして怒る朱里に、笑いながら謝るのは、朱里にとつては初めての同年代の友達となつてくれたチビッ娘、張飛鈴々だ。水鏡先生を除けば、朱里が初めて真名で呼べた友達。そして、少し時間はかかつたけれど、初めて朱里のことを真名で呼んでくれた仲間だ。

「話は全部聞かせてもらつたのだ」

鈴々はやつぱつと、朱里を睨みづけよつと顎葉を続ける。

「朱里、おまえはおっぱいはちつちやい」「余計なお世話です！」はにゅー？ と、とにかく、お前は頭もこいし、優しいし、働き者だし、料理も上手いのだ。だから、もつと自分に自信を持つのだ

「もし、それでもお前のことをじじめるヤツがいたら、鈴々がお前の所に行つて、そいつらをケチョンケチョンにしてやるのだ。だから、朱里は何も心配しなくていいのだ」

「鈴々ちゃん、ありがとう……」

朱里は思わず鈴々にしがみつく。鈴々は一瞬顔を赤らめたが、すぐについとそっぽを向くと、

「別に、当たり前のことを言つたまでなのだ……」

とだけ、答えた。朱里にはそれだけで嬉しかった。

「あら、いけないわ

水鏡先生が困つたよつと言つた。

「もうすぐ夜が明けます。朱里、そろそろ戻らないといけませんよ

すると水鏡先生は、よりしっかりと朱里を抱きしめてあげた。

「大丈夫です。私は、先生はちゃんと見ていますよ

「そんな、先生……」

「鈴々もなのだ！だから、しみつたれた顔はするなんだ」

「はい！」

おかげで元気がだ。

「朱里！」

鈴々がそう言って、ニコリと元気な表情を見せる。

「はい、鈴々ちゃん！」

朱里もそれに応え、微笑み返す。また次に会う時のために、お別れのときの顔を覚えておくのだ。

やがて、地平線の先に光が差し込み、夜空は徐々に晴れていく。田の山の時間だ。

「それでは、先生、鈴々ちゃん。お元氣で！」

「気をつけでね」

「頑張れなのだ！」

別れの挨拶を済ますと、朱里は後ろの石造りの城へと向かって駆け出した。

(水鏡先生、そして鈴々ちゃん。ありがとうございました。私は頑張ります！)

決意を新たに、朱里はお城へと走るのだった……。

*

朱里が目を覚ました時、そこはルイズのベッドの上だった。窓からは光が差し込み、小鳥のさえずりが聞こえる。そして、隣では昨日論した相手、ルイズがぐつすりと眠っていた。

「夢だったんだ」

そう思つた朱里は、ふと右足を見る。そこには、丁寧ではなかつたが、包帯が巻かれていた。

「あれ、誰が巻いてくれたんだろう?.....?」

訝しげに思つたが、結局わからない。実は昨日、泣き崩れて寝込んでしまった後に、今はぐつすりと寝ている「ご主人様」が、すりむいた傷に気付き、巻いてくれたのだが、もちろん、朱里は知らない。

「それにしても、夢の中で、水鏡先生や鈴々ちゃんに、ずいぶんと勇気づけてもらつたな.....」

夢の内容を思い出し、嬉しく思つ朱里。

「でも、どうせ夢なら、離里ちゃんにも会いたかったな……」

そう呟つて、夢には出てこなかつた親友の顔を思い浮かべる。

「皆、心配してこらだらつたんだよな……」

再び、しんみりしかけるが、それで思ことどまる。

「いけない。せっかく先生や鈴々ちゃんに勇気づけてもらつたのに、約束してきたのに……」

そして、誰にでもなく、自分に言い聞かせるかのように、呟いた。
大好きな人たちや、大切な友達、仲間たちの顔、一人一人を思い浮かべながら。

（水鏡先生、鈴々ちゃん、離里ちゃん、愛紗さん、劉備さん、星さん、翠さん、馬岱ちゃん、魏延さん、紫苑さん、そして璃々ちゃん。
私、頑張ります！）

朱里にとって、ハルケギニアでの生活、第一日目の始まりだった。

第三席 孔明、師と友に懇められぬの」と（後書き）

いかがでしたでしょうか？

個人的には、朱里はよき友、よき師に恵まれていたと思います。
前話でなんことになつただけに、こつでもしないと、すぐには立ち直れない、と思い、こういう話をに入れました。

さて、気を取り直したところで、いよいよ学校生活のスタートです！
さあ、どうなることやら。

第四席 ルイズ、孔明の眼を察するのJPN(論書モ)

やつとされました。

それでは、お楽しみください。

ちなみに、あとがきにて、キャラクターたちによる「ムダ知識講座」をお試しに始めてみます。

それでは、どうぞお楽しみください。

第四席 ルイズ、孔明の眼を恐れるの」と

「恐くない……、暗いといふなんて、全然恐くない……」

自分を懸命に励ましながら、暗闇の森の中を、離里はたつた一人で歩いていた。

彼女は今、一生懸命になって、親友である朱里の手掛けかりを捜していた。だが、傍田から見れば、彼女の今やっていることは無謀そのものであった。

そもそも、離里は水鏡先生の家で待つていなければいけないはずなのだ。それがどうしてこんな真夜中に、何が出るのかわからない森の中にいるのか。

答えは、自分が何もできないことに業を煮やした離里が、なんとしても親友を見つけたいとの思いで、こいつそりと先生の家を抜け出したからだ。

下手をすれば、自分の身まで危険にさらす危ない行為である。それに、大好きな水鏡先生や、朱里の友達たちにも迷惑がかかるに違いない。しかし、離里にしてみれば、朱里が見つからないことの方が重大だった。

「朱里ちゃん……」

小さいけれど、それだけに友達を心配する気持ちのこもった声で、離里は親友の名前を呼び続けた。

しかし、その声は漆黒の闇の中に消えるばかり。もはや、離里の努力ではどうにもならないかと思われた。だが、運命のいたずらであろうか。搜索を続ける彼女の目に、奇怪なものが目に入ったのは。

「あわ……？」

離里が思わずつぶやいた。そして、自分の目を疑った。

幸か不幸か、離里の視線の先には、金色の光を放つ、小さな虫いや、虫ではない。そこには、小さいが、れっきとした龍みたいなものが飛んでいた。

離里はそれをしばらく、恐れと好奇心の入り混じった目で見つめていた。だが、その光る龍みたいなものが、森の奥の方へと飛び去ろうとする。

「待つて……」

離里は急いでそれの後を追つた。なぜ追いかけるのかはわからない。だが、どうしても追いかけなければいけない気がしたからだ。

*

どこへ行つても朝は早い。ハルケギニアに来て初めてのお日様を見た後、朱里は洗濯物を抱え、ルイズの部屋を後にした。昨日の夜は、あんなことがあって、ルイズと口論した揚句、いっぱい泣いてしまった彼女だったが、結果としては、それがかえつてよかつたようだ。自分の感情を一気に前に押し出すことができたので、胸の内にあつた何か、もやもやしたものが、だいぶ取れたような感があった。それに、いつまでもいじけていてはいられない。夢の中とはいえ、水鏡先生や鈴々に励ましてもらい、そして約束したのだ。頑張ります、と。だから朱里は、明るく、前向きに進む道を取ることができたのだ。それに彼女は家事が好きな性格である。何かをせずにはいられず、朝起きて身支度を整えると、脱ぎ散らかされていたルイズの衣服を籠に集め、洗濯に向かったのだ。

まずは第一歩である。しかし、いつの世もそれにトラブルはつきもので、朱里も例外ではなかつた。

「はわ……、どうしよう？」

朱里は困つた。彼女は今初めて、魔法学院の中を歩いているのだ。洗濯できる場所など知らない。すなわち、道に迷つたのだ。

「そうだ、誰かに聞く！」

彼女はもつとも単純かつ、一番有効な方法で、この問題を解決することにした。

幸運なことに、人を探すのに、そんなに時間はかからなかつた。少しその辺の廊下を歩いていると、黒髪をカチューシャで纏めたメイド（朱里の世界用語では「侍女」と言つべきであろう）らしき女性

が、朱里と同じように洗濯物の入った籠を両手に抱えて歩いているのを見つけた。

「すみません」

朱里は丁寧に声をかけた。その声に気付いた、黒い髪のメイドが振り向く。

「はい？ あら、どうかしました？」

素朴な顔立ちの人だった。

（はわ～、優しそうな人だな～）

そう思つた朱里は、安心して尋ねた。

「私、今からお洗濯に行きたいのですが、その、洗濯ができる場所が分かりませんでして。よかつたら、一緒させていただいてもいいですか？」

「いいですよ。今から、私も行くところです」

「ありがとうございます～」

朱里は笑顔になると、ちよこんと可愛らしげに、一緒に付いて行くのだった。後ろから見れば、仲のいい姉妹のようにも見えただろう。

「ところで、変わった恰好ですね」

少し歩いた時、その朱里より年上なメイドの少女が言った。

「はわ？ そりですか？」

言われてみれば、朱里の恰好（頭に被つた長い薄緑のリボン付きの帽子に、やはり長いリボンで腰をとめた、襟元に鈴の飾りの着いたワンピース状のロングスカート）はこの辺では珍しそうだ。（元々いた世界でも、周りの同年代の子どもたちの恰好からは浮いているところシラッパはナシにしてもらいたい）

「あ、もしかして……」

メイドのお姉さんが解ったという顔をする。

「あなた、ミス・ヴァーリホールの使い魔になつたついで……」

「知つてこるのですか？」

「ええ。なんでも昨日、呪喚の魔法で平民の可愛い女の子を呼んでしまつたって。噂になつてますわ」

「可愛い……」

一瞬、朱里は照れくさくなつたが、ふとお互いに相手の名前を知らないことに気付いた。

「申し遅れましたが、私は諸葛孔明といいます。『孔明』と呼んでいただければいいですよ」

昨日のルーズとの会話で、名前のじりでやられこになつた

ので、もつ回じ轍は踏まないと、あえて、できるだけ簡単にこう。

「『ウメイちゃんね。ちょっと変わった名前ね。私はシエスタって
いこます。よろしく』

「シエスタさんですね。はい、よろしくお願ひしましゅ、あつ……」

最後の最後に舌を噛んでしまう朱里。そんな朱里を、シエスタと
名乗ったメイドの少女は、微笑ましげに見つめた。

ちなみに、洗濯場へ行く途中、朱里が何もないところで一、二回
ほど転んだことや、洗濯のときに、朱里が子どもらしく自作の「お
洗濯の歌」を歌い、それをシエスタが微笑ましげに見ていたことな
どは、また別のお話。

*

「おはようござまわ」

窓から朝日の光が差し込む中、ルイズはその声で目を覚ました。

「ルイズさん、朝ですよ。さあ、早く起きないと」

「う、うるさいわね。あと、もつ少し……」

「ダメですよ。朝寝坊は、お肌の大敵ですよ」

「い、言われてみればそうね、て……」

そこでやつと、寝ぼけたままだが、ルイズは我が身を起こした。

「あれ、あんた誰……？」

「孔明です」

「ああ、使い魔ね。昨日召喚した、名前のややこしい……」

そう言つてあぐびをしたところで、ルイズは気が付いた。

「おはよ／＼やれこませ」

そこには、昨日自分が召喚した、「使い魔」がいた。しかし、その表情は昨日の様子とは打って変わっていた。

「お、おはよ！」

ルイズは思わず片言で挨拶する。

(おかしい)

ルイズは思った。彼女の知っている「コウメイ」は、昨日、あんなに自分に対しても猛反発し、ものすごく怒ったかと思ったら、狂つたように泣き出すなど、まるで嵐をそのまま人間にしたかのような感じだった。

しかし、今ルイズの眼に映る彼女は、まるで嘘のよつこに静まり返っている。そればかりか、その表情は、なにか楽しげなことでもあったかのようだ、活き活きとしていた。

「あの、『ウメイ……？』

ルイズは訝しげに聞いた。

「はい？」

「その、あんた、怒つてないの？」

「怒つてこませんよ？」

思つてもいな返答だった。ルイズは慌てる。

「え？ いや、だって、ほひ。その、昨日……」

「ああ、昨日のことですね？」

田の前の少女は、ニシココと可憐らしげに微笑むと、言つた。

「過ぎたことをこつまでも気にしていくも、仕方のないことですね。それに、昨日はお騒がせして、申し訳ござりませんでした」

律儀に、ペレツと頭を下げる。それを見たルイズは、変な気分になつた。

(ちょっと待つて。なんのよ、この子。昨日はあんなに怒つてい

て、泣き叫んでいたの」、「この変わつよ。まさか、なんかのワナなの?」「コウメイのワナ?」

なぜか、自分でも意味のわからない言葉が咄嗟に思いつく。しかし、そんなルイズなどお構いなしに、田の前の女の子は言葉を続けた。

「そこに脱ぎ散らかされていた服とかは、先ほど洗濯しておきました。他に何かすることはありますか?」

「そ、そつ……。ありがとうございます。なかなか気が利くじゃない。と、とりあえず、服よ、服。服を着せてつけついだい」

「はい」

一ツコロと微笑みながら、ルイズに服を着せてあげる、「コウメイ」と朱里。そんな朱里の献身的な姿を、最後まで警戒し続けるルイズであった。

*

夜空に上る月は一つ……。

「これは漢帝国十三州の一つ、益州にある漢中郡。えきしゅう かんちゅう うぐん」

漢王朝の始祖である、高祖・劉邦が宿敵の西楚霸王・項羽を打倒する出発点となつた地にして、前後合わせて四百年近く続く、漢王朝の名前の元にもなつた地。

そこから、とある一人の人物が、「諸葛亮行方不明」で騒いでいる、水鏡先生の家へと向かい、出発して行くのだつた……。

第四席 ルイズ、孔明の眼を恐れるの」と（後書き）

第一回「ルイズと孔明の、ムダ知識講座！」

ルイズ「なにこれ」

朱里「まあまあ、落ち着いてください。ルイズさん。多分ですが、自慢したがりな作者さんのうんちく話なんて、ビックリするくらい終わると思いますよ」

ル「それならいいけど」

朱「それでは、話を進めてこまよしょ。今日のお題は『封建制』です
ゆ、あつ……」

『封建制と郡国制』

ル「なにかしら、これ」

朱「つまりですね、ルイズさんの国、トリステインと、私の生まれた漢王朝の制度の違いということですね」

ル「そういうことなの」

朱「では、ルイズさん。先にお願いします」

ル「わかつたわ。しつかり聞いていなさい！ ま、知つてるとほ思
うけど、わたしの国はもちろん、ハルケギニアの国々はほぼ全部、
魔法を使える貴族が自分たちの領地を持つて治めているわ。中には、

ゲルマニアのように、平民が金で領地を買い取つて貴族になるという、野蛮なところもあるわね。貴族の当主は当然、爵位を「えられて」いるわ。上から、公爵、侯爵、伯爵、子爵、そして男爵。それ以外には、実績でしか与えられない『シユヴァリエ』があるわ。そして、わたしの実家は名高き公爵家よ」

朱「典型的な封建制の国なんですね」

ル「そうよ。そして当然、爵位も領地も次期当主に継がれるわ。ちなみに、各貴族は、王軍とは別の、自分の軍も持っているし、平民から税金も思い思いに取つているわ」

朱「見方によつては、一種の国みたいですね」

ル「そうね」

朱「ありがとうございました。それでは、次は私が『郡国制』について説明しますね」

ル「わかったわ」

朱「郡国制は、各地を治めるのに、中央が交代で派遣する『太守』が治める『郡』と、皇族や功臣たちが与えられた領地『国』とに分かれている制度のことです」

ル「どうしてそんなややこしいことするのかしら?」

朱「ルイズさんの国のように、各地に諸侯を封じるやり方が、結果として400年にも及ぶ戦乱の時代を招いた教訓から、こうこうやり方が生まれました」

ル「400年で、長いわね」

朱「元々は、その戦乱を治めた秦の始皇帝が、定めた『郡県制』に基づいています。このやり方は、諸侯のような存在は生み出しません。しかし、それでは王朝の危機に国を守る基盤がありません」

ル「そりや、どこの誰かわからない人間の命令なんか、聞きたくないわよ」

朱「ですから、漢の始祖で、農民出身の劉邦さんは、自分たちが滅ぼした秦みたいにならないよう、皇族や功臣たちを各地の諸侯に封じ、一方で、国の都周辺の要地には『郡県制』を敷きました」

ル「農民が始祖で皇帝？ 意外とやるじゃない」

朱「なお、皇族や功臣たちの中に『王』に封じられた人たちがいました。これを『諸侯王』と呼びます」

ル「諸侯王？」

朱「ルイズさんで言つ、『公爵』みたいなものと思つてください。ただし、皇族でない功臣たちの『王』は、ほとんどが劉邦さんの生きている間に、『謀反』を理由に取り潰され、以降、『王』の爵位は皇族に限定されます。皇太子以外の皇子は、この『王』に封じられました」

ル「やっぱり農民だけに、やり方が汚いわね」

朱「結果としては、戦乱で民が苦しむ要素が減ったわけです。しか

し、皇族の王たちも、ハルケギニアの領地を持つた貴族たちみたいに、好き勝手やるようになり、それを劉邦さんの孫にあたる、景帝さん（劉備のご先祖様と言われる）の時代に抑えようとしたり、七人の王による反乱が起ります

ル「メチャクチャやるわね」

朱「ですが、作戦がお粗末だつたことと、民衆が支持したわけではないので、二か月で鎮圧されます」

ル「早っ！」

朱「その後、二度と同じことが起こらないように、各地の王の領地は削られた上、皇族の『諸侯王』や功臣の『列侯』には通常、軍隊を組織する権利や税率を決める権利は与えられず、その土地の軍政、民政は中央から交代で派遣される『相』が行つようになります。そして、諸侯たちは、ただ領地から上がった税金を受け取るだけの存在となりました。次の武帝さんの時代になると、各諸侯王は自分の男子全員に領地を分割して与えることができるようになりましたが、結果として、諸侯はますます力を失います。要するに、事実上の『郡県制』となつたわけです」

ル「お父様が聞いたら、顔をしかめそうな話ね」

朱「ちなみに、私の知り合いの劉備さんは、先ほどの景帝さんの息子、『中山（靖）王・劉勝さま』の末裔と言われています」

ル「へえ、あんたの知り合いで、皇帝の末裔がいたんだ」

朱「はい。ただし、建国から四百年も経っていますので、『皇帝の

子孫『』の数は凄いことになつてこらせんのです。まじで、中ヨリヤれる
は……」

ル「な、ビハしたのよー。」

朱「い、言えませんー。」

ル「なによ、気になるじゃないのー。」

朱「これはだめですー。絶対に言えませんー。だって、中ヨリヤれる
の子供の数が『二』『四』『二』『四』……」

ル「なによあれー。王様ビヒるか、ビヒのイヌよー。」

朱「はわわ……、ヒーとにかく以上で講座せお開きですよー。」

ル（ゲッソリ……）

おしまい

長々とすみませんでした。

続けるか否かは、皆さんの意見に従います。
それでは、次の話を楽しみに！

第五席 孔明、ルイズと張り合ひのじと（前書き）

いろいろあって遅れてしまい、すみませんでした。
本当はルイズの魔法の失敗まで行きたかったけど、無理でした。
今回はふざけたギャグです。
それでは、どうぞ！

第五席 孔明、ルイズと張り合ひのひと

「待つて……」

離里は暗闇の森の中を懸命に駆けた。彼女が今追っているのは、一匹の、虫みたいに小さな、金色の龍だ。しかし、どんなに追いかけでも、その距離は一向に縮まらない。

それでも、離里は追うのを諦めなかつた。どうして、ここまでおかしなことをするのか、もはや、彼女自身わかっていないようだ。いや、わかっているからこそ、追つているのかもしれない。

「あつ……ー?」

追いかけるのに夢中だつたせいだらう。離里は木の根に躡いて、前のめりに転んでしまつた。幸い、たいしたケガはなかつたが、起き上がるのに時間がかかつた。

「うう……」

泣きそうになる離里。

異変が起つたのは、その時だ。突然、目の前的小さな龍が、逃げるのをやめた。

「え……?」

思わず、立ち止まる。すると、金色の龍は、突然、その場で何度も

も、とぐろを巻くかのように、周回し始めたのだ。

「あわ……？」

雛里は小さい声を漏らしながら、その奇妙な光景に見とれていた。

と、その時。周回していた龍の光が強くなつたかと思つと、まるで、急に朝日が昇つたかのような眩しい光が辺りを照らしたのだ。雛里は思わず、両手で顔を押さえた。だが、眩しいのも一瞬だつた。光はすぐに収束し、夜の森に再び闇が戻つたのである。雛里の目の前を除いて。

「あわー……、これは……？」

田の前にあるものを見て、彼女は田を疑つた。自分のすぐ前、先ほどまで小さな龍のいた所には、まるで大きな鏡のような、縦に細長い、金色の光を放つ物体が現れていたからである。それは、あたかも「こっちに来い」と誘つているかのようだつた。

*

ルイズは朝から機嫌が芳しくなかつた。理由は簡単である。身支度が済んだので、朝食のために食堂へと向かうべく、自身の「使い魔」とともに部屋を後にした矢先に、自分にとつて「嫌な奴」と出

会つたからだ。

「おはよっ。ルイズ」

出会ひやいなや、そう挨拶してきたのは、燃えるような赤い髪の、ルイズとは（ついでに朱里とは）身長の高さも、胸の大きさも正反対の、褐色肌の少女だった。

「おはよっ。キュルケ」

ルイズは顔をしかめて、嫌そうに挨拶し返した。

「おはよっ」やれこましゅ、あっ……」

嫌そうな顔をしている「主」に一步遅れて、朱里がお行儀よく挨拶した。もつとも、うつかり舌を噛んでしまったが。

それを見た、キュルケと呼ばれた少女が、クスクスと笑った。

「あら、お利口さんね。ルイズ、あなたの使い魔って、その子？」

「そうよ。それがなに?」

「あつはつは！ 本当に人間なのね！ すごいじゃない！ しかも、こんなにお利口さんとくるなんて！ まるで『誰かさん』とは大違ひだわ！」

キュルケのこのセリフに、ルイズはますます不満そうに顔をしかめた。しかし、お構いなしと言わんばかりに、キュルケは言葉を続ける。

「いざれにしても、『サモン・サーヴァント』で、平民喚んじゅう
なんて、あなたしーわ。さすがばゼロのルイーズ」

「つるさんこわね

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違つて、一発
で呪文成功よ」

「あつそ

「はわわ、ケンカはダメです」

「大丈夫よ、お嬢ちゃん。ま、お嬢ちゃんみたいなお利口さんもい
いけど、どうせ使い魔にするなら、こいつのもいいんじやないか
しら。ねえ、フレイムー」

こんなやり取りの後、勝ち誇ったかのような声で、キュルケは自
分の使い魔を呼んだ。キュルケの部屋からのつそりと現れたのは、
真っ赤で巨大な、むんとした熱気を放つトカゲだ。それを見た朱里
は、驚いて腰を抜かしかけた。無理もないであろう。元いた国でさ
え、クマや虎などの猛獸に追いかけられたり、出くわしたりしたこ
とがあるからだ。

「はわわわーーー！」

「おっほっほ！ 驚かなくても大丈夫よ、お嬢ちゃん。あたしが命
令しない限り、襲つたりはしないから。臆病ちゃんね」

「なんですか、これーー？」

朱里が聞く。

「あら、もしかしてお嬢ちゃん、この火トカゲを見るのは初めて?」

「はい! それより、そばにいて、熱くないのですか?」

朱里の言うとおりだ。虎ほどの大きさのある、その火トカゲは、尻尾が燃え盛る炎でできている上に、口からもチロチロと火炎がほとばしっていた。しかし、火トカゲの「主」たるキュルケは気にしている様子はない。

「あたしにとつては、涼しいくらいね」

「これって、サラマンダー?」

「ここによつやく、ルイズが口を開いた。氣のせいか、悔しそうな表情が見て取れる。

「そうよー。火トカゲよー。見て? この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ? ブランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ?」

「そりやよかつたわね」

「『ぶらんじ』が何かはわかりませんが、とにかく、すいですう

「素敵でしょ。あたしの属性ぴつたり」

「あんた『火』属性だもんね」

「ええ、微熱のキュルケですもの。わざやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのですわ。あなたと違つてね？」

キュルケは得意げに胸を張つた。ルイズが負けじと胸を張り返したとき、朱里は召喚されて以来、初めて「ご主人様」に同情することになった。ルイズの方でも同じことを考えたかはわからない。それはともかく、かなりの負けず嫌いらしいルイズは、ぐつとキュルケを睨みつけた。

「あんたみたいに、いちいち色氣振りまくほど、暇じやないだけよ
キュルケはにっこりと笑つた。余裕の態度だつた。それから朱里の方を見つめる。

「やついたらお嬢ちゃん、お名前は？」

「あ、はい。諸葛孔明といいます」

「ショカツコウメイ？ ベンな名前」

「あう。その、呼びにくかつたら、孔明でいいですか？」

「「コウメイちゃんね。わかつた。それじゃ、頼りないご主人様をよろしくー」

「一言多いわよー」

「じゃあ、お先に失礼」

こんなやり取りの後、キュルケは颯爽と去つて行った。ちょこちよこと、大柄な体に似合わない可愛い動きで、サラマンダーがその後を追う。

「くやしー！」

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握りしめた。

「なんなのあの女！　自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！　ああもう…！」

「はわわ、お、落ち着いてください！」

朱里が懸命になだめようとすると、ルイズの怒りは収まらない。

「落ち着けるわけないじゃないの！　メイジの実力をはかるには使い魔を見ろって言われているぐらじょ…　なんであのバカ女がサラマンダーで、わたしがあなたなのよ！」

「お気持ちはわかりますが、落ち着いてください…」

「つるむといー… 平民なんかにわたしの気持がわかるわけないくせに。だいたい何よ、胸なんかツルペタのくせして…」

「なんですって！？」

今には、流石の朱里もカチンときた。他のことはともかく、胸のことを言われる筋合いはないからだ。朱里は顔を真っ赤にして怒った。

「貴族か平民かはともかく、なんで急に胸の話になるのですか！」

「なによ、本当のことといっただけじゃない！　わたしはあの女と比べたら全然及ばないけど、それでもあんたよりはあるわよー！」

「それが『めいじ』の実力とどう関係があるのですか！？』

「うつ。いや、それは。ど、とにかく、あんたみたいな『お子様』なんかよりは、わたしのほうがまだあるの！　これは変えられない事実よ！　わかつたら、せつせと認めなさいー！」

「誰が認めるものですか！」

「うるせー！　事実は事実なのー！」

「負けませんよー！」

「何をー！」

ドングリの背比べもいこうとこりであらひ。朝ご飯前だといつのこと、二人の間には、「グラマーナ女性」には絶対に見えることのない、凄まじい火花が飛び散っていた。

もつとも、同じ「お子様体系」でも、とある青い髪の少女は、この争いを見て「今日も平和」と言わんばかりに無視して通り過ぎていたが……。

その後、朝ごはんの際、自棄食いする少女の姿が見られたといつ。

*

余談だが、流石のルイズも、育ち盛りの女の子である朱里に、使い魔の動物たちのような餌をあげるわけにはいかず、かといって貴族専用の食堂のテーブルで食べさせるわけにもいかないので、どうしようかと困っていたところ、たまたまそれ違ったメイド（偶然にもシェスター）に頼んで、厨房で適当に食べてあげることにした。

その際、料理が得意な朱里は、厨房のコック長、マルトー親父をはじめとした料理人たちと意気投合し、そのことが、人知れず、魔法学院内の、後にはトリステイン王国の食文化史上、大きな影響を与えることになるのだが、それはまだ先のお話。

第五席 孔明、ルイズと張り合ひのJと（後書き）

第一回「ルイズと孔明のムダ知識講座ー」

ル「また始まつたわね」

朱「まあ、大田に見て付きましたあげましょ。それでは、今回の
お題はこちらでしゅ、あつ……」

ル「また噛んでるわよ」

『〇〇が無いなら？？を食べろ』

ル「今度はなにかしら」

朱「なんでも、まずは次の小劇場を見てほし」そ�です「

（小劇）（出演者の名誉の保護のため、匿名にてお送りします）
ナレーター「あなたは次の映像をどう思いますか？」

Gさん「麗〇様！ 大変です！」

Eさん「あら、斗〇。どうしましたの？」

G「領内で農作物が不作で、民たちは皆困っています！」

E「そんなこと私に聞かれても知りませんわ！」

Bさん「でも、流石にまずいっすよ。あたいらの食べるものも減つ
ちゃうんですから」

E「大丈夫ですか、猪〇子。解決策は、ちゃんとありますー」

G「本当ですか？」

B「たすがは麗〇様！ それで、解決策は？」

E 「農作物が不作なり、お肉を食べればいいじゃありませんか！」

B 「さつすが麗○様！」

G 「うえーん。ダメだよ、これー……」

(小劇おしまこ)

ル「いや、なんていうか……」

朱「救こうのなことは、いつこうことをこうのどしようか？」

ル「で、これが今回のテーマとなんの関係が？」

朱「はい。今の上の劇の話ですが、作者さんによく、似たような話が、洋の東西を問わず、あるとのことです。」

ル「例えば？」

朱「はい。まずは西から行きましょう。作者さんの話によると、ルイズさんのトリスティン王国は、実際の歴史における、『ブルボン朝フランス』を元にしているのです」

ル「それで？」

朱「ブルボン朝を襲った事件と言えば、『フランス革命』ですが、その直前、飢えに苦しむ民衆に王妃が言ったと言われるのが次の文です」

マリー・アントワネット『パンが無いならお菓子を食べればいいじゃない』

ル「いや、無理でしょ」

朱「そうですね。小麦がないなら、パンもお菓子もありません。ただし、この話は、王朝の悪を誇張するための作り話であつたという説が最近は有力だそうです」

ル「それじゃ、次は東をお願いするわ」

朱「はい。次は東ですが、こちらは私たちの元になった、『三国志』の正史』の少し後のお話です。正史において、私の元になったのが、『諸葛孔明さん』ですが、その宿敵として有名なのは、魏の軍人、『司馬仲達さん』です。問題のセリフを言つた人は、この仲達さんの『ひ孫』にあたります」

ル「英雄の子孫が、ね。よくあるパターンじゃないの」

朱「はい。仲達さんのひ孫、晋の一世皇帝、惠帝さんが問題の発言をした人物です。飢饉で穀物が不作で人々が困つてゐるときにした発言が問題となつています。その発言は次の通りです」

晋の惠帝（司馬衷）『（穀物が無いなら）どうして貧民どもは、肉粥を食べないのか？』

ル「本当に救いようがないわね」

朱「この話は、どうやら実際に言つたと言われています。私の元になつた人の『宿敵』の血をひく人間とは、とうてい思えません。余談ですが、その惠帝さんの父、武帝さん（司馬炎、仲達の孫、司馬昭の子）も食べ物に関するお話があります。ある日、家来の家に酒宴に行つた時の話です。それがこちら」

晋の武帝（司馬炎）「うむ」

家来「どうです、この蒸し豚料理は」

武帝「うまいじゃないか。そうだ、どうしたらこんなに美味しいできるのだ？ 何か、調理法にコツでもあるのか？」

家来「はい。その豚は、『人の乳で育てた豚』になります」

武帝「……ウゲ……！？」

ル「聞いただけで、吐き気のする話ね」

朱「はい、いくらルイズさんが高慢でぜいたくな食事をされているとはいえ、ここまではされないですからね」

ル「何気にひどい」と言つてるじゃないのー。」

朱「とにかく、この世も、下々の生活を知らない為政者とは、か
わいそうなものだと黙つておきましょう」
「ひ

ル「無視しないでよー！」

朱「ルイズさん。あなたもこの話を聞いた以上、贅沢は慎んでくだ
さいね。でないと、あなたの料理に『例の豚』を……」

ル「わ、わかった、わかったからーー！」

朱「さて、今日はここまでです。みなさん、食べ物は絶対に粗末に
してはいけませんよ」

ル「……心得たわ……」

おしまい

第六席 ルイズ、大失敗するの」と（前書き）

さて、今回は初めての授業です。
どうぞ！

第六席 ルイズ、大失敗するの」と

「今、すつしょく光つてたけど、なんだつたのかなー？」

暗闇の森の中で、桃香は松明を片手に、恐る恐る歩いていた。

彼女は朱里の手掛かりを求め、松明の明かりを頼りに搜索を行つていたのだが、先ほど、自分のいるところからやや離れた場所で、突然、不自然な光が辺りを照らしたのを目撃したのだ。いつたい何事かと思つた彼女は、その光の発生源と思しき所へと向かうこととした。

その場所に着くのには、そんなに時間はかからなかつた。だが、桃香はそこで、思いもよらないものを見ることとなつた。

「あれは、鳳統ちゃん？」

彼女が見たのは、水鏡先生の家で待つてゐるはずの、幼き少女、
鳳統　　すなわち離里だつた。

「どうしてこんなところに？」

疑問に思いつつも、すぐに声をかけようとした。だが、その時、どうも様子がおかしいことに気付いた。

「ん、あれは？」

一瞬、声をかけるのをためらつた。桃香が次に見たのは、離里の

すぐ前にある、金色に輝く、得体のしれない鏡みたいな物体だつた。そして、次の瞬間、彼女は目を見張つた。なんと雛里が、その鏡みたいなものに向かつて歩き出したのだ。

それを見た桃香の背筋に緊張が走つた。なぜかはわからないが、嫌な予感がしたからだ。

「待つて、鳳統ちゃん！」

慌てて止めようと、松明を放り出して走りながら、声を振り絞つて叫ぶ。だが、もう遅かった。桃香が声をあげたとき、すでに雛里の小さな手は、金色の物体に触れてしまつていた。

その時である。再び、辺り一帯が眩いばかりの光に包まれたのは。

「うへ、な、なに！？」

眩しさのあまり、桃香は目をつぶり、その上から両手で覆つた。それは強烈な光であった。しかし、それもすぐに止む。やがて、夜の森は、再び暗闇を取り戻した。

「うへ、眩しかったよー。あれ？」

よつやく眩しさから解放された桃香が異変に気がつく。

「鳳統ちゃんは、どう？」

思わず、その名前を口にして、自分の目の前を確かめる。

そこには、何もなかつた。先ほどまで目の前にいた、雛里の姿はど

こにも見当たらない。そして、ついさっきまであった、金色の鏡みたいなものもなかつた。唯一動いているのは、後ろにある、先ほど桃香自身が落してしまつた松明の残り火だけだつた。

「まさか、鳳統ちゃん……鳳統ちゃんまで……」

桃香はすべてを悟つた。朱里に続き、離里までもが姿をくらましたといふことに。

その後、桃香は辺りを懸命に捜してみたものの、何一つ手掛かりを見つけることができなかつたため、今見た光景を皆に伝えるべく、急いで水鏡先生の家へと向かうこととなる。

*

「はわー、大きな部屋ですう」

魔法学院の教室に初めて入つた朱里は、感嘆の息を漏らした。

元いた世界でも、いろんな所を旅してきたが、このように、大勢の人間が集まつて、授業を受ける場所を見るのは初めてだつたからだ。朱里とて軍師である以前に、好奇心旺盛な子どもである。思わず、あちらこちらに目線が行つてしまつ。そんな普通の子どものような朱里を見て、ルイズは自分でも気付かないうちに、思わず微笑

ましくなりそうだったが、すぐに表情を引き締める。

「いろいろ見るのは構わないけど、あまり騒がないでよ」

「わかつていますよ、もうー」

子ども扱いされたためか、まだまだ子どもな朱里は、可愛らしげに頬を膨らませた。シエスタの時もそうだったが、傍目から見れば、また別の意味で姉妹のようにもみえたことであろう。

部屋の奥に入つていこうとしたがつて、次第に人の数が増えていく。そこにいるのは、ルイズと同じように、黒いマントを着た少年少女たちである。皆、それぞれの使い魔を連れていた。フクロウ、ヘビ、カラス、猫など、朱里の世界でもいる動物から、全然見たことない生物もいる。これでは、見とれるなという方が無理である。

「あの足のこっぴあるトカゲはなんですか?」

「バジリスクよ

「あの皿の玉お化け見たいなのは?」

「バグベア」

と、まあ、このような会話が続いているうちに時間が過ぎたのである。

まもなく授業が始まるといつので、朱里はとりあえず、教室の後ろの方に控えることにした。（ルイズ曰く、使い魔は椅子に座ってはダメとのことなので）

やがて、扉が開いて、先生らしき女性が入ってきた。紫色のローブに身を包み、形だけなら雛里のそれに似た三角の帽子を被つた、温厚そうなおばさんだ。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシューヴルーズ、じつやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

その先生は、満足そうに微笑みながらこう言った。そして、ふと後ろの方にちょここんと控えている朱里の方を見ると、再び口を開いた。

「おやおや。中には可愛らしい使い魔を召喚した人もいるみたいですね」

シューヴルーズという先生は、半分褒め言葉で言ったつもりだったらしい。だが、これが思わぬ火種となつたようだった。

「おい、ゼロのルイズ！ 召喚できなかからつて、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

そう言つたのは、ややぼっちやりした体系の少年だつた。直後、教室中がどつと笑いに包まれる。

「違つわ！ きちんと召喚したもの！ そしたらこの子が来ちゃつただけよ！」

ルイズが負けじと言い返す。

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかつたんだろう？」

教室中の生徒が、ゲラゲラと笑う。朱里は最初、何が起こつたかわからなかつたが、やがて理解した。ルイズが皆からバカにされているのだ。それにしても、わからないものである。何が可笑しくて、皆こんなに笑つているのか。始めのうちは黙つていたが、とうとう口を開かずにはいられず、朱里は自らの声を張り上げた。

「静かにしてぐだせー！」

思わぬところからの大声に、一瞬、何事かと呆気にとられた生徒たちが、一齊に朱里を見た。急に集まつた視線に、思わず恥ずかしくなるものの、朱里は元々、正しいと思つたことは、面前に刃を突き付けられても言い通す性格である。勇気を振り絞つて、次のセリフを口にした。

「皆さん、いつたい、ここに何をしに来ているのですか！？ 魔法の勉強しに来たんでしょう！ それがいつ、他人の悪口を言う勉強になつたんです！？ 恥ずかしいと思いませんか！」

しばらく、教室中が沈黙に包まれた。誰も、うんともすんとも言わない。

一番初めに、我に返つたのは、先生であるシュベルーズだった。彼女はコホンと咳をする振りをすると、皆に言つた。

「そりですよ、皆さん。ケンカしている場合ではありません。それでは、授業を始めましょー！」

その後の授業は、じばりくは順調だった。

*

ルイズは複雑な気分だった。自身の使い魔の「コウメイ」のことのせいである。

(あの子、いつたい何者なのかしら?)

そう思はずにはいられない。今朝になつてからといつもの、前日の嵐のよくな態度とは打つて変わって、自分のためによく働いてくれたかと思ったら、くだらないことで張り合ひ。教室や生物を見て、見かけどおりの子どものよにはしゃいだかと思えば、たつた一言、「貴族だけの教室を静かにさせてしまつ。そして今は、後ろの方に控えながら、眞面目に授業を聞いている。先ほど、シユグルーズが「鍊金」の魔法で赤土を真鎗に変えた時には、新しい玩具を与えた子どものよつに、小さく歓声を上げながら興味津津と見ていた。

(なんとか、ただの子どもにしては、いろいろと優すぐれの)

そんな風に、頭の中が朱里のことについてぱいだつた。だから、つい余所見をしてしまつたのである。

「ミス・ヴァリホール！」

ショーヴルーズの注意が飛んだ。余所見しているのを、見咎められてしまつたのだ。

「は、はーー」

「授業中にパンを覗てこるのはどうですか？」

「すこせん……」

「余所見をする暇があるのなら、次のお手本をあなたにやつしてもいいましょ!」

「え？ わたし？」

「やうです。パンのあるパンを、望む金属に変えてパンになさこ」

気まずい沈黙が流れた。

*

(アハハハ『ゼゼ』ってなんだりひへ)

朱里は考えていた。なんでも、この世界の魔法使い「メイジ」には、それぞれ「二つ名」というものが存在するらしいことは、人の会話を聞いているうちにわかった。それが「微熱」だの、「風上」だの、「赤土」だのならば、その人の得意な魔法に由来するものであろうことは、容易に想像がついた。

しかし、朱里は「ぜろ」「じう」という単語の意味を知らない。ただ、先ほどの一言い争いから想像するに、あまりいい意味ではないようだつた。（せうだ。授業なら、きっとルイズさんも魔法を使う機会があるはず。その時にわかるかも）

そう思つた朱里は、ルイズが魔法を使つ瞬間を、今か今かと待つていた。そして、ついにその時がきたのだ。だが、どうも様子がおかしかつた。

「ミス・ヴァリエール。どうしたのですか？」

先生が催促する。しかし、ルイズは困つたようにもじもじするだけだ。その時、朱里の知つてゐる顔が立ちあがつた。朝に出会つた、キュルケだ。

「先生、やめといたほうがいいと思つますけど」

「どうしてですか？」

「危険です

（危険？）

疑問に思つ朱里。そんな彼女をよそに、教室中の生徒全員が、キルケに同調して、うんうんと頷く。

「危険？　どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですかね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやつていらっしゃい。失敗を恐れていっては、何もできませんよ？」

「ルイズ、やめて」

キルケが蒼白な顔で言つたが、ルイズは諦めるビシロが立ち上がつたのだ。

「やります」

緊張した顔で、教室の前へと歩いて行くルイズ。そして、先生の指示の元、杖を振り上げた。

朱里は思わず見とれていたが、その時、足元の方から声がした。

「コウメイちゃんだけ？　早く隠れた方がいいわよ

言つたのはキルケだつた。彼女は既に椅子の下に避難しており、そのまま隣では、眼鏡をかけた、青い髪の女の子が同様に隠れながら、「コクリ」と頷いていた。

「え、それってどういう

「

聞き返そうとしたときだった。凄まじい爆発が起こったのは。

何が起こったのか、確認する暇もなかつた。教室の後方にいたにもかかわらず、朱里はもろに被害を受けることになつた。爆発の際の爆風をもろに受けたため、朱里の被つてゐる帽子が吹き飛んだばかりか、彼女の小柄な体は床に叩きつけられた。幸い、たいしたケガはなかつたが、床に叩きつけられた朱里は、またしても目を回して氣絶する羽目になり、おまけに煤と煙で服も汚れるといづ、踏んだり蹴つたりな目に遭つたのであつた。

周りで様々な使い魔たちが暴れまわり、阿鼻叫喚の地獄が繰り広げられる中で、朱里が唯一わかつたことは、「ぜろ」の意味が、「成功率が零れい」である、ということだけだったのである。

（挙首、皆さん。私、頑張ると約束しましたが、やはり先が思いやられるようです）

意識が薄れゆく中、朱里はこいつ思った。

第六席 ルイズ、大失敗するの」と（後書き）

第三回「ルイズと孔明のムダ知識講座ー」

ル「もう三回目? しぶといわね」

朱「そうですね。はたして何回まで続くのでしょうか?」

ル「そんなの知らないわ。まあ、百回続けば、ほめてあげてもいいわ」

朱「そうですね。それでは、今回もそろそろ始めましょう。今回の
お題は『ひりでしゅ、あう……』

ル「『一度ある』とは『二度ある』て本当みたいね」

『鍊金術』

ル「鍊金、ね」

朱「はい。本編でもやつていましたが、今回は鍊金についてやつた
いと思います」

ル「それじゃ、頼むわよ」

朱「はい。『鍊金術』は、これも洋の東西を問わずに行われたもの
で、名前の通り、金を作り出す技術を、やがては不老不死の薬を作
ることが目的になつて、盛んに行われたものです」

ル「魔法があるハルケギニアなら、金属を作るための鍊金は当たり前に行われているけど、不老不死の手段は流石に無いわね」

朱「はい。ですが、昔の人々は、様々な金属や鉱物、薬を研究し、それをもとに、人工的に金や『靈薬』を求めたといいます。ことに、西側の鍊金術師たちの目標は、ありとあらゆる物を金に代え、さらには永遠の命を与える靈薬『エリクサー』を生み出す、『賢者の石』を作るのに躍起になつていたといいます」

ル「凄いことするわね。で、結果は?」

朱「もちろん、上手くいくわけはありませんでした。ただし、様々な金属や物の研究には役に立つことでしょう。さて、次は東の話をします」

ル「わかつたわ」

朱「漢の高祖、劉邦さんがまだ一人の農民だったころ、時の大陸を支配していたのは、秦王朝の『始皇帝』でした。始皇帝は、天下を統一し、すべてを我が物とした頃から、不老不死を求めるようになります」

ル「それで?」

朱「そういうわけで、始皇帝は『神仙』を説く『方士』たちを大勢抱え込むようになり、彼らに薬を探させたり、作らせたりします」

ル「なんか、胡散臭いんだけど」

朱「はい。実際に、徐福という人が、仙人の島から不老不死の薬を

もらつてくると、始皇帝を説き伏せ、大量の金銀財宝と大勢の童男童女を連れて、東にある仙人の島へと船で出発したきり、行方不明になつたという話もあります

ル「もし、最初から騙すつもりだつたなら、とんでもない詐欺ね」

朱「そうですね。なお、一説では、徐福は倭国（日本）で無くなつたとも言います。さて、話を鍊金術に戻しますが、始皇帝が作らせた『不老不死』の薬とは何だつたのかを見ていきたいと思います」

ル「あまりいい予感はしないわ」

朱「その通りと言わねばなりません。その不老不死の薬は、『仙藥』、『金丹』などといいましたが、その材料は以下の通りです

- | | |
|-----|---------|
| 材料 | ・水銀 |
| | ・ヒ素 |
| | ・鉛 |
| | ・強酸性の液体 |
| その他 | |

ル「て、全部毒じゃない！」

朱「そうです。しかし、いつの世にも迷信があり、特に水銀などは、不老長寿の靈薬とされていました。ですから、始皇帝の食事には水銀が混ぜてありましたし、始皇帝のお墓、『始皇帝陵』の地下宮殿には、水銀の海と河が作られ、機械仕掛けで絶えず流れるようにしてあつたといいます」

ル「ぞつとするわね」

朱「ですから、そんな状況で、始皇帝が49歳まで生きれたことが不思議と言わなければなりません」

ル「そりや、驚くわよー。それにしても、不老不死を求めているのに、なんで自分のお墓を作るのかしらね」

朱「昔の人のことはよくわかりませんので……」

ル「ま、とにかく、わたしはそんな変な薬なんかいらないわ

朱「そうですね。たとえ、貴族であれど、平民であれど、一生懸命、楽しく生きるのが一番ですね」

ル「なかなかいい」と「つじやない」の。よし、それならこれからも楽しく――

朱「ルイズさん。楽しくと言つても、朝からお酒を飲んだり、脂っこいものばかり食べてはいけませんよ。自分の体、くれぐれも大事にしてくださいね」

ル「わ、わかってるわよー。それくらいー。」

朱「それでは、歸さん、また次回会こましょひ」

ル「見ないと許さないんだからあー。」

おしまい

第七席 孔明、ルイズを慰めるためのレシピ（前書き）

やつとしました。

今回、恋姫世界はギャグです。
それでは、お楽しみください。

第七席 孔明、ルイズを慰めんとするのじと

「これは、？州泰山郡。名前の通り、道教の聖地、五岳の一つである、泰山のそびえ立つところである。この聖地は、かつて秦の始皇帝、前漢の高祖・劉邦やその曾孫の武帝・劉徹、そして後漢の始祖、光武帝・劉秀などの偉大な歴代皇帝たちが「封禪」の儀式を行つたことで知られている。

孔明、鳳統の両名が行方不明になつて三日後。水鏡宅にて未だに懸命の搜索が続いている中、そんなことは知らない者たちが、呑氣にもこの山の麓に集まつていた。

「美羽さん！ なんであなたがここにいますの？ 小娘はさつさとお家に帰つて、蜂蜜でもなめていればいいのですわ！」

「それは妾の台詞じや。麗羽義姉さまこそ、なんでここにいるのじや？」

片方は見事な金髪ロールの、見るからに高飛車そうな外見の女性。もう片方は、さらりとした長い金髪を青いリボンで飾つた、見るからにわがままそうな小娘。

金髪ロールの女性は言つまでもなく、冀州一帯の太守にして、名門「袁家」の当主こと袁紹（字は本初。真名は麗羽）。家柄を鼻にかけて、傲慢で贅沢ばかりしている、無能な領主として有名だ。

もう一人の小娘の方の名は袁術（字は公路。真名は美羽）。袁紹こと麗羽の従妹で、幼い外見に似合わず、一応は荊州の南陽郡の太

守の肩書きを持つのだが、外見通りの幼い性格で、非常にわがままで、蜂蜜を舐めることにしか能がないが、何故か歌だけは非常に上手な女の子である。

どうして、名門出身のこの二人が、わざわざ自分の領地を遠く離れた泰山の地まで来ているのかというと、それは次のような経緯からであった。

『某月某日に、泰山の頂上にて、神への祈りを捧げし者、宝を手にせん』

大陸のあちらこちらで、このような怪しげかつ、胡散臭い予言が広まっていた。いつもあるような馬鹿馬鹿しい話で、こんなうまい話があるわけがないと、誰もが無視していたのだが、ちょうど、洛阳での宴会から自分の領地に帰ってきたばかりの、袁家の両頭は、さっそくこの噂に飛びつき、わずかなお供だけを連れて、のこのこと泰山までやって来たのである。

仮にも太守である者たちが、自分の領地を放り出して、わざわざ遠き泰山に赴くなど、暇にもほどがあるというものだが、この二人にはそのようなことを言つても通用しないようだつた。

ただし、麗羽にしる、美羽にしる、互いに想定していないことがあつた。山の麓で鉢合わせになつたことである。

従姉妹同士であるこの一人は、犬猿の仲で、しばしば張り合つことで有名であった。

「いいですか、美羽さん。名門たる袁家の当主はこの私なのです。よつて、この高貴な私こそ宝をする資格があるのですわ」

「なにを囁ひのじや！ そんなのは全然関係ないのじや！ 姫にだつてその手を手にする資格くらいはあるのじや！」

「いいえ、ありません」

「あるのじやー。」

「ありませんー。」

「あるのじやー。」

キリのない喧嘩を繰り広げて、睨みあつ一人。そこへ、袁紹軍の「知力³⁶」じと、顔良（真名は斗詩）が割つて入る。

「麗羽さま、それから袁術さまも落ち着いて。そのままケンカばかりしてると、日が暮れてしまつますよ」

「アツでしたわ。こんな小娘にかまつている暇などありませんわ」

「一皿めこのじやー。」

「まあまあ、お一人とも」

斗詩の懸命の取りなしのおかげで、ひとまずその場は収束する。

「それより、さつさと登つちゃこましょつよ。どうせ頂上まで行かないといけないんだしだ」

そう言つたのは、袁紹軍一枚看板のもう一人である文醜（真名は

猪々子)である。彼女たちは、麗羽や美羽が言い争いをしていった間、ずっと待たされていたのだ。

「それに、山登りはいい運動になるし、みんなで斗詩のおなかの肉も

「余計なこと言わないで…」

「ねえと」

「そうですね。先手必勝、ねえと登るに限りますわ。まあ、もつとも……」

そう言つて、麗羽は美羽の方をチラシと見る。

「！」と足腰の弱そうな小娘、どうせ半分も登らないにつかしくたばってしまつてしまつてしまふナビ

「わへ、なにを…」

「おーまつまつまー！」

「言いたい放題である。

「わへ、猪々子、斗詩。れつれと行きますわよ。」

「「はー、麗羽わー。」

好きなだけ言いまくると、麗羽は猪々子と斗詩を連れて、泰山の頂上を目指して先に出発していった。

「おーー、馬鹿こしおつー！ 張勲！」

悔しくなった美羽は、すぐ後ろにいる側近の張勲（真名は七乃）を呼んだ。

「はー、美羽さま」

「妾たれもひと登るのじやー」

「ですが、美羽さま。何の準備もなしに、こんな険しい山道を登れば、冗談抜きに途中でくじたれてしまいますよ」

たしかにその通りだ。泰山はただでさえ険しい山で、まして美羽のような子どもが簡単に上り下りできるような山ではない。

「むへ、たしかに。それなら張勲。お主がなんとかせてこまゆ」

「じ心配なく。実はこんなこともあるつかと、きちんと対策もとつてこまゆ」

そう言つて七乃是一枚の地図を広げる。

「さすがは張勲。で、対策とはなんなのじや？」

「はー。じつは袁紹たちの知らない、秘密の抜け道があるんです」

「ほー、それなら楽勝ではないかー！」

美羽の顔が、ぱあっと輝く。

「よし行こう、張勲。宝は全部、妾のものじゃー！」

「わっすが美羽さま。終わリよければすべてよし、な横着な考え方。聞いて惚れ惚れしますわ」

「わははは！ 苦しそうな、もつと褒めてたも」

ハハして、欲望の詰まった登山レースの幕が明けたのであった。ところで、「愚者と愚者とが出会いしどき、事故は起る」という。はたして、彼女たちはその言葉の意味を実現してしまったのだが、その時には宝のこと夢中で、思いも及ばなかつた。

*

爆発でめちゃくちゃになつた教室で、朱里はルイズと共に後片付けをしていた。

他に手伝つ者がいなければ、教室を吹き飛ばしたルイズへの「罰」であるためで、唯一、「使い魔」である朱里だけが連帯責任で働いていた。

幸い、朱里は手先が器用なので、壊れた物を修理したり、新しく作り直したりはできた。しかし、力の問題だけはどうにもならない。おかげで、重い物を運ぶのには苦労したものだ。もつとも、時間的に余裕があれば、重いものでもすぐに運べる道具を作ることもできただに違いないが。

結局、かなりの時間がかかったものの、それでもなんとか教室の外見だけは取り繕い、あとは煤や埃をほうきで掃くだけとなつたので、朱里はほうきで塵を集めていった。

床を掃いているときに、ふとルイズの方を見る。彼女は、雑巾を片手に、机に寄りかかっていた。机を拭いているといつよりは、うな垂れていると言つべきであろう。

朱里はそっと、声をかけた。

「ルイズさん？」

「なによ」

ルイズが元気のない声で、ぶつぶつと返事をする。

「その、あまり気にしない方がいいと思いますよ」

「気にするに決まっているじゃないのー！」

朱里はなんとか立ち直つてもらおうと思つたのだが、ルイズからの返答は、悔しさの入り混じつた怒鳴り声だった。

「こいつやってもあるあるのよ！ どんな呪文を唱えても、爆発よ！」

一度だつて、成功したためしがないわ！　おかげで、失敗するたびにキュルケや他の皆からはからかわれるし、先生どころかお母さまやお姉さまたちまで首を傾げるのよー。あんたなんかに何がわかるのよ！」

自分の感情を隠しきれず、一気に言葉を吐き出す。その声色と表情から、ルイズが今までどんなに悔しい思いをしてきたかが、朱里にもよく伝わった。

朱里はしばらく目を閉じて考える。

(もし、水鏡先生が、今の話を聞かれたら、なんて言つかな？)

ふと、そう考える。たしかに、水鏡先生なら相談に乗ってくれるかもしれない。だが、現に話を聞いたのは朱里であり、当然、水鏡先生はこの場にはいないのだ。

(いけない)

朱里は慌てて首を横に振った。

(これは私がなんとかしなくちゃ)

そして、意を決して口を開く。

「ルイズさん

「なによ」

「確かに、魔法を使えない私には、ルイズさんの気持ちが全部わか

るわけではありません

「当たり前じゃないのー。平民なんかに貴族の気持がわかるわけ

」

「最後まで話は聞いてくださいー。」

朱里は少しだけ声を張り上げ、ルイズを諭した。

「確かに、『魔法を使えない私』に、ルイズさんの気持ちが『全部わかるわけではありません。ですが、『魔法を使えない』からこそ、わかることがあるんです』

「どうこう」と

訝しげるルイズに対し、朱里はゆっくつと言葉を紡ぐ。

「一つお聞きしますが、ルイズさんが魔法を使おうとするといつも爆発してしまつのですね？」

「そうよ

「成功したことば?」

「だから、一度もないつて言つてゐるでしょ?」

馬鹿にされたと思ったのか、今にも怒りそうな表情のルイズ。しかし、朱里は首を横に振ると、いたって冷静に話を続ける。

「だいたいわかりました」

「なにがよ」

「ルイズさん。まず、あなたが魔法を使おうとするとき、『じつじうわけか必ず爆発する。魔法を使える人たちから見れば、『ルイズさんは、魔法を使えば必ず爆発する』としか映らない。だから『ゼロ』すなわち『零』といつ』一つ名が付けられる」

「それがどうしたとこいつのよー。」

「まだ話は続きがあります。今言つたのは、『魔法を使える人から見たルイズさん』です。ですが、私のように『魔法を使えない人』から見たルイズさんはどうでしようか?」

「『じつせ回じ』ことじょひ、平民の考え方なんて」

貴族ゆえに平民を軽視するよつなことを言つ。こればかりはルイズ一人の責任ではないので、じつじよつもないが、朱里は黙つて次の言葉を言つた。

「私に言わせてみれば、そうではありません。少し考えてみてください。いいですか?『魔法を使えない人』から見ればルイズさんは『魔法は失敗ばかりだけど、爆発させることだけは誰にも負けない』と映るんですよ」

「え?」

一瞬ルイズは呆然とした。「平民から見た自分」のことなど、今まで考えたことなどなかつたからだ。しかし、すぐに気難しそうな表情でそっぽを向く。

「た、たしかにそういう考え方もあるみたいね。だけど、『爆発させる』ことだけは誰にも負けない』なんて、あまりうれしくないわ」

「その言葉をどう捉えるかは、ルイズさん次第です。ただ、私に言えることは、ルイズさんの二つ名は、『一度も成功できない』の『零』ではなくて、『一つだけできる』の『一』の方がふさわしいのではないかということです」

「『一』ね……」

あまりしつくりとこないのか、少し考えるルイズ。そんなルイズを見て、朱里は微笑ましげに言つ。

「はい。それに、ルイズさんは一度だけ、魔法が成功したことがあるって、私はちゃんと知っていますよ」

「は？ いつよ、それ」

首を傾げるルイズを前に、朱里は楽しそうに微笑む。しばらくして、ルイズはハツとした。何かが解つたようだ。

「まさか、それ、わたしがあなたを召喚したこと、とか言わないわよね」

気のせいいか、眉がひくひくと動いている。

「馬鹿を言わないでけよ！ 『誰があんたを召喚したことを『成功』だなんて、認めてやるか！』

やう言つと、だいたい片づけ終わった教室を後日に、ずかずかと歩き出す。

「ほり、ほせりとしてないで。さあせと毎日飯に行くわよー。」

「はーー。」

こうして、二人は食堂に向かうことになった。

その途中、歩きながらルイズは口を開いた。

「あと、コウメイ。その、なんて言つか、ありがと　」

彼女なりに感謝の言葉を述べたつもりだった。しかし、残念ながら、朱里にこの言葉が届くことはなかった。なぜなら、ルイズがこう言つて振り向いたとき、朱里ははるか後ろの方で、転んでいたからである。

同時刻、召喚の立会人だったコルベール先生が、図書館にて、とある本を片手に慌てていたのは、別のお話である。

第七席 孔明、ルイズを慰めんとするの」こと（後書き）

第四回「ルイズと孔明のムダ知識講座ー」

ル「とうとう四回目ね」

朱「それでは、今日も張り切ってこきましょ。今日のお題はまちらです」

ル「あ、今日は瞞まなかつたわね」

『夢見る男たち』

ル「夢を持つ男？」

朱「今回のお話は、私たちの故国、漢王朝から、前漢の始祖、高祖・劉邦さんと、後漢の始祖、光武帝・劉秀さんのお話を取り上げてみたいと思います」

ル「リュウホウの方は前も聞いたわ。たしか、農民出身の始祖だとか」

朱「はい。ですので、まず、先に劉邦さんの方から話を進めていきたいと思います」

ル「わかつたわ」

朱「以前言つた通り、劉邦さんは元々は貧しい農民でした。しかも困つたことに、仕事も急げてばかりで、酒飲みで酔つ払つては裸踊

りをし、女たらしという、典型的なダメ人間で、父親からは『働き者の兄を見習え』と怒られる始末でした』

(朱里の顔真っ赤)

ル「だらしないわね。本当に後日皇帝になる人間とは思えないわ」

朱「それがなつてしまふのですから、驚きです。そんな劉邦さんにまつわるお話と言えば、次のお話です」

ル「どんな話?」

朱「ある日、劉邦さんが秦の都へ働きに行つた時、当時、だれも逆らえない実力者、秦の始皇帝の行列がやつてきたのです。他の見物客に混じつて、始皇帝の行列を見ていた、若き日の劉邦さんは、次のように言つたといいます」

劉邦『ああ、男と生まれたからには、ああいつ風になりたいものだな』

ル「なるほど、よくあつりそうな話ね」

朱「なお、ちょうど同じ時期、後に劉邦さんと天下を争うことになる西楚霸王・項羽はこの時十三歳の少年でしたが、彼は故郷の街で、巡行に来た始皇帝の行列を見た時、次のように言つたといいます」

項羽『彼、取つてかわるべし! (俺があいつに取つてかわつてやる!)』

ル「何というか、大胆ね」

朱「はい。ですから、この二人の台詞は、お互いの性格の違いをよく現していると言えるでしょう。後日、劉邦さんは秦を滅ぼすのに一役買い、さらに長きにわたる苦しい戦いを経て、項羽をも倒して天下を取ることになったのです」

ル「まあ、夢が叶つてよかつたんじゃないかしら」

朱「そうですね。執念というものは凄いですし。さて、次の話に移りましょう。」

ル「次と言えば、今度はリュウシユウ、とか言つたわね」

朱「はい。次は後漢の始祖、光武帝・劉秀さんのお話です。上の劉邦さんの立てた漢王朝は、建国から一百一十年ほどで、外戚だった王莽（おうもう。十代皇帝・元帝の皇后の甥）による帝位簒奪で滅び、漢の劉氏一族は皇族としての地位を失います。しかし、王莽の政治が現実を無視したでたらめなやり方で国は疲弊し、怒った豪族や民衆たちが『漢復興』を掲げて立ち上ります。劉秀さんは、そんな反乱に参加した、『数万人もいる皇帝の末裔』の弱小豪族の人にすぎませんでした」

ル「そのリュウシユウって、どんな男だつたのかしら？」

朱「はい。劉秀さんは仕事は真面目にこなし、性格はおとなしく、あまり欲ももたない人だったといいます」

ル「リュウホウとは大違ひね」

朱「もっとも、ショッちゅう、つまらない冗談を言つたり、勉強の

ために都・長安に行つた時は、悪友と割り勘で驢馬ロバを買つたり、蜂蜜を売つて儲けようとして失敗したり、役人のふりをして夜遊びして捕まつたりと、羽目を外す」とも多かつたようです」

ル「ふーん。で、そんな彼の夢はどんなのだつたのかしら?」

朱「はい。劉秀さんの夢は、いたつてさわやかな夢でした。それが次の一文です」

劉秀『宦になるなら執金吾（宦廷近衛隊の長官）、妻を娶らば陰麗華』

ル「本物にせよやかね」

朱「劉秀さんは、かつてよく着飾つた近衛軍団に憧れ、それを率いる長官『執金吾』になりたかつたようです。そして、自分の故郷に住んでいた豪族の美少女、陰麗華（いん れいか。後の陰皇后）を嫁にしたいと望んでいました。余談ですが、劉秀さんが麗華さんに一日惚れした時、劉秀さんは二十代前半、麗華さんはたつた十三歳だったといいます」

ル「それってもしかして口……？」

朱「ははー、言つちやダメです！ それはともかく、劉秀さんは、念願通り、麗華さんを妻にすることができました。そして、宦の方は、執金吾を越えて、皇帝になつてしまつています」

ル「凄いわね」

朱「皇帝（光武帝）に即位した後の劉秀さんですが、皇帝になつた

後にも、『自分は皇帝にはなりたくなかった。どうせなら執金吾になりたかった』と言っていたそうです。面白いことに、皇帝となつた劉秀さんがその執金吾の職に任命したのは、皇后となつた陰麗華さんのお兄さんでした

ル「自分のなりたかった職に、奥さんのお兄さまを任命するなんて、太つ腹ね」

朱「もう一つ余談ですが、この劉秀さんに仕えた將軍、馬援さんは、私の知り合いの馬超さんと同じく、先祖様に当たります。さて、もう一つお話しします」

ル「なにかしあり?」

朱「三国志の正史の劉備さんのお話です。『正史の劉備さん』は、私の知り合いの劉備さんと同じく、皇帝の末裔なのに、席を売つて暮らすところ、貧しい生活をしていました。そんな彼が、皇帝になりたいといつ志を現したお話が、こちらです」

劉備（正史）「俺は、この桑の木の枝のような屋根のついた車に乗るんだ」

ル「どうして意味?」

朱「屋根つきの車。つまり皇帝専用の天蓋車のことです。それに乗りたいということ」とは

ル「皇帝になりたい、といつことね」

朱「そうこういつことです。さて、そろそろお開きとこきましょ」

ル「ヒジルで、作者曰く、『次回の講座』の題は決まっているんやつ
だけど?」

朱「そりゃあ、何か紙が……」

(次回の予定を見て真っ赤になる朱里)

ル「どうしたのよ?」

朱「これは、見せられません!」

ル「どうしたのよ?」

朱「はわわ、ダメです! ダメです!」

ル「見せなさいよ!」

朱「はわわー!」

おしまい

第八席 ギーシュ、孔明の隕石盤のijと（前書き）

今回のお話は、いよいよ、あの野郎の登場です。
後半、少しふざけています。

第八席 ギーシュ、孔明の罠に陥るの」と

ここは荊州の街、襄陽。じょうよう漢水の南岸に位置する大きな街で、対岸の樊城と共に軍事、交通の要所である。

孔明、鳳統行方不明騒動が起こつて既に一週間。この襄陽の、とある料亭にて、道を尋ねる者の姿があつた。

「失礼だが、ご老人。水鏡殿のお屋敷の場所を教えていただけないか？ この近くにあると聞いたのだが」

「ああ、水鏡先生ですか。私もよく、腰に効くお薬を貰いに行くものでしてのう。この襄陽から少し東に歩いたところにある、よく霧が出る山の中じゃ」

「かたじけない」

孔明、鳳統行方不明で悲嘆に暮れる者たちに、一筋の希望の光が差し込み、新たな旅立ちの時が訪れるのは、目前に迫っていた。

「わあ、『ウメイちゃん。凄く似合っているわ』

シエスタが感嘆の声をあげた。

「そうですか？ そんなに似合っていますか？」

大きな鏡の前で、朱里が少し恥ずかしそうに聞き返す。

「ええ。『ウメイちゃんには絶対似合つとは思つていたけど、本当にここまで似合つとは、思つてなかつたわ』

微笑ましげにシエスタが褒め称えた。

現在、一人がいるのは、厨房近くの、メイドたちの更衣室だ。そこで何をしているのかといふと、シエスタが朱里に、メイド服を着させていたのである。

どうしてこうなったのかといふと、食堂の前でルイズと一緒に別れた朱里が、お皿ごはんのために厨房を訪れた時に話を戻さなければならぬ。

お皿のシチューをおいしく頂いた朱里が、お礼返しに何かをしたと言つたことから、全では始まつたのである。ちょうど、食堂の貴族たちに出すためのデザートのケーキを用意していくところだった。

その時、シエスタがいいことを思ついたのである。

「やつだ、『ウメイちゃん。せつかくだから、ちょっと来て』」

そう言って、ショスタは朱里の手を引いて更衣室に連れて行つた。そして、更衣室に着くと、例のメイド服を勧めたのである。幸か不幸か、そのメイド服のHプロンドレスは、朱里の小柄な体にピッタリなサイズだつたのである。

「せつかくだから、これ着てみる?」

まるで妹に服を勧めるかのように言つショスタ。

「え、でも悪いですよ。それに、私に似合つかわかりませんし……」

と、少し恥ずかしそうに、遠慮っぽく言つ朱里。

「遠慮しなくていいのよ。着替えた方が動きやすい」と思つじ。それには、「ウメイちゃんだったら絶対に似合つよ」

と、ショスタがもつともりじこことを言つ。結局、朱里は折れて、メイド服を着用してみたところ、先ほどのよつた、ショスタからの大絶賛の言葉を賜ることになつたのである。

たしかに、食堂でお手伝いするのなら、動きやすいだらうし、人々着ている服を汚す心配もない。

「あつ……、ですが、その、なんだか……」

しかし、それを差し引いても朱里は恥ずかしそうな表情を隠すことができるないでいた。

しかし、それが却つてつぼにはまつたらしい。ショスタは微笑みながら、次のように言つた。

「そうだ。せつかくだから、コウメイちゃんにそれあげるね」

「え？」

「うして、ご主人様の預かり知らぬところで、朱里のハルケギニア・コスチューム・コレクション、第一号が誕生したのであった。

*

さて、服も着替えたところで、いよいよお手伝いである。朱里はケーキの入ったお盆を手に、シエスタと一緒に「アルヴィーズの食堂」に入った。そういえば、朱里がこの食堂に足を踏み入れたのは、これが初めてである。

「はわ～」

中の広さといい、貴族たちの多さといい、飾りつけの見事さといい、見ていてついつい感嘆の声をあげてしまつ。

そして、テーブルに並べられた食事を見る。その豪華さには目を見張るものがあった。思わず、こんなものばかり食べて大丈夫なのか、と考えてしまつたが、

(もし、鈴々ちゃんや翠さんが見たら、どんな顔するかな~)

と、口にはしない食いしん坊たちのことを頭に浮かべるのであった。

さて、朱里はショスターと一緒にケーキを配つていいくのだが、途中で朱里が何かに気付いた。

「ショスターさん、あの……」

「どうしたの?」「ウメイちゃん

「その、なんか……、いや、やっぱりなんでもないですか?……」

「え?」

訝しげに思つ。ショスター。朱里の表情を見ると、やはり恥ずかしそうに見える。しかし、いつたい何を恥ずかしがつているのかまでは、わからなかった。

実は、テーブルの貴族たちの中の、一部の男子たちが惚れ惚れした笑みの、怪しい視線を朱里に送つていたのだ。

(はづく……、やっぱ恥ずかしいです、)

顔を赤らめる朱里であった。

そんな風ではあったが、仕事自体は順調だった。とあるテーブルに来るまでは。

「なあ、ギーシュー　お前、今はだれとつまつているんだよ…」

「誰が恋人なんだ？　ギーシュー…」

そんな男子たちの会話が聞こえてきた。見ると、金色の巻き髪に、フリルのついたシャツを着た、おさげ気障な少年がいた。ギーシューという名前らしい彼は、シャツのポケットに薔薇を指していた。

「つきあいつ？　僕にそのような特定の女性はないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

モテない男子が聞けば、腹の立ちそうな台詞である。だが、そういうことに関して、妄想壁の強い朱里は、こんな話を聞いたとたん、つい、変なことを考えてしまつ。

（はわわ……、なんだかいろいろと凄そつな……）

顔を赤らめていた時だ。事件が起こったのは。

「はわ？」

朱里は氣付いた。ギーシューという少年の後ろを歩いているとき、何かがつま先にコツンとあたつた。見ると、紫色の液体の入ったガラスの瓶が床に転がっている。

「なんだろう、これ？」

咄嗟に拾い上げる。朱里の住んでた国では、あまり見ない珍しいものだ。

しばらく、それを物珍しげに見つめていた時だった。

「おー、ギーシュ。お前の後ろのメイドが持ってるそれ、なんだ？」

ギーシュの周りにいた少年の一人が、朱里の持っている瓶を指さして言った。

「そういえば、お前のポケットから何か落ちてたみたいだつたが」

少年たちが次々と指摘する。だが、ギーシュはとぼけたように首を横に振った。

「なんのことだい？　僕は何も落したりなんか……」

だが、ギーシュの友人の一人は、朱里の持っている瓶を指さし、わかつたぞと言わんばかりに大声で言った。

「おお、その瓶の中身は、モンモランシーの香水じゃないのか？」

「間違いない！　あの鮮やかな紫色といい、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水に間違いないぞ！」

「ギーシュ。そいつがお前のポケットから落ちたつてことはつまり

……

「違う。いいかい？　彼女の名誉のために言つておくが……」

ギーシュが何かを言いかけたときだ。後ろのテーブルに座っていた、茶色のマントを羽織った、栗色の髪の少女が立ち上がり、ギーシュの方に向かって、コシコシと歩いてきた。

「ギーシュをね……」

その顔からは、ボロボロと涙がほとばしっていた。

「やはり、ミス・モンモランシーと……」「

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。僕の心中に住んでるのは君だけ……」

だが、ケティと呼ばれた少女は、思いつきギーシュの類をひっぱたいた。それはそれは、よく響く音だ。

「そここのメイドが持つてる香水が、あなたのポケットから落ちてきただことが、何よりの証拠ですわ！　さようなら！」

そう言って走り去って行つた。すると、今度は入れ替わりに、見事な巻き髪の少女がやってきた。その少女は、いかめしい顔つきで、かつかつとギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー」

ギーシュが名を呼んだ。どうやら、朱里の持つている香水を作った張本人らしい。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロショールの森へと遠乗りをしただけで……」

「やつぱり、あの一年生に手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りでゆがませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

だが、モンモランシーは、テーブルに置かれたワインの瓶を掴むと、中身をギーシュの頭に振りかけた。

「うそつきー！」

そう怒鳴つて、去つて行つた。しばらく沈黙が流れた。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭きながら言った。

「はわわ……」

朱里は何が起つたのかわからず、呆然としていた。と、そのとき、ギーシュが突然、朱里の方を見て言つた。

「やー」のメイド君

「はわ？」

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、一人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「お、おー。ギーシュ。いくらなんでも、それはないだろ」

朱里にこちやもんをつけようとしたギーシュに、友人の一人が呆れたように声をかける。

「いくら平民でも、こんな女の子に責任なすりつけるなよ。たしかに、お前の二股がバレたのはその子が香水を拾ったのにも一因が」

「

「ええー、ふ、二股……！？」

突然、朱里が顔を真っ赤にして、奇声を上げる。そして、とんでもない妄想が頭をよぎった。

*（注・朱里の妄想）

「やあ、ケティ」

「ギーシュやめ

「さて、今日は馬で遠乗りにでも行こうじゃないか

「はい。とにかく、ギーシュやめ。一つお聞きしたい」とが

「なにかね？」

「その、私はあくまでも、悪い人たちの噂としか思つていないので
すが、ギーシュさまは、ミス・モンモランシーとつきあつたりして
いませんよね？」

「もちろんだとも。いいかい、ケティ。薔薇の花は、ただ一人の女
性のために咲き誇るものさ。例えば君みたいな、ね」

「まあ」

「さて、そろそろ行こうじゃないか」

「そうですね。といいで、今日ばかりのよつた馬に乗るのでして？」

「ああ、聞いてくれたまえ。今日の馬は、美しい毛並みで、薔薇の
花がよく似合ひの馬さ」

「まあ、楽しみですわ」

「さて、行こうではないか。この僕の王国（闘）へ

「わ、わーー！ なんて卑猥な妄想をしてるんだ、君……」

なぜか朱里の妄想の内容を読み取ったギーシュが、慌てて止めた。
周りの男子たちは大爆笑だつた。

「いやー、ギーシュ。まさかここまでやるとば、本当尊敬するよ

「『薔薇の花がよく似合ひの馬』だなんて、よく言ひよなー」

「『さて、行こうではないか。僕の王国（闘）へ』だぜ。上手いこ

と叫びながら「

「違つ、違つんだ！」

大爆笑のテーブル。だが、爆笑する男子たちの海をかきわけて、全然笑っていない人物が姿を現した。

「なるほどね、ギーシュ」

「え、まさか、モンモランシー？」

ギーシュは慌てた。さつき出て行つたばかりのモンモランシーが田の前にいたからだ。

「なんでもまた、君が！」

「あの後、忘れものに気付いて取りに戻つて來たのよ。それより、まさか、あなたがここまでとまねえ……」

「違つ、本当に、彼女とは馬に遠乗りに行つただけで……」

「ふーん。で、その馬、どんな馬だったのかしら？」

「そりゃあもう、毛並みがよくて、薔薇の花が凄く似合つ……、あ

「……」

もつ、言ひ逃れはできなかつた。

「へー、それはまた、たいそう立派な馬だこと……」

「違ひ、違つんだモンモランシー！」これはその、そう、『罷』だよ。ほら、昔から言ひ、『なんとかの罷』だよ。なんだつたかは忘れたけど、始祖ブリミルの伝説にだつて登場する

「わけのわからない」と、言つてゐるんじゃないわよ……！」

それは、最大級の音だった。本当に、人間の力で出せるのかと思うほどの音だった。

それがなんの音なのかは、決して歴史家は記さないであろう。

ただ一つ言えることは、ギーシュといつ少年が凄まじく頬を腫らし、食堂の床に横たわっていたことだけであろう。

さて、謀らすもギーシュをこんな風にしてしまつた朱里だったが、事はこれだけでは済まなかつた。それについては、次回の話で語ることにしよう。

第八席 ギーシュ、孔明の隕石壁の「」（後書き）

第五回「ルイズと孔明のムダ知識講座」

ル「どうとへ、五回目ね」

朱「はい。なお、今田は特別にお姉さんをお呼びしています」

ル「誰かしら?」

朱「はい。今回お越しいただきましたのは、ギーシュさんとモンモランシーさんのお二人です!」

ギーシュ「やあやあ、諸君」

モンモランシー「なんか、この講座の内容が予想できそつなんだけど」

ル「嫌なのが来たわ」

朱「ここは本編とは無関係なので、我慢して貰ださご。とにかくで、ギーシュさん」

ギ「なにかね?」

朱「ギーシュさんは、いろいろな女性とお付き合ござれていたみたいですが、どうしてこんなにお付き合いでできるんですか?」

ギ「ああ、それはだね(以降、自重)」

朱（真っ赤）

モ「あんたねえ」

ギ「わー、怒らないでくれー！」

ル「それより、さつと始めなさいよ」

朱「はー。それでは進めてこましちゃう。今日のお題は『からだじゅ、あう』

ル・ギ・モ「「あ、噛んだ」「」

『無節操漢』

ギ「帰つていいかい？」

モ「ダメよ。ちゃんと聞いて帰りなさい」

ル「ギーシュにふきわしい内容といつたら、ふきわしいわね」

朱「それでは、今日は極端な例を挿い摘んでお話してこましちゃう。まず、最初に紹介するのは、前漢時代の人、中山王の劉勝さんです

ル「こないだてきたわね」

朱「はい。この中山王さんは、多数の女性と関係にあったことで有名でした。そのため、お子さんの数が五十人から百人を超えたと言われています」

ギ「へえ。それに比べたら、僕なんてまだまだ……」

モ「言い訳にしないで」

ギ「はい」

朱「いくら一夫多妻が当たり前でも、これは異常なことと言わなくてはいけません」

ル「まったく、これだから男はイヌなのよ」

朱「さて、次に行きましょう。次は晋の武帝・司馬炎さんです」

ル「たしか、この人も前に出てきたわね」

朱「はい。仲達さんの孫に当たる人ですが、この人は後宮に大勢の美女（雑用・世話係も含む）を集めたことで有名です。その数は一万人ともいわれています」

ル「一万人って」

モ「ああ、いやだ。おお、よよ……」

ギ「さすがの僕でもこれは……」

朱「そのため、晋の武帝さんは、その夜を一緒に過ごす女性を選ぶために、毎晩、羊が牽く車に乗つて後宮の廊下を移動し、羊の気まぐれで止まった所の女性と一緒に過ごしたといいます。なお、皇帝の寵愛を受けようとした女性が、自分の部屋の前に塙や筐の葉を置

いて羊をわざと止めるよつにしたともこいます。この塩を盛る習慣は、海を超えて倭国（日本）に伝わり、水商売をする店では入り口に塩を盛るやつです」

ギ「なるほど。羊に選ばせるのか。これはおもしろい

モ「キロ」

ギ「あ、いえ、うん。まったくイヤな話だねえ」

ル「少しば憲りなさこよ

朱「なお、この武帝さんの子どもの数も、男の子だけで一十七人も上つたといいます。この中の一人が、『肉を食え』発言で有名な惠帝さんでしたので、こんな状態では国が乱れない方がおかしいと言わなければいけません」

朱「さて、最後にもう一つお話ししましょう。次の話は、東晋（北の異民族に追われ、旧孫吳の地に遷った「命政権」の孝武帝・司馬曜さんのお話です」

ル「どんな話かしら？」

朱「はい。この孝武帝さんは、女性に関することが仇となつて、お世辞にも皇帝とは思えない最期を迎えたといいます」

ギ「どういった感じ？」

朱「それは、ある日の宴会の席での出来事でした。酒を飲んで酔つ払つた孝武帝さんは、自分の愛妻の張夫人の前で、次のような発言

をしたのです」

孝武帝『お前も、歳だなあ。新しいのと取り換えねばならんな』

ル「うわあ」

モ「イヤな方ですわね」

ギ「で、どうなつたんだい？」

朱「はい。孝武帝さんは[冗談のつもりで言つたそうですが、張夫人はそうは思いませんでした。激怒した張夫人は、自分の配下の女官に命じて、ある「つ」とか、寝ていた皇帝を、分厚い蒲団で蒸して殺してしまつたといいます」

ギ「ヒイイイイー！？」

ル「怖い話ね」

モ「でも、当然の報いよ」

朱「いつの世も、女性の歳のことを口にすむことは恥りしこものです。私の知り合ひの方にも歳の話」

「

(どうからか矢が飛んできて、近くの壁に刺さる)

朱「いえ、なんでもありません」

ル「何よ、今の矢ー？」

モ「こいつたにギーかひっ。」

ギ「飛んできたんだい！？」

朱「とにかく、乙女は何歳になつても乙女だと書いて、今日まあ開きこじましょう！」

ル「や、そうね」

モ「ギーシュ、今度浮氣したら、わざわの皇帝の詰みたいに……」

ギ「わ、わかつた、わかつた！！ もへ 浮氣はしない！ 始祖ブリミルに誓つて！ いや、ほんとー。」

朱「それでは、次回を」期待ください」

おしまー

第九席 ギーシュ、孔明と決闘せよとの如き（前書き）

やつとでやました。

遅くなつてすみません。

皆さんの期待にそぐるかわかりませんが、どうだー！

第九席 ギーシュ、孔明と決闘せんとするの！」

「Jは魔法学院の本塔の最上階に位置する、学院長室。

図書室で調べ物をしていたコルベール先生が、一冊の書物を片手に部屋の中に飛び込んできたとき、ちょうど、学院長のオールド・オスマンが秘書のミス・ロングビルによつて蹴り回されていたところだった。

（さうは、またやらしいことをしでかしたか……）

こつもなつ、Jへ考へただろつ。だが、今はそれどJではない。

「オールド・オスマン！」

「なんじやね？」

「たた、大変です！」

「大変なことなど、あるものか。すべては小事じや」

「と、とにかく、Jれを、これを見てください！」

コルベールは、一冊の書物をオスマン氏に手渡した。書物の題名は、「始祖ブリミルの使い魔たち」だ。

「またこのよつた古臭い文献など漁りおつて。そんな暇があるのなら、たるんだ貴族たちから学費を徴収するつまい手をもつと考え

るんじゅよ。ミスター……、なんだつけ？「

「コルベールです！　お忘れですか！」

「そうそう。そんな名前だつたな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見てください」

そう言ってコルベールは、一枚のスケッチをオスマン氏に手渡した。それは、朱里の額に、極小さく刻まれていたルーンを拡大して描いたものだつた。

それを見た瞬間、オスマン氏の表情が変わつた。目が光つて、厳しい色になつた。

「ミス・ロングビル。席をはずしなさい」

そう言って、秘書に部屋から退出してもらつ。ミス・ロングビルが出て行つたのを確認すると、オスマン氏は口を開いた。

「詳しく述べるんじゅよ。ミスター・コルベール」

*

一方、じゅらはアルヴィーズの食堂。

よつやくギーシュが、立ち直ったばかりだった。もつとも、頬をひどく腫らしたままだが。

「メイド君、どうしてくれるんだね？」

怒り心頭のギーシュが朱里を問い詰める。

「君のせいで一人のレディの名譽が傷ついたばかりか、僕まで大恥をかいだじゃないか」

その剣幕に、朱里も一瞬、怯みそうになるが、なんとか耐える。そして、言い返した。

「たしかに、変なことを考えたのは悪かったと思っています。ですが、女人を泣かせたのは、あなたが二股なんかするからじゃないですか」

朱里も女の子である。異性と付き合ったことはないが、女の子として、二股がよくないことくらいは、容易に想像のつくことであつた。しかし、ギーシュは収まらない。言い返すとして、ふと、何かに気付いた。

「ん？ そういうえば、君。どこかで見たことがあるような……。ああ、思い出した。君はたしか、『ゼロのルイズ』が呼び出した平民の子だつたな。メイドの恰好をしているから、気付くのが遅れたよ」

ギーシュが朱里の「正体」に気付いた。そこまではよかつた。次

のよけいな一言がなければ。

「まったく、魔法だけじゃなくて、従者への躾も『ゼロ』とは。どうりで礼を期待するだけ無駄といつものだな」

それを聞いた朱里はムッときた。

「待ってください。どうしてそこでルイズさんへの悪口が出てくるんです！？」

「決まってるじゃないか。ルイズの『使い魔』である君のせいで、こんなことになつたんだ。従者への躾ができない責任は主人の責任。当たり前だろ？」

「なんてことを言つんですか！ そもそも、ルイズさんは先ほどの出来事とは無関係じゃないですか！ 今すぐ撤回してください！」

朱里は怒つた。別にルイズの好き嫌いは関係ない。単純にこのいない人の悪口を言われたのが嫌だったからだ。

「やだね。だいたい、僕の言つてることに間違いはあるかい？」

「言わせてもらいますが、間違いだらけです！ いくらルイズさんが高慢で意地つ張りで、魔法は爆発させることしかできないからって、全然関係ないことで蔑まれるいわれはありません！」

「いや、君の言つてることが一番ひどいじゃないか！」

「とにかく、ルイズさんへの悪口は撤回してください！」

そんなわけで、しばらく睨み合ひが続いた。

「よし、わかつた」

先に言いだしたのはギーシュの方だ。

「それならそれで、君に貴族への礼儀といつもの教えてあげよつ

「教えるのはこいつの方ですー。」

*

「さあ、さあ！ 見てらっしゃい、見てらっしゃいー。」

分厚い牛乳瓶眼鏡をかけた少女が、スプーンをマイク代わりにして、周囲に呼び掛ける。どうやら司会者らしい。（見た目だけなら、アニメ版恋姫の同会者の女の子、陳琳ちんりんにそっくりである）

「今から始まる『決闘』は、絶対に見逃してはいけません！ さあ、あなたもお早くー。」

そんな風に呼び掛けるものだから、食堂内の人という人が、何事かと、とある一つのテーブルに集まつてくる。いったい、なにがあるのか。

そのテーブルには、二人の人物が対峙していた。片方は朱里。もう片方はギーシュである。

「さあて、今から始まります『決闘』は、魔法学院が始まつて以来、例を見ないものとなるでしょう！　はたして、いかなる闘いが繰り広げられるのか！　まずは決闘の内容を紹介しましょう！」

ものすく高いノリで、司会者が言つ。

「決闘の内容は、なんと『チェス』！！　ご覧ください！　魔法学院史上、こんなにしょぼい決闘方法も珍しい！」

その通りであった。テーブルの上に置かれているのは、まぎれもなくチェスであった。どうやら、ギーシュが近くの一年生から借りたらしい。どうしてこうなつたのかといふと、決闘のことが決まったとき、ショスター やギーシュの友人たちが「子ども相手に大人気ない」と非難の声を浴びせた。さすがのギーシュも、朱里のような子ども相手に本気になるなど大人気ないと思つたらしい。その結果、決闘の方法がチェスになつたというのである。

そんな経緯は関係ないと言わんばかりに、司会者はそのままの勢いで解説を続ける。

「それでは、選手を紹介しましょう！　まず、先攻の白駒を操るのは、名門グラモン家の四男にして、いつも薔薇の花で飾り、気障つているけど、ファッションセンスは全然ダメ、しかも一股をかけて女の子も泣かす最低男、ギーシュ選手！」

「ちょっと待つた！　なんだね、この悪口しか言つてない司会は…」

ギー・シユが抗議するが、司会者は無視する。ちなみに、周辺の野次馬たちは大爆笑だ。

「続きまして、後攻の黒駒を操るのは、名門ヴァリエール家の三女、『ゼロのルイズ』によつて召喚された謎の平民にして、お仕事上手でしかもドジッ娘！ 口論すれば勝てる人はまずいない、変な妄想すれば大爆発！ ご主人様とは相いれないが、胸の大きさだけは、そんなご主人様と同様、ほとんど『ゼロ』の『コウメイ選手』！」

「誰が『ゼロ』ですってー?」

「はわわー！？」

いつの間に朱里の傍らにいたのか、ルイズが司会者に喰つてかかる。

「ルイズさん、いつの間にここへ？」

「それより、あんたは何やってんのよ！ ちょっと見てない間に、こんな大騒ぎして！ おまけに、なんでメイド服着てんの！？」

矢継ぎ早に質問を浴びせかけるルイズ。しかし、朱里がそれに答えることはできなかつた。

「ヨーロッパ、ギヤウニーは下がつて下がつてー。」

司会者の命令が飛んだからである。

「ちょっと、わたしはこいつの主人よ！」

「『主人公である「うど」、王さまである「うど」、今は試合中…』言い
たい」とはあとあと…。」

そう言われると、しぶしぶ後ろに下トガハゼルをえなかつた。そん
なルイズに朱里が声をかける。

「事情は後で説明します。ですか、今は後ろで見ていてください。」

「まつたく……」

ルイズは溜め息をついた。

「人の氣も知らないで……」

密かにさう呟きながら。

「『ウメイちゃん、頑張つてね！』

シロスターが後ろから声援を送る。

「はい、頑張ります」

朱里が微笑みながら答えた。

「ところで一つ聞きたいのだが……」

ふいにギーシュが口を開いた。

「どうして君たちまで向こう側のギャラリーにいるんだね…？」

そう言つて、朱里の後ろにいる、友人たちの方を指さした。

「だつて、こんな可愛い女の子を応援しなきゃ、罰が当たるじゃないか！」

そう言つたのは、朝にルイズをからかった、太っちょの少年、マリコルヌだった。彼の言葉に、ギーシュの友人たちも頷く。

「『可愛いは正義』とでも思つてるのか？ 裏切り者！」

悔しそうなギーシュだが、なにはともあれ、試合を始めなければならぬ。

「さて、では始めるか」

そう言つて、白の「ポーン」を進める。

(今に見でろ)

ギーシュは内心、ほくそ笑んでいた。

(なにも伊達にチエスを選んだのではないんだからな)

たしかにその通りであった。ギーシュの実家は軍門の家である。現に彼の父は王国の元帥だ。ギーシュ自身はグラモン元帥の四男にすぎないが、彼なりに机上の兵法は知つてゐるつもりだし、チエスのやり方くらいは熟知している。素人相手に引けは取らない。しかも相手は、自分よりも年下の女の子だ。

(井の庄とこいつのま、じんなものなんだよー。)

*

それがわかったのは、朱里が次のよつた台詞を言った時だった。

「王手です」
チャウシックマイ

「そんなバカな……」

ギースコは絶句した。彼の白い駒はほとんど残っていない。しかも、王の逃げ場所はどこにもなかつた。惨敗である。

「いい線は行っています。真っ先に真ん中を抑え、相手をけん制する。それを軸に、じわじわと攻める。ですが、定石すぎて、却つて相手に筒抜けです」

「ま、参った……」

ギースコはうな垂れ、降参した。

「なんどー?..」

試合が終わるやつなや、同会者が騒ぎたてた。

「ひつなることを誰が予想できたでしょう。子どもの遊びとはい
え、名門貴族のギースュ選手が、一平民の子どもにすぎないはずの
「ウメイ選手に敗れました！」

すると、周りで見ていた野次馬たちが一斉に騒ぎだした。

「おい、見たか？」

「あの子、凄い腕前だぞ」

「ギースュの顔を見てみろよ」

「さすがだ、「ウメイちゃん！」

最後のはマリコルヌたちである。いつたい、いつの間に朱里の名
前を呼ぶようになったのか。

「凄いわ、「ウメイちゃん！」

シエスタも自分の妹が勝ったかのように大感激である。

一方のギースュは、落ち込んだままであった。そんな彼に、朱里
は声をかける。

「約束は守つていただけますね？」

「ああ、もちろんだとも」

ギースュはそう言って、先ほどのレイズへの悪口を撤回した。し

かし、朱里はさらに言葉を続けた。

「それと、わがままながら、もつひとつ約束していただけますか？」

「なんだね？」

「後ろを向いてください。それからはあなたに任せます」

どういふことかと、ギーシュは後ろを向いた。そして、ハツとした。ギーシュの後ろ、彼の視線の先には、彼にとつて大事な人の姿があった。

「モンモランシー……」

思わず、言葉がこぼれる。そして、次の瞬間にはモンモランシーの元へと駆け出していた。

「僕が悪かった。本当にごめんよ……」

男泣きをするギーシュを見て、これでよかつたと思つ朱里。これにて一件落着と、思った。だが、彼女は忘れていた。

「「ウメイ……」

「はわー!？」

自分の「『主人様』」のことを。

「あんたねえ！ なにやつてるのよー！」

そういうて、朱里のおで「ローランド、ドンペリの一撃をお見舞いした。

「いたつ！？」

「こんな大騒ぎ起こしておいて、本当にまつたく、もう！」

どうしてルイズがこんなに怒っているのかについては、彼女なりの理由がある。今回、ことがチエスの試合くらいで済んだのは、幸運と言わねばならなかつた。もし、朱里が小さな女の子じゃなかつたら。もし、ギーシュが女の子好きな性格ではなかつたら。ほかにもいろいろあるが、通常、平民が貴族を怒らせたらただ事では済まないのだ。下手をすれば、命の危険だつてあり得る。だからこそ、ルイズは怒つたのである。

「相手がギーシュみたいな女たらしでよかつたわ。今度、こんな大騒ぎをしたら、本当に追い出すからね！」

「はわわわー……」

本当は、ここまでの大騒ぎをやらかした朱里のことが心配だつたからこそ、こんなことを言つてゐるのだが、ルイズ本人を含め、それに気が付く者は皆無だつた。

一方の朱里だが、ルイズのお小言を聞きながらも、何か思いつめていた。

(そう言えば、私、あの『チェス』とかいう『象棋^{シャンチー}』みたいな遊びのやり方は知らないはずだったのに、まるで最初から知つてたようだ……)

しかし、考へてもわからないので、その場はルイズのお小言に耳を貸す方に集中したのであった。

実は、試合が始まるとき、朱里のおでこの、前髪に隠れた小さな「ルーン」が、淡い光を放っていたのだが、それに気付いた者はいなかつたのである。

それはともかくとして、ギーシュ一股に起因する、食堂での騒動は、こうして幕を閉じた。

後日談としては、シェスタを通じて事の次第を知ったマルトー親父たちが、貴族相手にチェスで勝利を収めた朱里のことを「我らの知恵袋」と呼ぶようになったこと。マリコルヌをはじめとした男子生徒たちの間で、密かに朱里の人気が急上昇したこと。

そしてもう一つ。

「「ウメイ先生… どうか、この僕に、いろいろ教えてください…」

「わかりました。それではギーシュさん、教科書20頁ページを開いてください」

「はい…」

この世界に来て、朱里に初めての「生徒」ができたことである。何を教えているかというと、一つは兵法だが、もう一つについては言わないほうがいいだろう。

*

トリステイン王國のとある村。

「お父さん」

「どうしたんだ?」

「大変だよ。森の中で女の子が!」

「なに? わかった、すぐに行く!」

「なんともあ、まだ小さこそじやないか。迷ひはじくななど珍らしく
早く家に運びつい!」

「ああ」

「……………しゃ…………り…………ちやん…………」

第九席 ギーシュ、孔明と決闘せんとするの」（後書き）

今回はムダ知識講座は休止します。

第十席 孔明、饅頭を呑めたかの如き（前書き）

今回はほのぼのストーリーです。
一方で、恋姫側世界は急展開です。
作者の大好きな「あの人」が出ます。

第十席 孔明、饅頭を呑めたとあるの！」

話は学院長室における、オールド・オスマンとゴルベール先生との会話のところにさかのぼる。

ゴルベールは、泡を飛ばして、オスマン氏に説明していた。

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の女の子を呼び出してしまったこと。

ルイズがその娘と『契約』した証明として現れたルーンが気になつて、それを調べていたことなどを話したのである。

「なるほど。つまりこうしたことじやね？」

一通りのことを聞いたオスマン氏が、ゴルベールが描いた、朱里のおでこに現れたルーンのスケッチをじつと見ながら言葉を繋ぐ。「つまり君が言いたいのは、その娘の額のルーンを調べていたら、始祖ブリミルの使い魔、『ミヨズニトニルン』に行き着いた、と。そういうことじやね？」

「はい、そうです！　あの少女の額に刻まれたルーンは、伝説の使い魔、『ミヨズニトニルン』に刻まれていたモノと、ほぼ同じであります！」

「ちよつと待つのじや」

オスマン氏が、一度、コルベールを制する。聞きたいことができたからだ。

「『ほぼ同じ』と言つたが、どうこうとか詳しく話すのぢや」

「あ、はー」

コルベールが詳しく話し始める。

「あの少女の額のルーンは、『ミヨズニトールン』に刻まれていたモノとほぼ同じなんですが、普通のルーンと比べるとやけに小さいうえに、よく見ると、妙な模様が混じっているのです」

「妙な模様じゃと？ どれのことじや？」

思わずルーンのスケッチを覗き込むオスマン氏。

「スケッチの真ん中より少し下を見てください」

「言われたとおりに見てみると、たしかにあった。

「これのことかね？ なんか、ヘビみたひよろひよろした……」

「そうです。その絵のことです」

コルベールが指したのは、ルーン中央の文字の少し下の、小さくて蛇みたいに細長い、動物みたいな絵だった。これは、朱里たちの国で「龍」と呼ばれている伝説の動物の絵なのだが、もちろん、人が知る由もない。

「まあ、一回、これは置いておこう。それで『ゴルベール君。君はその少女のこと、どう思うのかね?』

「文献に誤りがないのなら、あの少女は『ミラーズニー・ルーン』に違いないあります! もしかつなら、これは大発見ですぞ!」

「ふむ……確かに、あの変な絵を除けばルーンが同じじや。ルーンが同じどころとは、ただの平民だつたその少女は、『ミラーズニルーン』になつた、ということになるんじやろつな」

「どうしましょ?」

「まあ、慌てるでない。それだけで、そう決めつけるのも早計かもしれんし」

「それもそうですね」

そこまで話したところで、黙りこむ一人。しばらくして扉がノックされた。

「誰じや?」

「私です。オールド・オスマン」

声の主は、ミス・ロングビルだった。

「なんじや?」

「わきほど、アルヴィーズの食堂でおもしろいことがあつたと聞いたので、オールド・オスマンの耳に入れておきたいと思いまして」

「なにがあつたんじゃ？」

「はい。人から聞いた話ですが、先ほど食堂でチエスの試合が行われまして。それ自体は別に珍しくはないのですが、なんでもミス・ヴァリエールの使い魔の少女が、ミスター・グラモンを散々に打ち負かしたそうです。『子どもの遊びとはいえ、凄い腕前』だと。皆、大騒ぎでしたよ」

「ふむ、なるほど。わかつた」

そう言つと、オスマン氏は、扉越しのミス・ロングビルに、馬鹿騒ぎしてゐる生徒がいたら注意してほしいと言つて、彼女が去つていくのを待つた。

ミス・ロングビルが去ると、コルベールが唾を飲み込み、苦笑いをしながら話を切り出した。

「オーレド・オスマン」

「うむ」

「まさか、と思ひますが」

「うむ」

「いや、平民でもチエスの得意な者は大勢いますし」

「やうじやな」

「まあ、これだけで判断するには情報が少なすぎます」

「だが、可能性は高まつたともこえるの？」

「たしかにそつ言えますね」

「なにはともあれ、まずは情報を。その上で判断せねばのう」

「そうですね。引き続き調べてみましょウ」

「そうしててくれたまえ。ああ、一応念のためじやが、このことは他言は無用じや。慎重に調べたまえ、ミスター・コルベール」

「は、はい！ かしこまりました！」

「こんな会話が続いたあと、オスマン氏は窓際に立ち、遠い歴史の彼方へと、想いを馳せた。

「しかし、伝説の使い魔『ミヨズニーリル』か……。いったい、どのような姿をしておったのだらうなあ」

「『ミヨズニーリル』はあるゆる知識を蓄えていたともこりますから、とつあえず、頭はよかつたんでしょうなあ」

なんとなく間の抜けた、コルベールの言葉で、その場の会話は幕を閉じたのである。

*

さて、例の「チェス試合騒動」から数日が過ぎた。

朱里の生活リズムは、元いた世界同様である。

朝に早く起きて、わざと洗濯をする。それから「主人様」とルイズを起こし、身支度を整える。厨房で朝食を「駆走になつた後、授業を見学する。

なお、昼食、夕食も厨房で「駆走になるし、ときにはお手伝いもある。お手伝いの際には例のメイド服のエプロンドレスを着用するだが、その際に怪しい視線を感じるのは別の話だ。

そして夜になると、日記をつけ、それが終わったら夜更かしせず寝る。小さい女の子であることが幸いしてか、ルイズは同じベッドの上で寝ることを許してくれている。

なお、女の子といえば、清潔第一なのは当たり前で、朱里も例外ではない。なんの問題かといふと、それはお風呂の問題である。だが、貴族の使う風呂には入れない。学院内で働く平民用のサウナ風呂があるが、「お湯を張る文化」の国で育っている以上、きちんとしたお風呂が必要となるものである。後に朱里はその問題を解決するのだが、それはまた別の話で語ることにしよう。

ある日のことである。夕食を「駆走になつたお礼に、食堂の片づけを手伝っていた朱里は、ふと思つた。

「シエスタさん」

「どうしたの、『ウメイちゃん』？」

「その、せっかくの『』馳走なのに、残す人、多いですね」

その通りであった。生徒たちの食べた後のテーブルを見ると、まだ食べられそうなものが残されたままの皿が必ずある。それもたくさん。

その残し方も、様々である。肉だけ食べて、野菜は残すというガキっぽい残し方はまだ可愛いものだ。中には、どれも少し食べたら捨てるという、食べ物のありがたみを知らない、明らかに悪意を思わせるものがあった。

「そうなのよ」

困った表情で、シエスタが言った。

「せつからくマルトーさんたちが精魂込めて作った料理なのに、残す人が後を絶たないの。もちろん、貴族の方たちの中にも礼儀正しい人もいるけど……」

「なんですか……」

朱里は悲しくなった。当然である。そもそも、料理というものは、作る人の汗と苦労が込められているものである。その材料の農作物にも、百姓の労苦が込められているのだ。肉もそうである。魚だってそうである。それなのに、そんな人々の苦労も知らないで残すの

である。

(なんとかしてあげたいな……)

朱里はさう思わずにはいられなかつた。と、その時、ふと何かが頭をよぎつた。

(セリフだー。)

*

次の日の朝である。

朱里は早速、お田畠てのものを作り始めた。材料には、よくしなる、力コ用の木を使う。竹があれば、もつとやりやすいのだが、無いもの求めても仕方がない。

少し時間がかかつたが、なんとかそれは完成した。

そして、朝食で厨房を訪れると、朱里はマルター親父に、「ある頼み」とした。マルターは、

「『我らの知恵袋』たるコウメイぢやこの話」となり聞いてやるぞー。」

と、承諾してくれた。もちろん、彼自身が、朱里が何をするかを楽しみにしていたのである。

そして、午前の授業を終えて、ルイズと別れ、昼食前に厨房を訪れた朱里は作戦を実行に移した。

「遅くなつてすみません」

「おう、「コウメイちゃん！」朝に頼んでいたモノ、きちんと用意しておいたぞ！」

そう言つて、マルトーは自分の後ろの方を指した。そこには、小麦粉の入つたボールと、豚の挽き肉、玉ねぎなどの野菜と調味料、水などが置かれていた。

「ありがとうございます」

「しかしこいつたい、あれで何を作るつもりだ？」

「それはできてから説明します」

こうして、朱里は調理を始めたのである。もともと料理の得意な彼女は、ためらうことなく、それを作り、上手に完成させた。上手と言つても、さすがに曹操（華琳）配下の典韋（流琉）には遠く及ばないが、それでも一流と言つて差し支えない腕前である。

そして、それをマルトーやシェスタたち、厨房の皆にふるまつたのだ。

「おいしゃー！」

「なんだこれ！？ す”くいい味じやねえかー！」

思いのほか、好評を博したのである。

大喜びの朱里が、その作り方を皆に伝授したこととは言つまでもない。

そして、その翌日の昼食のことである。

ルイズを始め、学院の生徒たちがテーブルに着くと、その上に見慣れない料理が置いてあった。

「なにかしら、これ？」

見れば見るほど、不思議なものである。木でできた器に入れられた真っ白でフカフカしてそうなその物体は、暖かな湯気が立ち上っている。だが、テーブルの上に乗っているからには食べ物なのである。

ルイズは興味深げに一つとつて、自分の口に運んでみた。そして、その味を噛み締めた。

「なにこれー？ けつこういけるじゃない！」

彼女は決してグルメではないが、それでも気に行つたらしい。すると、そこへメイド姿の朱里がやってきた。（さすがのルイズも見慣れたせいか、突つ込まなくなつっていた）

「どうですか、ルイズさん」

「あ、コウメイ。ちよつとこことこへ来たわ。これはなにかしら。
凄くおいしくんだけど」

それを聞いた朱里は微笑んで言った。

「それは、『饅頭』といいまして、あつ……」

「マントワー」

ルイズが聞き返す。すると、舌を噛んでしまった朱里に助け舟を
出す形で、シェスターが答えた。

「はい、なんでもコウメイちゃんの故郷のお料理みたいなんですよ
」「コウメイの国のお料理？ やるじやない？」

大喜びのルイズ。他のテーブルでも、同じような賞賛の声が相次
いでいた。

「うん、うまい。この外側のペニペニ感とこい、中からの肉汁と
いい、最高の一皿につまめるよ。」

「これはギースコである。

「なに、おこしこと思つたら、あのコウメイちゃんの料理だつて！
？」

これはマココルヌである。

「おいしいわね。『ゼロ』のルイズも、なかなかいい使い魔を持つたじゃない」

これはキュルケである。眞、それぞれ褒め言葉を発した。

しかしジの褒め言葉も、キュルケの隣にいる青い髪の少女の大絶賛には及ばなかった。その少女は、苦いことでも有名なハシバミ草と交互に食していた。

「おいしい……」

言葉はそれだけである。しかし、それゆえに説得力のある言葉であつた。しかも、次から次にと平らげるのだ。

「あ、タバサ！　あたしの分まで取らないでよー！」

キュルケが慌てて止めようとする。それほどまでに、タバサという少女のペースは早かつたのだ。

（よかつた。気にいつてもうえて）

朱里は微笑ましげに、皆が食すのを見ていた。

だが、さすがの朱里も、この時は考えていなかつた。彼女の取つた行動が原因で、後にトリステイン王国に一大ブームが起ることになるとは。

だが、学院の食堂における朱里の日論見は、一部の好き嫌いを出したことを除けば、大成功に終わったのであつた。

*

孔明と鳳統が行方不明になつて一週間あまり。

水鏡先生の家では、皆が悲嘆に暮れていた。

離里が謎の光にさらわれる所を桃香が目撃したのを最後に、なんの手掛かりも見つかっていなかつた。

離里が行方不明になつた次の日には、愛紗からの急報を受けた馬超（真名は翠）、黃忠（真名は紫苑）、馬岱（真名は蒲公英）、魏延（真名は焰耶）の四人も捜索に加わつたのだが、まったくダメだつた。

桃香の目撃情報から、悪い妖術使いの仕業ではないかという、憶測も起つたが、それが何かの役に立つことはなかつたのである。

なんの情報もないまま、今日も日が暮れるのではないかと、皆が思ひ始めた時だつた。

「頼もう。」

玄関先に客人が現れたのは。

「あ、はい！」

どんな状況である「うど密」には会わなければならない。水鏡は悲しみを押し殺して、屋敷の門までお密を出迎えた。そして、驚いた。

「あら、貴方は……」

そこへ、桃香、愛紗、鈴々の三人が水鏡の後ろから客人の顔を見た。

「あつー！」

「お、お主はー!?」

「かだ華佗のおじちゃんなのだー！」

「おじちゃんじゃないー！」

鈴々に向かつてツツ「ミミが飛ぶ。

水鏡宅に突如現れた客人の青年。それは、漢中を中心に慈善活動を行つハツトウエイドオ五斗米道に所属する名医、華佗であつた。

第十一席 華佗、水鏡宅を訪れるの！」（前書き）

新年明けましておめでとうございます！
今年もどうか、よろしくお願いします！

さて、今回の話は100%恋姫側世界です。
かなり無理のあつやうな、作者の創作設定が入っています。
それでもよければ、どうぞ！

第十一席 華佗、水鏡宅を訪れるの」と

突如来訪した名医、華佗は、挨拶もそこそこ、水鏡の案内のあと、居間に通されると、椅子に腰かけた。

その華佗を前に、屋敷の主である水鏡はもちろん、桃香、愛紗、鈴々、翠、紫苑、蒲公英、焰耶といった、桃花村の面々が卓を挟んで向かい合つた。（ちなみに、璃々は母親である紫苑の腕の中に抱かれていた）

「まさかこんなにも早く、劉備殿や关羽殿たちと再び顔を合わせることになるとは思わなかつたな」

華佗はまずそう言つと、次に意味深げな一言を呟いた。

「だが、却つてその方が話が早い」

「どういう意味だ、華佗殿？」

訝しげに愛紗が聞いた。

「話が早いって、どういうことですか？」

つられて桃香も発言する。

「もしかして、朱里や鳳統のことに関係ある話なのか？」

たまらず鈴々が言った。

「おい、そんな一斉に聞くなよ。話が進まなくなるじゃないか」

「うう言つて、あわや質問攻めになりそりだつたのを止めたのは翠
だ。

「ねうひね、翠ちゃんの言つとおつ。ひとまぢ、先に華佗さんの話を
聞きました

紫苑が冷静に呼び掛けた。既、それに頷く。

「では、華佗さん。お話ししていただけますでしょうか？」

静まり返つたところで、水鏡先生が促した。

華佗は水鏡から頂いた茶を一口飲んで、一回頷くと、話始めた。

「このたび、俺が水鏡殿の屋敷まで足を運ばせていただいたのは、
先ほど張飛殿が聞いた通り、水鏡殿の一人のお弟子殿たち、つまり
諸葛孔明殿と鳳統殿のことについてだ。もちろん、直接お会いでき
ればよかつたのだが、今ここにおられないということは、すでに二
人の身に何かがあった。そうではないか？」

まるで、じつなることを最初から知つてゐるかのような言いぶり
であった。

「それはうだけど」

蒲公英が口を開いた。

「まるで、孔明と鳳統がいなくなるのを最初から知つてたみたいな言い方だね」

「もちろん、それには訳がある。ただ、すでに一人がいなくなっているという事実を知つたのは、ついさっきだ」

「その訳というのを聞かせてもらえないか？」

焰耶が言った。

「ああ、もちろんだ。ただ……」

華佗は頷きながらも、一言だけ断りを入れる。

「その前に、いつたいどうして孔明殿、鳳統殿の二人がいなくなっているのか。今、わかっていることを教えてくれないか？」

「姉上」

「桃香お姉ちゃん」

「うん」

三姉妹が互いに相槌を打つ。今ここにいるメンバーの中で、事の始まりから最も詳しいのはこの三人。中でも、唯一桃香が雛里の消える所を目撃しているのだ。

三人は頷きあうと、華佗に一つずつ説明した。霧の中で朱里が誤つて崖から転落したこと。すぐに朱里を捜したのに、何も見つからなかつたこと。その夜に、桃香が怪しげな鏡みたいな光る物体を目

撃したこと。そして、それに離里が呑みこまれるかのようにして消えたこと。

「なるほど。だいたいのことはわかった

事情を聞いた華佗は考え込むかのように何度も頷いた。そして先ほどの約束通り、語り始めた。どうしてここに来たのかを。どうして、朱里と離里の身に何が起ころのを知っていたかを。

その内容を要約すると、次の通りであった。

洛陽での宴会を終えた後、華佗は太平要術を封印したことを五斗米道教団の教主である張衡エイドオーナウジンに報告するべく、教団の本部がある漢中に帰還した。

だが、帰還した彼を待っていたのは、驚くべき情報だった。

教主である張衡が、古い文献を漁っていたところ、一冊の予言書が出てきたというのだ。

「その予言書の『しがこれだ』

華佗はそう言って卓上に予言書の写しを広げた。皆が一斉に覗き込む。そこには、次のような内容が書かれていた。

『忌まわしき太平要術、漢士かんどに於いて塵芥ちりあくたとなるも、千載せんざいの時を経て、双月そうげつの国、大秦だいしんの地にて甦れり。人の恶心よみがえに巢食いて、大秦の地を滅せんとす。時同じくして、大秦国の虚無きよむの術士、三顧の礼を以て伏龍ふくれいを招かん。伏龍、大秦の地に招かれ、鳳雛ほうりゆう、後を追いてその才を開花せり。伏龍鳳雛、共に虛無の術士らを援け、大秦国の戦

乱を鎮めんとす 』

「いつたい、どうこう意味だ？」

一通り読んだ後、愛紗が言った。（ついでに言つて、字が読めない鈴々などはチンブンカンブンだった）

「確かに分かりにくいだろうな」

そう言って華佗は、今度は大きな地図を広げた。

「まずは、この予言書に出てくる『大秦國』について説明しなければな」

そう言つて地図を指しながら説明した。

「いいか。この地図の右側。つまり東の一帯が我々の住む『漢土』だ。そして今、我々がいるのが『荊州』。漢土のだいたい中央より少し南寄りだ」

そう言つと、徐々に地図の左。つまり西へと指を動かしていく。彼の指をたどると、漢土十三州の中で最も西の涼州（翠と蒲公英の故郷）を過ぎ、漢土の終点、玉門關を超えて、西域のオアシス国家群（龜茲、疏勒など）をも通過する。そして、「汗血馬」の産地、大宛国をも超え、さらに西の安息国も通り過ぎると、最後には条支国にたどり着く。そして、そこから海みたいな空白を渡つた先にあるのが、「大秦國」と書かれた土地であった。

「こんな遠いところ……」

皆、絶句した。

「ここの『大秦国』については、わずかな噂話や先人の記録を除けば、ほとんど何もわかつていない。だが、この予言書を見ると、ただごとでないことは想像に難くない」

そう言つと、華佗は顔をしかめながら話した。

「つまり、ここの予言書に書かれていることが事実とすれば、その『大秦国』に、『太平要術』が復活する、といつことだ」

「えー?」

全員が驚かざるを得なかつた。その封印のため、皆で必死になつて戦つた記憶はまだ新しい。

「そんな、あれはあの時、華佗さんが封印したはずじゃ……」

「たしかにそうだった。だが、『千載の時を経て、大秦に甦る』などという小賢しいものだつたとは……」

悔しそうに憤る華佗。そこに、愛紗が口を挟む。

「それは華佗殿の責任ではなかろう。しかし、太平要術のことと、その遠い異国のことが、朱里たちのことと、いったいなんの関係が……」

「そう、そのことだ」

そう言つと、華佗は再度、予言に話を戻す。

「もう一度、ここから先を読んで貰いたい。ここだ。『時同じくして、大秦国の虚無の術士、三顧の礼を以て伏龍を招かん。伏龍、大秦の地に招かれ、鳳雛、後を追いてその才を開花せり。伏龍鳳雛、共に知恵を以て虚無の術士らを援け、大秦国の戦乱を鎮めんとす。双人の名は、千載の末まで語り継がれん。伏龍の名は諸葛亮。鳳雛の名は鳳統』」

「なつー!？」

読み終えたとき、今度こそ誰もが言葉を失った。しばらく、誰も喋らなかつた。

「華佗さん……」

しばらくして沈黙を破つたのは、朱里と雛里の恩師、水鏡だった。

「つまり、こいつのことですか？　朱里も、雛里も、そのはるか遠い、得体のしれない国に行つてしまつたと……」

「水鏡殿」

途中で華佗が口をつぐんだ。

「『』の予言が正しけなら、そつこいつになる」

「「そんなー?」」

桃香と愛紗が思わず叫んだ。それをきっかけに、皆が騒ぎだした。

「待ってくれ！　まだ話は終わっていない！」

慌てて華佗が皆を静止させようとすると、しかし、騒ぎはますます大きくなるばかりだ。だが、それもすぐに終止符がうたれた。

「皆さん、お静かに！」

そう叫んだのは、意外なことに、最も悲しんでいたはずの水鏡だつた。

「華佗さんの話を最後まで聞きましょ。華佗さんは、何もこんな話をするためだけに、ここに来るとお思いですか？」

それを聞いて、よつやく全員静まり返る。

「水鏡殿、かたじけない」

華佗はそう言つと、本題に入った。

「今日、俺がここに来たのは、もちろん、こんな予言の内容を伝えるためなどではない。遠く得体のしれない異国。それも千載の先のこととはいえ、太平要術の復活という重大事。そして、俺の顔見知りの人間をも巻き込んだ今度の失踪事件。それをそのまま放つたらしにしておくよつな五斗米道ではない！」

「ではー？」

華佗の熱い語りに、皆がパアッと明るくなる。今まで沈んでいただけに、一筋の光が差し込んだ気がしたのだ。

「ああ。すでに張衡様を始め、五斗米道の同志たちが動いてくれている。『大秦国行き』の準備のためにな」

「それじゃ、華佗のおじちゃんが鈴々たちのところに来たのは…」

「おじちゃんじゃない！」

鈴々の台詞に一度ツツツコミを入れると、再度話す。

「もちろん、協力してもらうためだ。最初は桃花村に行くつもりだったが、ここに寄つたのは本当に当たりだつたようだな」

「協力って、つまり？」

「決まつていいだろ。それは、俺と『大秦国』へ行き、今度こそ太平要術を永遠に消し去り、そして孔明殿と鳳統殿をここに連れて帰ることだ」

そこまで聞いて、皆が明るくなつた。こんな思いをしたのは久々だつた。

「やつたー、なのだ！ これで朱里たちを助けにいけるのだ！」

思わず鈴々が飛び跳ねる。

「ちょっと待つた

突然、翠が言った。

「どうしたの、お義姉さま

「その『大秦』とかいう国に行くなといつたが、誰が行くかを決めなきゃダメだわ」

「翠、なに言つてゐるのだ。そんなの、みんなで行けばいいに決まつているのだ！」

「ダメよ、鈴々ちゃん」

桃香が姉らしく、口を挟む。

「どうしてなのだ？」

「誰かが残らないと、村が」

「ああ、やうだつたな」

愛紗が頷く。

「鈴々。姉上の言つとおつだ。誰かが村の留守をしていないと」

その通りである。笛で出かけて、義勇軍の本拠地、桃花村を長きに渡つて留守にしておくのはあまりに危険すぎた。

「それなら、どうすればいい？」

「蒲公英は行くよ

」「ハ、お前は留守番だ！」

「お義姉さま、ひどーー」

「まあ、慌てて決めることはない」

今度は明るい意味での騒がしさの中、華佗が言った。

「幸い、出発のための妖術が使えるようになるまで、あと一週間ほどかかる。俺はその準備のため、一旦、襄陽の街の同志たちと落ち合ひ。準備ができたら、また水鏡殿のお屋敷に戻つてくる。それまでにじつくつと考えとけば大丈夫だなつ」

「ありがとうございます華佗さん！」

桃香が頭を下げる。それにひられて、皆、口づけでお礼を言った。

「ひして、一週間ぶりに、水鏡^{モモカミ}の皆に笑顔と希望とが戻つてきたのであった。

第十一席 華佗、水鏡宅を訪れるの」と（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回のお話で、作者は勝手に、「大秦国」の「将来」＝「ハルケギニア」にしてしまいました。

ちなみに、正史では、「大秦」とは、即時ヨーロッパを支配していた「ローマ帝国」のことです。

「ハルケギニア」がヨーロッパをモデルにしていたので、ついやつてしましました。

せつでもしないと、恋姫世界とゼロ魔世界との繋がりを作れませんから（苦笑）

さて、いよいよ桃香たちが朱里、離里救出に動き出します。しかし、この救出部隊、桃花村メンバーから、誰をパーティにしよう……。

作者の頭の中では、華佗、桃香、愛紗、鈴々は必ず連れて行きます。紫苑、璃々ちゃん親子はお留守番をせぬつもりです。（子ども連れて異世界はちょっと……）

残りは、翠、蒲公英、焰耶だけど……。

意見等ありましたら、是非ビリヤー！

第十一席 タバサ、孔明に詰め物のijと（前書き）

やつとでもおもした。

前半は、あのおバカ軍団です。

後半は、朱里があの娘と初めて会話します。

第十一席 タバサ、孔明に詰め寄るの」と

華佗が水鏡宅を訪れる二日前。

泰山の頂上では、欲望詰まつた祈りの儀式が行われよつとしていた。

「おーほっほっほっほ。遅かったですわね、美羽さん。まあ、その貧弱な体で、ここまで登つて来れたことは、褒めて差し上げますわ」

先に頂上にたどり着いていた麗羽が、石造りの祭壇さいだんの前で、遅れながら七乃に背負われてやつてきた美羽に向かって高笑いする。

「むつー。張勲、先を越されたではないか！ いつたいどこが近道だったのじゅ？」

「美羽さま。ここは腐つても鯛たい、の泰山ですよ。ですから、近道でも長いものほ長いのです」

七乃の言つとおりだ。やはり、幼き美羽の弱い足腰では、険しい泰山を登るのは無理があつたらしい。むしろ、山頂までたどり着けたことの方が奇跡と言わなければならぬ。

「負け犬はそこで描をくわえて、この高貴な私の、祈祷の儀式を見つればいいのですわ」

麗羽は得意げにそういふと、猪々子、斗詩たちと共に、祈りの儀式の準備に取り掛かった。

彼女は斗詩から受け取った、火のついた松明をかざすと、祭壇の土台の上にある、燈籠に火を灯す。そして、事前に斗詩から教わった筋書き通りに祈り始めた。

「神聖なる泰山の神よ。世に名高き袁家が当主、袁本初がお祈り申し上げます。この私に、大いなる天の滋味をお恵みください。以て、この乱れし世の中を安寧ならしめましょう」

麗羽にしては、相手に頭を下げるつもりの言葉である。もつとも、言つていることはめちゃくちゃなことばかりだが。

だが、何も起こらない。うんとも、すんとも言わない。その場はしばらく、不気味な沈黙に包まれた。

「何も起こらないっすよ、麗羽さま」

たまらず、猪々子が口を開いた。

「う、うるさいですわ！ 違いますの。これは、そう、練習ですわ！」

顔を真っ赤にした麗羽は、じまかすようにしゃべりはじ、もう一度祈つてみた。だが、ダメだった。

「やつぱり、何も起こらないですよう」

弱気な声で斗詩が言つた。と同時に、黙つてこの茶番劇を見ていた美羽が、突然爆笑し始めた。

「わっはっはー、きつと麗羽義姉さまは妾わらわと違つて、心に邪みななところがあるから、山の神の方からお払い箱はじやくなのじやー！」

「わっすが美羽さま。自分のことは棚に上げといて相手の痛いところを突きにいく嫌味なところとい、見ていて愉快ですわ」

「わっはっは、もつと褒めてたも」

そんな美羽、七乃の袁術主従コンビのやり取りを見ていた麗羽の頭に血が上った。

「そこまで言うのでしたら、美羽さん。あなたが祈つてご覧になればいいじゃないですかー！まあ、あなたみたいな小娘の願い事を、いるかどうかわからない神なんかが聞いてくれるなんて、私は思わないですね。おーほっほっほー！」

そう言つて、祭壇の土台から降りようとしたときだつた。

「つて、×！？」

突如、声にならない悲鳴を上げ、後ろに倒れそうになる。祭壇の床の上に生えていた苔で、足を滑らせたのだ。

転倒するまいと、咄嗟に手をついたときだつた。その、「なにか」が音を立てて倒れたのは。

「……あーーー！」

麗羽以外の全員が悲鳴を上げ、咄嗟に土台の上に走り寄つた。倒れたのは、祭壇上の燈籠だったからだ。

「麗羽さま、なんて」とを…」

猪々子が真っ青になつて言つた。

「罰当たりですよ…」

斗詩に至つては顔面蒼白である。

「うわーん、なんて」としてくれたのじゃ… 妾がまだ祈つてないのに…！」

美羽が泣きだした。

「さつすが美羽さま。倒れた燈籠の心配より、自分の祈りの方が重
大だなんて」

困つたような表情をしながらも、七乃が主人への皮肉を言つ。

「お黙りなさい！」

燈籠を倒した張本人、麗羽が声を張り上げた。

「こんなもの、すぐに立て直せばよろしいではありますんの… さ
つさと手伝つて…」

言いかけた時だった。突然、倒れた燈籠が淡く光始めたのである。

「なつ…？」

その場にいた全員が押し黙ってしまった。

「ちよつと、なんですか、これは？」

「そうだよ、斗詩」

「私に聞かないでよ、わからないんだからー。」

「い、いつたいこれはなんなのじや？」

「わかりません、美羽さま。ただ、とてもなく嫌な予感が……」

「わうーひしてこむひかひ、光は徐々に明るく輝き始めた。そして、次の瞬間、

「　「　「　「　……ひ、あひ　……　…？」」「　」「　」「

突然、田の前に太陽が現れたが、「とく、強烈な光を放つたのである。全員が目を瞑らざるをえなかつた。

やがて、光は收まつた。しかし、それが收まつた時、祭壇周辺には誰もいなかつた。あるのは、倒れた燈籠と、そこで炭になつてくすぶつ正在の薪だけであつた。

トリステイン魔法学院のヴェネストリ広場。

天気のいい昼下がり。朱里は一人で木陰に座っていた。

ルイズに召喚されて以来、一人になることなど珍しいはずの彼女が、どうして一人でいるのかと言うと、珍しく「ご主人様」から暇をもらい、木の下で本を読んでいたのである。

朱里が召喚されたとき、彼女が持っていた鞄の中には「漢土の地図」や日用品のほか、何冊かの書物が入っていた。

勉強好きな彼女らしく、兵法書や歴史書の類は前々から入っていた。だが、まだ読んでいない本もある。朱里が召喚される前、都・洛陽で購入しておきながら、今まで鞄の中で眠っていた本が何冊かあつた。

今日はそのうちの一冊に目を通していたのである。

しかし、たかが本を読むくらいなら、ルイズの部屋などでも読めるのに、どうしてこんな人気の無い所に来たのであろうか。

理由は簡単であった。

「はわわ、凄いですう……」

本の内容を人に見られたくないから、といつよりは誰にも見せられないからだ。

あえて言つと、その本は本来、朱里のような小さな女の子が読む
よつな内容ではないからである。

事実、朱里の顔は真っ赤になつていて、目はその本にくぎ付けだ
つた。

なにはともあれ、彼女は「趣味」の時間を満喫していたのである。
だから朱里は気付かなかつた。思わぬ客が、彼女の元へと近づいて
きて「いる」といふこと。

「なに読んでるの？」

突然、誰かに声をかけられた。囁くよつな、小さな声だ。

「はわわーーー？」

朱里は取り乱して、読みかけの本を落としそうになつた。本に夢
中だつた所を、いきなり話しかけられただけでも驚くといふのに。
まして、本の内容は。

「な、なんでもないです！」

慌てて本を後ろに隠しつつ、相手の方を見上げる。

そこにいたのは、青みがかつた短い髪の、眼鏡をかけた少女だつ
た。

(あれ、誰だつたかな?)

朱里は一瞬考える。

(そういうえば、雰囲気が誰かに似ているような……)

たしかに、朱里は召喚される前に、雰囲気だけならそつくりな人物に会っている。無口そうで、無表情な所に限つて言えば、そつくりだ。ただし、目の前の少女は、「その人物」はおろか、ルイズよりも背丈は低く、体の起伏もあまりない。

だが、今はそんなことより、目の前的人物がいったい誰なのか確かめなくてはならない。

「すみません、あなたのお名前は？」

朱里は尋ねた。そういうえば、彼女が目の前の眼鏡少女と面と向かって話すのは、これが初めてだ。（何度かすれ違ったことはあるが）

「タバサ」

少女はそう答えた。

「タバサさん、ですか」

「あなたは？」

「私は諸葛孔明といいます。孔明でいいです」

「「」ウメイ？」

「はい、よろしくお願ひします」

そんな風にして、自己紹介は終わった。

「ところで

タバサと名乗ったばかりの少女が再び口を開いた。（朱里は知らなかつたが、もし、彼女を知る者がここにいたら、驚いて腰を抜かしたであろう）

「何読んでたの？」

そう言つて、朱里が後ろに隠した本のことを聞いてくる。もつとも、表情だけは無表情のまま変わりないが。

「え、これですか？」

朱里は困った表情を浮かべた。そして、本をなんとか隠そうとした。

「つまらないものです。なんでもないですー。」

「見せて」

「本当になんでもないです」

「見せて」

「はわわ、ダメです、ダメです」

「見せて」

「さういふ……」

結局何度も断つても、しつこく詰め寄られたので、とうとう朱里は、その書物を見せざるを得なかつた。

*

「ん、あそこにいるのは、タバサ？」

広場を通りかかったキュルケは、ふと、一本の木の根もとを見た。木の根もとには彼女の親友の姿があつた。ああいう人気の少ないところで本を読んでいるのはいつも通りだ。

だが、今日ばかりは違つた。

「あれは？」

キュルケは目を疑つた。いつも一人でいるはずのタバサの横に、もう一人、別の人物がいた。彼女は、それが誰かを知つている。

「コウメイちゃんじゃない。あの、ヴァリエールの使い魔の」

目を凝らして見ると、一人で一緒になつて、一冊の本を読んでい

るようだつた。

「へえ、珍しい」ともあるものね

そう呟いたときだ。タバサがこいつに気付いたのは。

キュルケに気付くやいなや、タバサは本を朱里の方に返して立ち上がると、いつも通りの無表情のまま、こっちの方に、すたすたと歩いてきた。

「タバサ」

自分の方にやつてきた眼鏡少女に話しかける。

「あなたが他人と一緒に本を読むなんて、珍しいわね」

「……」

タバサは何も答えない。しかし、キュルケはかまわず話し続ける。

「そうそう。あの『ウメイちゃん』と一緒に本読んでたみたいだけど、どうだった？」

すると氣のせいいか、タバサは一瞬、顔を赤らめたかのように見えた。そして、一言だけ言った。

「ユニーク

ちなみに、朱里の讀んでいた本の文字は全部漢字漢文なので、タバサには文字の意味こそ理解できなかつたものの、むしろその本は、

字よりも絵が主体のため、だいたいの内容はわかつたのであった。

その後、朱里にはハルケギニアに来て以来初めての読書仲間ができたといつ。

*

漢土。青州のとある県にて。

「……くしゅん……！？」

「人和ちゃん、どうしたの？」

「まさか風邪？」

「うん、大丈夫。天和お姉さん。ちー地姉さん」

「そう？ 具合悪かつたら、すぐお姉ちゃんに言つてよ

「そうそう、今日はせっかくの舞台なんだから」

「大丈夫。心配してくれてありがとう。それより、早く始めよう」

「うん、そうだね」

「皆あー！ 今日は私たち張三姉妹の舞台に来てくれてありがとうー。」

「今日も張り切っていぐよーー。」

「私たちの歌と踊りをご覧ください。それでは……」

「　　音楽、かいしーーー！」

『ほあー、ほあー、ほあーーーーー』

第十一席 タバサ、孔明に詰め寄るの」と（後書き）

いかがでしたでしょうか？

タバサは書くのが難しい（汗）

そう言えば、外見だけならタバサは人和に似てるような。（とある一部分を除いて）

それと、アニメ版のタバサの中の人、恋姫のあの娘と同じですね。
（大人しいこと以外、全然キャラ違うけど）
さて、これからは買い物とフーケになりますが、これは困った（苦）
フーケの方は何のアイテムかは決まっているんですが、買い物はどうしよう。

デルフは出せないし。（爆）

うーん、困った。

でも、なんとかしてみます。

それでは、またお会いしましょう！

第十三席 孔明、ルイズたちと街へ赴かんとするのijt（前書き）

お待たせしました。

今回は、ゼロ魔原作路線とは大幅に違う話になります。
また、前半ではこの話で初めての戦闘が行われます。
どうぞ。

第十三席 孔明、ルイズたちと街へ赴かんとするの」と

とある森の中

（あれは私の幼い頃に亡くなつたおばあちゃん、おばあちゃん、あんなところに……）

「「麗羽さま……」」

「……は…？」

田を覚ました麗羽の目に飛び込んできたのは、彼女の大切な、二人の部下たちの顔だった。

「猪々子、斗詩……」

「よかつた、気がつかれたんですね！」

「麗羽さまー！ つねつても、ひっぱたいても、うんともすんとも言わないから、死んじやつたかと思つたじやないですか！」

主人の無事を確認して、嬉し泣きする一人。それを見て、麗羽は二人に心配をかけていたと悟る。

「一人とも、私のこと心配してくれていきましたの？」

「「当たり前じやないですか！」」

「まつたぐ、人騒がせなヤシジヤ」

皮肉たつぱりな声が聞こえた。

「美羽さん」

「妾たちの心配をよそに、こつまでも寝てるなんて、麗羽義姉さまは本当に寝ますけなのじや」

「わっすが美羽さま。実際に起きたのは袁紹さまが起きるまでの少し前だったのに、ここまで言えるなんてー」

「どうでもこいですわ、そんなことー。」

憤った麗羽が言った。

「誰が何番田に起きたかなび、今は興味ありませんー。それより、じいじせどりですかー?」

たしかに彼女の言ひとおりである。彼女たちはつこわっせまで、泰山の頂上にいたのだ。それなのに、こんな森の中につるのだから、驚くのも無理はない。

「そ、それがわからないんですよ」

「わうなんですよ、麗羽さまー。あたいいら、あの光にのみ込まれて、気が付いたらこんなところー。」

「なんですかー!?」

部下一人の言葉を聞いた麗羽は、次に美羽たちを見る。

「妾たちに聞かれても困るのじや」

「そりなんですよ。『ジジがビビのかわいぱつ……』

直後であった。彼女たちの背後の茂みから、ガサツといつ物音がしたのは。

「な、なんですか？」

「なんじや、今の音は？」

「わからないつすよ」

「麗羽さま、私たちの後ろに「トドガリください」。張勲さん、袁術さんを」

「わかりました」

珍しく戦慄を覚える一行。幸いなことに、各自、武器は所持していた。（もつとも、まともに戦えるのは猪々子と斗詩の二人だけだが）

猪々子、斗詩の二人がそれぞれの武器をかまえ、七乃が麗羽と美羽を後ろに下がらせる。

彼女たちが体勢を整えた時、ついにそれは姿を現した。

「なつー？」

麗羽が思わず顔をしかめた。

「なんなのじや、あの化け物は！？」

美羽が叫んだ。

彼女たちの目の前に現れたのは、醜く太った体つきの、豚にそつくりな顔をした化け物だった。それも、四体もいる。

「美羽さま」

さすがに戦慄を覚えた七乃が自分の主を抱き寄せる。一方の化け物たちは、そんな美羽たちを見て、『どうな獲物を見つけたと言わんばかりに奇妙な声を上げながら喜んで』いるようだった。

「ひつ……

五人の中でも最も幼い美羽は、恐怖で今にも泣き出しそうになり、より強く七乃にしがみつく。

「猪々子、斗詩！」

麗羽が呼び掛けた。

「なにをやつているんです。あんな化け物、せつせと倒してしまってなさい！」

「「はい、麗羽さま！」」

猪々子と斗詩が、それぞれの武器を構えて、相手の化け物に挑みかかる。

一方の化け物たちも、手にした棍棒で襲いかかってきた。

「ぐつ」

相手の一匹^{いっぽ}が振り下ろした棍棒を、猪々子が自分の武器、斬^{ざん}山刀^{さんとう}で受け止める。鍔迫り合いに持ち込んだのだ。

「重い……けど……負けるもんかあ！」

相手の重みになんとか耐えきり、逆に押し返して敵のバランスを崩させる。

「もうひつたあ！」

その隙に、斬山刀で敵を肩口から切りつける。化け物は左の首筋から血を噴き出して倒れた。

「よつししゃあ！」

そのまま横では、斗詩が相手の振り下ろした棍棒を回避し、得物の金光鉄槌^{こんこうてつち}を手に飛びあがつたところであった。

「えいっ！」

巨大な鉄槌が化け物の脳天めがけて振り下ろされる。直後、頭に鉄槌の直撃を受けた化け物は折崩れ、一度と立ち上ることとはなかった。

背中合わせになつて一息つく猪々子と斗詩。だが、敵はまだ二匹残つている。

「斗詩」

「猪々子」

二人は目配せすると、それぞれ別々の敵目がけて突進した。そして、相手が棍棒を構えるよりも早く、各自の武器を振るつた。

次の瞬間、勝敗は決した。二匹の化け物のうち、一匹は猪々子によつて首をはねられ、もう一匹は斗詩によつて頭を叩き割られていった。痛みを感じる暇があつたかどうかは、わからない方がいいかもしれない。

「猪々子、斗詩。さすがですわ！」

麗羽が大喜びで叫んだ。

「二人とも、凄いのじゃ！」

美羽が褒め称えた。

「珍しいですわね。美羽さまが他人を褒めるなんて」

「わつはつは、苦しゅうない。もつと褒めてたも」

と、いつものやり取りを始める美羽と七乃。

「それほどでもないですよ」

斗詩が少し控えめに言ひ。

「そうそう。なんせ、あたいらは百人力。あんなの百匹来たつて恐くないやー。」

そう言つて笑い飛ばす猪々子。それにつられて、全員が笑う。だが、それも束の間であつた。

「い、猪々子、斗詩

突然、麗羽が笑うのを止めた。

「どうしたんですか、麗羽さま」

「う、う……」

引きつった顔で後ずさり始めた。その横で、美羽や七乃も麗羽と同様に、猪々子と斗詩の後ろを指しながら引きつった表情で後ずさる。

「う、後ろじや、ふたりともー。」

「後ろです、後ろー！」

「「後ろー。」」

訝しげに振り向いた二人は凍りついた。

なんと、たつき倒したのと同じ化け物が迫つてきているではないか。それも、一、三十匹も。それらは、先ほど倒された仲間の亡骸を見て、仇を討たんとばかりに憤つていた。

『い、いやああああ！？』

今度ばかりは全員逃げ出すしかなかつた。いくらなんでも、数が多いすぎた。

真つ先に麗羽^{れいう}が逃げ、次に美羽を抱っこした七乃^{しづの}が続き、猪々子^{いのこ}と斗詩^{とし}が殿^{しんがり}となつて逃げたのである。

なお、彼女たちは知る由もなかつたが、近くには古びた木の看板が立つていて、それには彼女たちの知らない文字でこう書かれていた。

『危険。この辺り一帯はオーク鬼の出没地域につき、立ち入り禁止』

*

「はわあ～

朱里は感嘆の声をもらした。

リリはトリステイン王国の王都、トリスターニア。

天気のいい日、朱里はルイズと一緒にこの街に来ていた。彼女にとつては召喚されて以来、初めて訪れた街である。始めて見る物も多いので、つい声をあげてしまう。

さすがに、人口一一百万人をうたわれた洛陽と比べてはいけないが、それでも、活気のある街だ。

なお、どうして魔法学院を出て、わざわざこの街に来たのかといふと、それは買い物のためである。

何を買つかと言えば、いろいろだ。人間が生活する上で必要なのは、衣・食・住である。ハルケギニアに召喚されてしまった朱里にとって、今のところ、食と住に関しては不自由していない。

しかし、衣服に関しては召喚されたときに着ていた物と、シエスタから貰つたメイド服を除けば、何も持つていなかつた。そうなると当然、衛生上の問題が発生する。特に、女の子である朱里にとっては、なおさらのことで、ことに下着の問題は早くなんとかしなければならなかつた。

そこでルイズに相談したところ、彼女は以外にもあっせりと買ってくれることを認めてくれたのである。

例の「マントウ」を駆走になつて機嫌が良かつたこともあつたであろうし、あるいは同性の朱里に同情的だったのかもしれない。また、この機に自分の国を自慢しようと思つたのかもしれない。

なにはともあれ、授業が休みの「虚無の曜日」に街へ行く運びと

なつたわけである。

「はしゃぐのはいいけど、財布すられないよつ氣をつけてよ。この辺、スリが多いんだから」

ルイズが、まるで姉が妹を注意するかのよつな口調で言った。彼女は、財布は下僕が持つものだ、と言つて、財布をそつくり朱里に持たせていた。最初預けた時に、朱里がその金貨の重さに驚いて腰を抜かしそうになつたのは別の話である。

「それにしても意外ね」

ふと、ルイズが言った。

「あんた、馬には乗れるのね」

「え、あ、はい。一応、乗れましゅ、あう……」

二人は学院から街まで馬で來たのである。思い切つて飛ばすよつなことはなかつたが、ルイズにしてみれば朱里のよつな子どもが一人で馬に乗れたことは意外だつたようだ。

「まあ、それはそうとして」

道を歩いていたのに、突如、ルイズは立ち止まり、そして後ろを指さした。

「なんで、あんたたちまで来ているのよー!」

ルイズが指さした先には、彼女とは犬猿の仲のキュルケと、その

親友（ルイズはまだ名前を知らないが）のタバサの一人がいたのである。

「あーら、来てはダメだったの？ ゼロのルイズ」

ルイズを挑発するかのように、キュルケが言つ。ちなみにタバサは無言だ。

「ダメに決まってるわよ！ だいたい、なんで人様の後をつけてるのよー？」

「人聞きの悪いこと言うわね。あたしはタバサが新しい本を買いに行くというから、一緒に行つて、ついでに何か買つたり食べたりしに行こうと思つただけよ」

それにタバサもコクリと頷く。それを他所に、ルイズとキュルケの間には火花が飛び散る。

「はわわ、落ち着いてください」

朱里が一生懸命なだめた。

「ここで会つたのも、きっと何かの縁ですよ。ほら、『旅は道連れ、世は情け』って言つじやないですか」

「そんな縁、いらないわよ！」

ルイズは怒鳴り散らした。一方のキュルケはやや微笑んで言つた。

「ほら、『ウメイちゃんもいつ言つているんだし、買い物くらい、

楽しさないと

どうやら、この論争はキュルケの方に分があつたようだ。

「あー、もう。わかつたわよ。」

焼けっぱちなつたルイズが、朱里の手を引いて、ずんずんと街中を進む。

「え、ちょっと。ルイズさん？」

「まさかとしてないで、わざわざ行くわよ。まずは服よ、服！」

そんなルイズたちの後から、キュルケとタバサが続く。

「あらあら、おもしろことになつそつね」

「……」クリ

ソリして、少女たちの休日が幕を開けた。

だが、彼女たちは後ろからついてくる者たちには気づいていなかつた。

*

ルイズたち一行からやや後ろ。そこには、四人の少女たちの後をつける一団があった。

「ちょっと、こいつのは止めた方がいいんじゃ？」

魔法学院の生徒らしい恰好をした、眼鏡をかけた少年が不安げに言った。

「大丈夫だつて」

そう言つたのは、「風上」のマリコルヌだった。

「休日に学院の生徒が買い物に来てるのは珍しくないだろ？？」

「その通りだ、諸君」

そう言つて薔薇の花を手に気障つているのは、ギーシュだ。

「僕たちは崇高な目的を持つて集つてゐるのだ。少なくとも、始祖ブリミルが罰をお下さになるよつたことではない」

「そういう前の目的はなんだよ？」

また別の生徒が質問する。

「決まつてゐるじゃないか。この虚無の曜日を利用して、モンモンシーへの贈り物を買いに来たのだ」

「だつたらどうしてこの集まりに参加してるんだ?」

「いや、それは……。そつ、もう一つはコウメイ君への贈り物だよ。あれから、いろいろと教えて貰つてゐしね。これを機に彼女の好きなものを研究しようかと」

「何を教えて貰つてるんだよ」

「別に君には関係ないだろ? それより……」

ふと、ギーシュが言葉を濁した。

「まあ、人の気持ちに付け込むつもりはないが、少し人数が多くすぎないかい?」

「たしかにそうだな」

マリ「ルヌたちも同意する。

今、ここにいる男子生徒の数は十人を超えていた。

これがいつたいなんの集まりなのかというと、言つまでもなく「自称ファンクラブ」の集いであった。ある者は「コウメイファン」、またある者は「キュルケファン」、またある者は「タバサファン」、といった具合である。(どうやらライズファンはいないようだ)

「本当に大丈夫なんかい?」

「まあ、大丈夫だろ?」

ギーシュたちが不安を覚えつつある中、自称キュルケファンの少年の一人が、リーダーシップをとつて演説を始めた。

「同志諸君。もう一度、今日の目的を確認する。今日我々が集つたのは、ほかでもない。各々が愛する乙女たちの秘密を探り、最高のプレゼントを用意することにある！ そして、もう一つ。彼女たちの身に何かがあれば、男たる我々が命を賭して守ることだ！ 異存はないな！？」

『オー……』

そのような馬鹿騒ぎを後に、すぐ近くの、この辺ではたいへん変わった雰囲気の食堂の中で、フードを口深にかぶつた人物が、目の前の変てこな料理を前に、よだれを垂らしているところだった。

第十三席 孔明、ルイズたちと街へ赴かんとするの」（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて、猪々子さんと斗詩さん。あなた方が、この物語史上、初めて戦闘行為を行つた人物となりました。大変、おめでとうございます（苦）

さて、この小説も「残酷描写あり」にしないといけません（涙）

なお、朱里が馬に乗れるのはアニメ版で乗つっていたのに基づきました。

桃香や桂花などの非戦闘員も移動するだけなら乗つてしましました。

さて、この度始まつた買い物は果たしてどのような結末を迎えるのか。

次回にご期待ください。

第十四席 孔明、買い物を楽しむところのジョルジ（前書き）

お待たせしました。

今回の話は完全にギャグです。

ちなみに、意外な再会があります。

それでは、どうぞ！

第十四席 孔明、買い物を楽しむとするの」と

ブルドンネ街。

街に着いたルイズたち一行が真っ先に入ったのは、服の仕立て屋だった。

今回、街に来た目的は、朱里のための衣服類をそろえるためである。だから、一番最初に仕立て屋に入るのは至極当然のことだった。

その店はルイズの行きつけの店らしく、店の人たちは快く承ってくれた。

しかし、さすがに朱里が今着ているような服と同じものはそう簡単には作れない。作れたとしても、相当な時間がかかるであろう。

そこで、ハルケギニアの平民の女の子が着るような、動きやすい、^レ普通のシャツとスカートを何着か作つてもらひことにした。

ついでに下着もいくらか揃えて貰つて、服関連の買い物は終わり、のはずだった。

「ちょっと待つて」

仕立て屋の店主が一行を呼び止めた。

「お嬢ちゃん。この新商品、試しにこれ着てみない?」

そう言って、朱里に何かを勧めようとする。その「新商品」を見た朱里は、やや恥ずかしそうにつむいた。

「私ですか？」

「そうそう。サイズ的にも似合ひそうだし。ちょうど、似合ひそつな子を捜してたんだねー」

「でも、いいんですか？」

「いいって、気にしない気にしない」

「ですが……」

「いいんじゃないの、コウメイちゃん」

キュルケが口を挟んだ。

「あなたなら、何着ても似合ひそうだし」

「キュルケさん……」

「わづね、着るだけなら別にいいわよ」

財布を確かめながらルイズも賛同した。

「ルイズさんまで……」

ますます恥ずかしそうな朱里。残るはタバサのみだったが、

「ね、タバサ。別に見られて減るもんじゃないし」

「コクリ……」

「はうは……」

四面楚歌である。そんなわけで、朱里は「新商品」を試着する運びとなつた。

そして、「新商品」を試着して戻ってきた朱里を見て、皆絶句した。

「凄い、似合つてゐるわー。」

これはキュルケである。

「悔しいーー！でも、可愛いわー。反則よ、これ！」

これはルイズである。

「……反則……」

これはタバサである。

そんな皆の大絶賛の嵐の中、朱里はますますはずかしそうに顔を赤らめた。

「はうは、私、いつもヒラヒラしたのは、ちょっと……」

朱里が恥ずかしがつていてもかかわらず、皆が大絶賛の一品。

それは、黒と白を基調にしたフリル付きのワンピースだった。しかも、何故か肩のところは露出していて、そのくせ袖は付いているのだ。

おまけに、いつもは帽子の土台となっている短い金髪の頭には、ヘアバンドが取り付けられていて、これがいつそうの可愛らしさを引き立てていた。

ルイズたちが反則と言ったのも過言ではない。

店主は買つていかないと勧めたが、ルイズも自分の財布が惜しいのである。結局その場では買わなかつた。朱里は少しホッとした。自分の恥ずかしい姿をこれ以上他人に曝すことはないと思ったからだ。

しかし、朱里の安心は脆くも崩れ去るのであつた。

ルイズ一行が店を去つた直後、その仕立て屋に、何故か鼻血を流している、魔法学院の生徒らしき少年たちが殺到したのである。

仕立て屋は一瞬恐慌状態に陥つたが、謎の鼻血軍団たちがいろいろと買い物していくので、なんだかんだで儲かつたのであつた。

次に寄つたのは本の置いてある店である。

タバサが最初に店に入った。朱里たちはそれに続いて店に入ったのである。

「はわ～、本がたくさん……」

朱里は息を呑んだ。本好きな彼女にとつてはたまらない光景である。

ただ、彼女はハルケギニアの文字は知らなかつた。

仕方がないので、適当に見て回ることにしたのである。その際、朱里は適当に一冊を掘んでパラパラとめくつてみた。字が読めないなら、絵のある本にしようと思つたからだ。

だが、その時、朱里はふと違和感を覚えた。

「あれ？」

もう一度、書いてある文字を見つめる。

「クツクベリー・パイの作り方、つてあれ？」

彼女は戸惑つた。何と、全然知らないはずの文字を読めたのである。言つておくが、今朱里が手に取つている本は、まぎれもなくハルケギニアの文字の本だ。

(なんで? 知らないはずの文字がなんで読めるの?)

なんかの見間違いじゃないかと、朱里は他の本も手にとつてみた。いろんな本の、様々な文字に触れてみたが、やはり結果は同じだった。

(なんで、ビ'うじ?)

朱里は氣味が悪くなつた。ルイズに呪喚されるまで、触れたこともないはずの文字が、手に取るようにわかるのだ。

(わけがわからない)

だが、その戸惑いもすぐに終わりを迎えた。また別の本を手に取つたところで、彼女の手はその本にくぎ付けになつた。

「はわわ。これは、す、凄いですか……」

ついでにまでは突然のことに対する戸惑っていたのに、打つて変わつて、一冊の本の擒^{ひき}となつてしまつた。

ひとたび熱中すると、もう止まらない。ついでにまでは氣味悪く思っていたのに、朱里はもうすっかり、その「謎の能力」に感謝の念を覚え覚えていた。

そうして顔を赤らめ、目を小さな黒豆のよつこにして「その本」に熱中していたときだった。

「なにしてるの? カメイ、行くわよ」

後ろからルイズの声がした。既にタバサが買い物を終え、皆で外へ行こうとしている。

「はわわ！？」

朱里は慌ててその本を本棚にしまった。幸い、なにを読んでいたのか、ルイズにはばれていない。本を直すと、朱里は慌ててルイズたちの方へ歩み寄った。

なお、朱里は本を読んでいた時、自分の前髪に隠れた、おでこのルーンが微かに光っていたことには、まったく気がつかなかつた。

余談だが、その後、その本屋には少年たちが大勢訪れ、朱里が最後に立っていた所の本がやたらと売れたという。

*

本屋を後にしたルイズたち一行は、ブルドンネ街の狭い大通りを歩いていた。

歩きながら、何かおいしそうなものを探していたのである。

「あら」

キュルケがふと、とある店を指した。

「お~いしそうな飴が売つてゐるじゃない」

それは、小さな円筒型の、やけに細長い棒状の飴だつた。見れば、様々な色の飴が置いてある。どうやら、色によつて味も異なるらしい。

「そうね。買つてこいつかしら?」

ルイズも立ち止まつて言つた。タバサも頷き、朱里も同意した。皆、やや小腹がすいていた。

そんなわけで、一人が一本ずつ（朱里はルイズのお~いりで）の飴を手に取つたのである。

ちなみに、ルイズは赤色のベリー味。キュルケは白色のミルク味。タバサは緑色のハシバミ草味。そして朱里は黄金色の蜂蜜味を取つたのであつた。

そして彼女たちは、その棒状の飴を舐めながら歩いたのだが、それを後ろで見ていたギーシュやマリコルヌたちが馬鹿のように興奮していたことは知らなかつた。

もちろん、その日の飴屋台は過去最高の売り上げを記録したのであつた。

*

「いやー、今日は愉快だねー」

「やけた面でマリコルヌが言った。

「いこものは見れるし、おまけに女の子へのプレゼントも手に入る。こんなに日も珍しいものだねー」

「そうだな

ギーシュも同調する。

「プレゼントもきちんと用意できだし、後は各自渡すだけだ」

「しかし、なんか物足りないよなー」

ふと、隣にいた、ギーシュの友人らしき少年が言った。

「なにがだ?」

「だって、ほら。こうやって女の子の跡をつけ回すだけで終わるなんて、物足りないじゃないか」

「たしかにそうだねー」

マリコルヌが頷いた。

「ああ、いつそなんか、ちょっとした事件でも起こらないかな？
例えば、乙女がピーンチ、みたいな展開になつて、それを僕らで力
ツコよく助けて、乙女のハートをゲーツト、みたいな……」

「いくらなんでも、それは出来すぎだろ？？」

眼鏡少年が口を挟んだ。

「だいたい、『ゼロのルイズ』を含めて、メイジが三人。その辺の
「ロツキが手を出せるわけが……」

言いかけた時だ。耳をつんざくような悲鳴が響き渡つたのは。

「なんだ！？」

「あつちだぞ！ 裏通りだ！」

ギーシュたち男子軍団、十数人は、ただちに悲鳴のあつた方へと
急行した。彼らは「ミミの散らかる裏通りの方に入つた。そこから悲
鳴が聞こえたからだ。そして曲がり角を曲がつたところで、彼らは
見た。

「ああ！？」

真っ先にマリコルヌが悲鳴をあげた。

「ロツメイちゃんが！」

「なに？？」

ギーシュたちも見た。なんと、汚い裏通りの真っ只中で、朱里がいかにも悪そうな男たち三人に捕まっているではないか。（ちなみに、男たちは恋姫世界でいつも出てくる三人組に、服装以外はそつくりだ）

どうやら、ルイズたちが目を離した一瞬の隙に、男たちが朱里を路地裏へと連れ去ろうとしたようだった。見たところ、ルイズ、キルケ、タバサの三人が杖を構えてはいるものの、チビな男が朱里の首すれすれに短剣を突き付けていたので、どうすることもできないようだ。

「大変だ！」

「どうするんだよ！？」

「落ち着きたまえ、諸君！」

ギーシュが皆に呼び掛けた。

「こうこうとおこな、男の見せ場というものだ！ 皆で力を合わせて助けようではないか！」

気障つつ、まともなことを言つて、皆の動搖を抑えようとしたのである。だが、現実はそうはいかなかつた。

「俺が助ける！」

「俺が先だ！」

「いや、俺だ！」

「僕だ！」

「どけ、邪魔だ！」

功名心のあまり、男子軍団は先駆け争いをしてしまったのである。

「お、おい。落ち着きたまえ……」

ギーシュが慌てて止めに入ろうとしたとき、男子の誰かの腕がギーシュの体を突き飛ばした。突き飛ばされたギーシュは後ろに転んでしまった。幸い、ケガはなかったのだが、その際、近くに立てあつた木箱を倒してしまった。それがさらなる惨事を呼び起こしたのである。

「ん？」

皆が一斉にその箱を見た。どうやら生ごみを入れる箱らしい。直後、箱の中から大量の黒い何かが出てきた。それを見たギーシュ達は、悲鳴をあげた。

「ギャアアア！…？」

出てきたのは、不衛生な環境に発生する、害虫の大群だったからだ。その場はたちまち阿鼻叫喚の地獄に変わり果てた。これでは、救出作戦どころではない。結局、彼らはカツコいい姿を見せることは無かつたのであった。

*

一方のルイズたちである。

「ちょっと、あんたたち！」

ルイズが、朱里を捕まえている男たちに向かつて怒鳴り散らした。

「わたしの『従者』を返しなさいよ！」

だが、男たちは下品に笑うだけだった。

「そりゃ、貴族さまの従者か。」りやあ、驚いた

リーダー格の背の高い男が言った。

「儲けやしたね、アーキ」

「そりなんだな」

「へへへ、そこ」の貴族のお嬢ちゃん

「な、なによ」

思わずたじろぐルイズに向かつて、男は無茶な要求を突き付ける。

「俺たちと取り引きしないか？」この可愛い女の子を傷つけたくないや、お嬢ちゃんたちの有り金、全部出しな」

「もううん、その杖もだ」

「なつーー？」

キュルケが怒った。

「汚いわよー！」

「へえー、そうかい。それならそりで、いつまでも手はあるんだ。おい、テク。しつかりと押えておけ

「わかったんだな

そして、ある「」とか、抑えつけられて無防備な朱里に向かって、卑しい笑みを浮かべながら近づき始めたのである。

「はわわ……」

朱里は恐怖でどうする事もできない。すなわち、貞操の危機である。

「やめなきこー！」

ルイズがそう叫んで、思わず杖を振り上げようとしたときだった。

「痛てえーー？」

突然、朱里に刃物を突き付けていたチビ男が悲鳴をあげたのは。見ると、彼の掌には、一本の串が刺さっていた。

「な、なんだ？」

動搖する男たち。そんな彼らを見下すかのように、近くの建物の屋根の上に、人影が現れる。

「か弱き少女を、路地裏に連れ込んで、狼藉を働くとする悪党どもめ！」

「なにい！？」

声をあげる男たち。だが、次の瞬間、屋根から華麗に飛び降りてきた「誰か」が、朱里を抑えつけていた大男の頭を踏み台にした。大男が倒れた隙に、朱里はルイズたちの方に駆け寄る。そしてさつきまで自分のいた所を見た瞬間、石になつた。

「だ、誰だ、貴様！」

リーダー格の男の問いに、その謎の人物は答える。

「ある時は霧に溶けた謎めいた美人武芸者。またある時はさすらいの 狩人。しかしてその実態は……」

その答えを聞く前に、朱里は普段だつたら絶対に出さない馬鹿力でルイズたち三人を引っ張つて逃げてしまつた。一刻も早く、自分が知つている人と会いたいはずの朱里だつたが、今回だけは話が別だ。

結局、自称、「謎の美人武芸者」が悪党たちを片付け終えたときには、朱里たちはとっくに行方をくらましていたのであった。入れ替わりに、一部始終を見ていた男子軍団がサインを求めてきて、快く応じたのは別の話である。

なお、後でルイズたちがその人物の恰好について評したが、芳しいものはなかつた。

「何よ、あれ。かつこ悪い仮面付けて」

これはルイズである。

「美人なのは認めるけど、あれはちょっとねえ」

これはキュルケである。

「……変態仮面……？」

これはタバサである。

こんな有り様であった。そんなわけで、ついに朱里が「謎の人物」と知り合いである、と話すことはなかつたのであった。

余談だが、翌日、ルイズ、キュルケ、タバサの各々の部屋の前に、大量の「おみやげ」が置かれた。特にルイズの部屋の前に置かれた「コウメイ」宛のプレゼントの中身に、朱里は大変戸惑う羽目になつた。一方、ルイズへのプレゼントは棒状の「飴」だけだったことで、彼女はこの不公平さに激怒したという。

なお、その日の食堂で、とあるカップルが仲良くしていたとか、
していなかつたとか。

第十四席 孔明、買い物を楽しむことかねのJPN（後書き）

ヒカルの武器庫にて

「おこ、俺様の出番はどうしたー?」

「ハルセ、テル公。お前なんか、あとがわに出でたましだと思へー。世の中にはなあ、本編と違つて、この話ではあとがわは出て出でないヤツだつてこるんだよー。」

「なんせどりて納得できるか! 出番くれー。」

ねづまー

第十五席 孔明、趙雲と再会するの！」（前編）

お久しぶりです！

卒論が終わり、やっと書けました。

今回は、朱里がようやくあの人と再会します。

少し無茶かもしませんが、お楽しみください！

第十五席 孔明、趙雲と再会するの」と

トリステイン王国、とある街道

なんとかオーク鬼をまいた袁家一行は、日が差し込む森の中の道を歩き続けていた。歩くこと既に数日。ろくに食事も取れてない一行は、誰が見てもわかるほどやつれ果てていた。麗羽、猪々子、斗詩の三人組が装着している金びかの鎧はとっくに色あせ、元の輝きは微塵とも感じられない。それだけではなく、一行全員の着ている服も所々汚れ、麗羽と美羽に至っては、普段よく手入れしてもらっているであろう、長い髪は痛んでぼさぼさになりつつあった。仮に、ハルケギニアの住人が、今の彼女たちの姿を見れば、「落ち武者か浮浪者」の一行と間違えるであろう。（数日前なら、「貴族と従者」の一一行にも見えたであろう）

そんな彼女たちを嘲笑つかのよう、空の太陽は明るく照りつけた。

「のどが渴いたのじゃ……」

美羽がうなだれながら言った。無理もない。ただでさえ一行の中では最も幼い上に、ここ数日、ろくなものにありついていないのだ。

「蜂蜜……、誰か、蜂蜜水をくれたも……」

「ダメですよ、美羽さま」

七乃が残念そうに言った。

「あるのは、地の水。そうでなければ血の水だけです」

「そんなの飲みたくないのじゃ……！」

美羽は今にも泣き出しそうだった。

「うわーん、誰か蜂蜜を……！」

「お黙りなさい、美羽さん！ あなたのような小娘の泣き声を聞いてると、じつちまでのどが渴くじやありませんの！」

「ふ、一人とも落ち着いて！」

「大声出したら、よけいにのどが渴きますよー。」

「うわーん、蜂蜜うー！」

「ひるむなさいですわねー！」

「美羽さま、もう少しの辛抱ですよ」

「張勲、妾はその台詞はもう、聞き飽きたのじゃ……！」

ひつして、一行の旅は続くのであった。

トリステイン魔法学院

学院長室の一階下にある宝物庫の扉の前で、秘書のミス・ロングビルは突っ立っていた。

ただし、ぼうっとしているのではない。指揮棒くらいの長さの杖を手に、なにやら呪文を唱えていたのであった。

彼女が唱えたのは、扉の鍵を開ける魔法、『アンロック』である。しかし杖を振つても、錠前はなんの反応も示さない。

ミス・ロングビルも、それくらいは最初からわかつていたらしく、次の呪文を唱えた。

次に唱えたのは、『鍊金』の呪文である。詠唱を完成させ、再度杖を振つた。

だが、扉には何の変化も見られない。

「スクウェアクラスのメイジが、『固定化』の呪文をかけてるみたいね」

そう呴いた時、誰かが階段を上つてくるのに気付いた。ミス・ロングビルは杖を折りたたみ、ポケットにしまった。

やがて、足音の主が現れた。

「おや、ミス・ロングビル」

やつてきたのは「ルベールだった。

「ミスでなにを?」

「ミスター・ルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

ミス・ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべながら言った。

「はあ。それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日かかりですよ。何せここはお宝ガラクタひつくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしょう?」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

「それが……、」就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど。」就寝中ですか。あのジジイ、じゃなかつた。オールド・オスマンは、寝ると起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしよう!」

「ルベールはさつまつと歩き出しだが、なにを思ったのか、すぐ立ち止まり、ミス・ロングビルの方を振り向いた。

「その……、ミス・ロングビル

「なんでしょう？」

「もしよかつたら、なんですが……。昼食を『』一緒にいかがですか
な？」

男性から女性への、さりげないお誘いである。ミス・ロングビル
は少し考えたあと、『』に『』と微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

そんなわけで、二人は並んで歩きだした。

「ねえ、ミスター・『ルベール』

ミス・ロングビルが、気をよくしたコルベールに話しかける。

「は、はい？ なんでしょう」

「宝物庫の中に、入つたことはあります？」

「ありますとも」

「では、『ヒラフ屠龍の宝剣』を『』存知？」

「ああ、あれですか。あれは、なかなか珍しい剣でしたなあ

ミス・ロングビルの目が光つた。

「と、申されますと？」

「なんというか、この辺では見ない綺麗で立派な飾りつけが施されていますし、なにより、その辺の店で売られているような剣とは違った威厳みたいなのが伝わってくるよつな……」

「それは一目見てみたいですね」

「まあ、それでしたら、また今度、オールド・オスマンにでも頼んでみましよう。それより、何をお召し上がりになります？ 本日のメニューの中には、なんでも、『フカヒレ入りスープ』とかいう珍しいものが出来るやうですが……。うん、しかし最近珍しい料理が多くなりましたな。ま、美味しいからつい食べ過ぎてしまうのが癖の種ですが。ま、今度コック長のマルトー親父に会ったときに作り方でも聞いておきましょう。なに、僕はマルトー親父に顔が利きましてね……」

「ミスター

ミス・ロングビルは、コルベールの話を遮った。

「は、はい？」

「料理の作り方の話はまた今度お聞かせ願えないですか？」

「おっと、つい喋りすぎましたな」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね。あれでは、どんなメイジを連れてきても、あけるのは不可能でしちゃね」

「そのようですね。メイジには、あけるのは不可能だと思います。な

んでも、スクウェアクラスのメイジが何人も集まつて、あらゆる呪文に対抗できるよう設計したそうですから」

「ほんとに感心しますわ。ミスター・コルベールは物知りでいらっしゃる」

ミス・ロングビルがコルベールをおだてあげるよつて言つた。

「え？　いや、……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……、研究一筋と申しましょつか。はは。おかげでこの年になつても独身でして……、はい」

「コルベールが苦笑まじりに言つて、ミス・ロングビルがさらにおだてた。

「ミスター・コルベールのそばにいられる女性は、幸せでしょうね。だって、誰も知らないことを、たくさん教えてくださるんですから……」

「いや、もう！　からかつてはいけません！　はい！」

こうして、コルベールはすっかり気分を良くしたのである。その後、彼はミス・ロングビルをユルの曜日に開かれる「フリッゲの舞踏会」に誘いたいあまりに、彼女からの質問に軽々しく答える運びとなつた。その答えたことの中には、彼とオスマン氏しか知らない、宝物庫の重大な欠陥に関することがわずかに含まれていたのだが、悲しいかな、その時のコルベールは、つい口を滑らせてしまつたのである。むろん、それが原因で、少し後に騒動が起ることなど、彼は知らない。

*

一方その頃、朱里は人気のない洗濯場にいた。

どうして人気がないのかというと、ルイズをはじめ、学院の生徒たちは授業中。シエスタたち、学院内で働くメイドたちは昼食の準備中だからだ。

朱里はなにやら一枚の紙切れを手にしていた。その紙は、今朝、朱里が洗濯をしていた際に、突然彼女の目の前に投げ込まれたものであつた。

そこには、この学院内では朱里にしか読めない文字で、こう書かれていた。

「後で、一人でこの木の前に来るよ。」
合言葉は、『常山の
登り竜』

それを読んだ朱里は、一瞬で理解した。

そして、授業に行くルイズに一言断つた後、こうして洗濯場に生えている一本の木の前にやってきたのだ。そして、その木の枝の下に足を踏み入れた時であつた。

「合ひに言葉は？」

突然、朱里のものではない、女性の声が耳に入った。

「『常山の遼り竜』」

朱里は紙に書いてある「漢文」の通り、そう答えた。すると、木の上から何がが地面へと降り立つた。それを見た朱里は、安堵の表情を浮かべる。

「お久しぶりです」

「ああ、本当だな。『朱里』」

地面に着地した「それ」は、朱里のことを、「諸葛亮」でもなく、「孔明」でもなく、真名である「朱里」で呼んだ。朱里にとつて、自分のことを真名で呼ばれたのは、本当に久しぶりのことであった。念のため言つておくが、彼女はハルケギニアに来て以来、誰にも自分の真名を教えていない。ルイズはもちろん、親しくなったシエスタにさえ、未だに教えておらず、字の「コウメイ」で呼んでもらっているのだ。

それはつまり、朱里の目の前にいる人物が、先ほどの会話でもわかるとおり、「ハルケギニア」の住人ではないかつ、互いに真名を授けあつた人物であることを意味していた。

「本当にお久しぶりです。『星さん』」

朱里はそう言った。朱里の目の前にいるのは、彼女より年上な外見の、スタイルのいい体つきと不思議な雰囲気とを持ち合わせた、

青い髪の少女。自称、「メンマ好きな美人武芸者」。またあるときは、「美と正義の使者、華蝶仮面」。その実態はいつまでもなく、「常山の趙子龍」と、趙雲（字は子龍。真名は星）だ。

朱里にとつては、愛紗や鈴々と同じく、桃花村で互いに真名を授けあつた仲間たちのうちの一人である。また、以前には共に旅をしたし（途中はぐれたが）、太平要術封印の決戦では共に肩を並べて戦つたのだ。朱里にとつて、この再開が嬉しくないはずはない。

「もう一度と会えないかと思つましたよー。」

朱里は喜びのあまり、涙を流しながら再会したばかりの仲間、星に寄りかかった。そんな朱里の頭に、星はポンッと優しく片方の手を置く。

「私もまさか、こんなところで朱里と会つうことになるとは思わなかつたな」

囁くような声で、星が言つた。

「本当ですよー。それにしてもよかつたあ……」

なかなか嬉しさから抜け出せない朱里。当然と言えば当然である。だが、それも終わらせなければならない。彼女の頭の中で、いくつかの疑問が生じたからだ。

「じいひで星さん

朱里は喜びもそこそこに質問した。

「星ちゃんが『うるさい』とせ、もしかすると愛紗ちゃんや鈴々ちゃんたちも……」

期待のこもった声で聞いたが、星は首を横に振った。

「こや。おぬしには悪いが、今のところは私だけだ

「やつですか……」

朱里は少し残念そうな表情になつた。そんな朱里に星は声をかけた。

「まあ、やつ落ち込むな。せつかくの再会の場面で落ち込むなんて、おぬしひいてもないぞ」

「やつですね

せつかくの再会にお茶を濁すわけにもいかないので、再び笑顔を取り繕つ朱里。すると、今度は星の方から聞いてきた。

「しかし、朱里。おぬし、どうやら、こうこうと大変な目に遭つているようだな

「え、あ、はい。やつです……おつ……」

思わず舌を噛んだ後に、朱里は今までのことを探し出しながら話した。霧の中で崖から転落したこと。気が付いたら、わけのわからない国について、しかもルイズという少女の「使い魔」にされていたこと。おでこに謎の黥（刺青）みたいな模様が描かれていたこと。いろいろ困難もあったが、なんやかんやで今のところは上手くやっている

」など、全部話した。

「おぬしも大変だな」

一通り聞いた星は、そう呟いた。

「ついこの間は、仮にも三万もの大軍の指揮を執った軍師が、一夜にして名家の小娘の召使い、とは。笑うに笑えんぞ」

「でも、最近は慣れましたし、大丈夫ですよ」

「まあ、おぬしはそう言つが……」

(これを愛紗や鈴々たちが知つたらどういづ騒ぎになるか)

星は言いかけたが、止めた。たしかに、愛紗や鈴々たちがこれを知つたら、とんでもない騒動が起きるのは必須であろう。危ついかな、ルイズ。

「私は平氣ですよ。仲のいい人もできましたし。それより……」

今度は朱里が質問する番だ。

「星さんは、どうしてここに？」

「ああ、聞いてくれるか、朱里」

そう言つと、星は語り始めた。

*

星の話によると、二つだ。

朱里たちと共に、水鏡先生の屋敷に向かう途中、またしても霧の中ではぐれてしまった。

皆を捜してしばらく歩いていたとき、突然、その場が金色に輝き、星は氣を失った。

そして田が覚めると、田の前には一人の怪しげな道士風の男。彼が言つには、

「今まで汝が見てきた世界は、全てまやかしだ。私は汝を、『眞実の世界』へと案内したい」

「『眞実の世界』へ行きたければ、この『赤い丹薬』を呑めばいい。今までのまやかしの世界へ帰りたければ、こいつの『青い丹薬』を呑めばいい」

馬鹿馬鹿しいので、星は青い丹薬を呑もうとしたが、その怪しげな道士はこいつ言った。

「いいのか？ 汝は『まやかしならぬ、本物のメンマの味』を知りたくないのか？」

それを聞いた星は、飛びつくなつて、赤い丹薬を呑んだ。すると、体全体が冷たくなつたような感触に襲われ、気が付いたら、この世界に来ていた。

*

「と、こいつ」とだ

全てを話しきれる星。だが、朱里は半信半疑だった。

「あの、本当なんですか。それ」

すると、星は自信満々にこいつ言った。

「いや、ウソだ」

それを聞いた瞬間、朱里は盛大にずっこけた。

「あ、相変わらずですね……」

起き上がりながら、朱里は苦笑を混じらせた。

「といふで、朱里。街でこのような噂を聞いたんだが……」

朱里が起き上がるのを見計らつて、星が唐突に話を始めた。

「なんですか？」

「ああ。なんでも最近、盗賊が出てるらしいぞ」

「盗賊、ですか？」

訝しがる朱里に向けて、星は情報を渡し続ける。

「街の人間の噂だと、『めいじ』とかいう妖術使いの仕業で、『土くれのふーけ』とかいうそうだ」

「『土くれのふーけ』ですか？」

「ああ。その盗賊は神出鬼没で、この『とりすていん』とかいう国の貴族たちから、いろいろと財宝の類を盗んでいるそうだ」

「なんですか、それ」

朱里は詳しく聞きたいと思った。いつの世も、他人事として情報を聞き逃すのは、極めて恐ろしいものだ。

星が教えてくれたのは、その「土くれのふーけ」は、纖細に屋敷に忍び込んだかと思えば、貴族の別荘を「妖術」で粉々に破壊したり、盗み方に一貫性がないこと。主に「鍊金」の術を使い、扉や壁を粘土や砂に変えたり、時には巨大な土の「ごーれむ」とかいう巨人みたいなものを使ったりすること。正体が男か女かは不明など。犯行現場には「領収書」とやらを残していくこと。そして、「

強力な魔法が付いた高知なお嬢、「魔法アイテムが何より好きということであった。

「そうですか」

朱里は仕入れた情報を、頭の中で何度も反芻させながら頷いた。

「星さん、ありがとうございます。私も用心します」

「ああ、そうした方がいいぞ」

たがいに頷きあった。朱里が用心すると言つたのは、ここが「魔法学院」だからだ。「魔法」に関係することを教えている以上、「土くれのフーケ」に狙われやすい「お宝」がない方がおかしいであろう。それに自分がいつ巻き込まれるかわからない。用心しておくにこしたことはないのだ。

「さて、私は一旦行くか」

一通り語り終えた星が、今度はそう言つた。

「え、行くのですか?」

朱里は寂しくなった。せつかく再会できたのに、もう行つてしまふと思つたからだ。そんな朱里を見た星は、微笑みながら言つた。

「なに。私がいつまでもここに居たら、おぬしの邪魔になるだろ? それに……」

突然、星が怪しい笑みを浮かべた。それはそれは怪しい表情だ。

「おぬしのむちゅい姿が、いろいろと見れそうだからな」

「はわー?」

朱里は慌てた。まさかと思つたからだ。

「ま、まさか……」

「ああ。街でのおぬし達の行動、全部見てたぞ。あれはあれでもしうかつたな」

「はわわ、忘れてください! 私があんな本に夢中になつてたなんて……」

「なんの本だ? たしかにおぬしは何やら真剣に読み漁つておつたが」

「な、なんでもないです! 忘れてください!」

どういうわけか、「趙雲の罷」にはまつてしまつた朱里。なんとかこの状況から逃れようと、慌てて話題を変えようとした。

「星さん。そんなことより、大丈夫なんですか?」

「なにがだ?」

「ほり、星さんが大好きな」

「あー、アレの」とか

星は何度か頷くと、言った。

「アレなら大丈夫だ。きちんと確保できる場所も見つけたからな」
朱里は絶句した。この世界には竹などないはずなのに、どうして
「アレ」があるのであらうか。

「よ、よかったですね……」

やうやくやうやくとしかできなかつた。

「つむ。やう言えば朱里。もう一つ聞きたいことがある」

「な、なんですか？」

思わず問いかける朱里に、星はかまわずに言へ。

「この間、街でおぬしを救つた『華蝶仮面』の件だが、あの時おぬ
しと一緒にいた者たちは何と言つておつたか？」

それを聞いて、朱里は凍りついた。ルイズたちはまともな評価を
していなかつたからだ。

「いえ、その……。凛々しくてカッコいいって言つてしまつたよ……」

もちろん、嘘である。だが、星は飛びきつの笑顔で嬉しそうに言
つた。

「そうであったか。『凛々しくてカッコいい華蝶仮面』か。『美と

正義の使者、『華蝶仮面』は世界の壁を越えようと、皆の人気者だな

そう言つて一人で大笑いする星。ちなみに朱里は知らなかつたが、この間の一件のせいで、この魔法学院の一部の男子生徒の間では既に、「華蝶仮面」は大人気を博していたのであつた。それはもちろん、ギーシュやマリコルヌたちの集団である。

「さて、朱里。おぬしのおもしろいところを見たい……もとい、おぬしの邪魔にならぬよう、一旦別れるが、いざという時は、この『常三』の趙子龍』がおぬしの力となるうべ。では、さうばだ！」

一いつ決め台詞を残して、星は先ほどの木の上に飛び乗ったかと思ひきや、そのまま城壁を飛び越えて学院内から姿を消した。

それを見送つた朱里は、ものすゞく不安だった。もちろん、星の頼もしさは知つてゐるのだが、それとは別の意味での話だ。

（皆さん、なんだかとても不安ですぅ……）

せつかく頼もしい味方が来てくれたといふのに、素直に喜べない朱里であった。

ちなみに、星は朱里に盜賊の噂話をしたが、トリステインのとある料亭にて、「土くれのフーケ」とは比べものにならないほどしょうもない「食い逃げ事件」が、五人の女性たちによつて引き起こされたのは別の話である。

第十五席 孔明、趙雲と再会するの」と（後編）

いかがでしたでしょうか？

ちょっと急すぎたかもしません。

まさか、ここで星と再会されることになるとは……。

ただ、混乱は避けたいので、星には後ろから朱里を見守つてもうおうと思います。

さて、華蝶仮面はハルケギニアに流行るのか？

そして、「屠龍の宝剣」とは？

次回をお待ちください。

第十六席 フーケ、屠龍の宝剣を手に入れんとするのアレ（前書き）

お待たせしました。
長引いてしまって、本当にすみません。
それではお楽しみください。

第十六席 フーケ、屠龍の宝剣を手に入れんとするの」

トリステイン王国、とある村

いつの世も、ビニへ行つても、子どもほど元氣で純粹なものはないであらう。

広大な草原を望む場所に位置するこの村でも、それは例外ではなかつた。現に、村近くの草原にある花畠では、何人かの子どもたちが集まつて、仲良く遊んでいた。追いかけっこをしたり、お花を摘んだりと、それは、それは楽しそうだ。

そんな子どもたちに、呼び掛ける声があつた。

「みんなー！」

それは、女の子の声だった。もちろん、遊んでいる子どもたちの中で、この声の主を知らない者はいない。何事かと、皆遊びのを止め、声がした方へと駆け寄つた。

やがて、声の主が姿を現した。やつて来たのは、黒眼黒髪の女の子だ。ここにいる子どもたちにとつては、いつも一緒に遊んでいる遊び仲間で、知つた顔である。だから、彼女がここに来ることは珍しくないばかりか、いたつて普通のことである。

「どうしたの？」

遊んでいた女の子の一人が、やつて来た友達に声をかける。する

と、黒髪の女の子は、ニコッと嬉しそうに微笑んだ。その時、皆が気付いた。自分たちの友達が、一人の見慣れない女の子の手を引いていることに。

「今日はみんなに、新しいお友達を紹介します！」

黒髪の女の子はそう言つと、自分が手を引いてきた、一人の女の子を、友達たちの前に出した。その女の子は、長いリボン付きの大きなどんがり帽子を被つているなど、この村の子どもたちとは似ても似つかない服装をしていた。子どもたちの誰もが、その少女の奇抜な恰好に見とれた。

「…………あわわ…………うう…………」

人見知りが激しいのか、恥ずかしがつて三角の帽子を田深に被ろうとする女の子。だが、そんな彼女などお構いなしと言わんばかりに、黒髪の女の子は大声で皆に紹介した。

「わたしの新しいお友達の、ヒナちゃんでーす！」

本当に威勢のいい声だった。ここまで来ると、もういたしかたない。「ヒナ」と呼ばれた、緑色の瞳に、紫がかつた長いツインテールの髪の女の子は、自ら自己紹介と挨拶をするしかなかつた。

「あわわ…………わたし、ヒナといいます…………うう…………、その…………、よろしくお願ひします…………、あう…………」

顔を真っ赤にして話すツインテール少女。かなり恥ずかしいのであろう。顔は俯き加減で、しかも真っ赤である。彼女は一瞬、挨拶に失敗したかと思った。

だが、子どもたちの反応は、彼女の予想の斜め上をいった。次の瞬間、たくさんの拍手が鳴り響いた。「ヒナ」と名乗った少女が顔を上げると、彼女と同じ年くらいの女の子が駆け寄つて来た。そして、右手を前に突き出した。握手を求めているようだった。

「ヒナちゃん、ていうんだ。よろしくね」

それを見た「ヒナ」は、恥ずかしがりながらも、相手の手を握った。それを見た子どもたちは、我も我もと、「ヒナ」に握手を求めた。彼女は困惑しつつも、一人一人の手を握り返した。それが済むと、皆はどうするかを話し合つた。

「何して遊ぶ?」

「追いかけっこみつきー。」

「それよつお花摘もうよー。」

「待つてよ、ヒナちゃんを『秘密基地』に案内してあげよう。」

「そうだね。山とかよく見えるし」

そんな皆の姿を見た「ヒナ」は、なぜかわからないが、嬉しく思つた。

(皆、初めてなのに、わたしなんかのために……)

そう思つたときだつた。

「よし、行こう、ヒナちゃん」

そう言って、黒髪の女の子が腕を引いたのは。

「あわわ……、ビニン……？」

「『秘密基地』だよ。みんなが案内してくれるから、大丈夫!」

尋ねる「ヒナ」に、女の子はニコッと笑つて返した。

*

トリステイン魔法学院

時間は既に夜。二つの月からの明かりが、魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

そんな本塔の壁に、垂直に佇んでいる、フードを被つた人物がいた。この人物こそ、王国中で噂になっているメイジの盗賊、「土くれのフーケ」である。

フーケがどうして魔法学院の本塔の壁にいるのかといえば、理由はただ一つ。この本塔の五階に、お目当てのマジックアイテムが保管されている、宝物庫が存在するからである。

しかし、強力な『固定化』の呪文のかかつたその壁は、ちょっとやそっとでは崩れそうにはない。

「これじゃ、どうしようもないね……」

フーケは悩んだ。もちろん、この壁の「弱点」は知っていた。知つているつもりだったのだが、実際に見てみると、はたして通用するのか、疑問である。

「あの、はげあたま禿頭め。なにが、『物理衝撃』が弱点ですって？ こんなに厚かつたら、馬鹿でかい大砲でも持つてこないとダメじゃないの。それに、この私が、『穴掘り』なんてするのもなんだかねえ……」

フーケは他人から聞いた「弱点」を頭の中に反映しながら呟いた。その「禿頭」曰く、塔の外壁は物理的な力に弱く、例えば、巨大なゴーレムとかに殴られたりすれば、崩れ落ちるかもしれないとのことだった。しかし、こうやって実際に調べてみると、確かに傷ぐらいいはつくかもしれないが、壁そのものは厚く、簡単には壊れそうになかった。

また、もう一つ弱点があることも聞いてはいたが、そつちは、塔の下を、地中深くまで掘つてしまえば、いすれば地軸の限界まで達するだろ？から、どんな塔でも崩れ落ちるというものだが、これは笑止千万と言わねばならない。そもそも、戦で軍勢を使って敵の城壁を根元から掘り起こすのならともかく、たった一人で、この巨塔を掘り起こすなど、いくら「土のエキスペート」たるフーケであっても、できない相談であった。

考えただけで、笑いたくなる話である。

「よわったね。やつとここまで来たっての……」

フーケは歯噛みをした。

「かといって、『屠龍の宝剣』を諦めるわけにやあ、いかないね……」

「……」

そう独り言を呟きながら考えていた時、ふと、すぐ真下の中庭に、誰かが近づく気配がした。それを察知したフーケは、壁を蹴って、すぐに地面に飛び降りた。高いところから飛び降りたので、地面に落ちる直前に、『レビテーション』を唱えるのを忘れない。

そうして着地したフーケは、すぐに近くの植え込みに、その姿を眩ました。

*

中庭にやって来たのは、四人の少女たちであった。

四人と言つるのは、もちろん、ルイズ、キュルケ、タバサ、そして朱里である。

朱里はともかく、ルイズたち三人は魔法学院の生徒である。もち

ろん、こんな夜に出歩くのはおかしい話だ。本来ならば寝床に居るべき彼女たちが、どうしてこんな所にいるのであらうか。

その理由は、呆れるほどに単純なものだった。

ことのきっかけは、朱里がルイズの部屋の前の廊下で、たまたまキュルケに出会ったことに起因する。

雑用を終え、ルイズの部屋に戻る途中だった朱里は、偶然にもキュルケに会った。それだけならよかつたのだが、その際、キュルケは朱里をその場に呼びとめておいて、一度自分の部屋に戻り、また戻つて来たのである。

そして戻つて来たキュルケが、ちょっとしたものをプレゼントしたのだ。なんでも、彼女の故郷、ゲルマニアのお菓子らしい。（これが何か、朱里は知らなかつたが、むいた栗の実をブランデーで蒸したものだった）

とりあえず、珍しいものを貰つたから食べようと、お礼を言つて、ルイズの部屋に入つて食べようとしたとき、それをルイズに見つかって問い合わせられたのだ。

そして、朱里の口から、キュルケの名前が出たとたん、彼女は自分の部屋を飛び出し、キュルケの部屋へと怒鳴りこんだのである。私の従者に、何の許可もなく、勝手に食べ物を与えるとは何事かと。いつものように、ケンカ、と言つよりは、一方的に怒鳴り散らすルイズと、それをからかうキュルケとの三文芝居になつた。

もともと、ルイズはキュルケ個人のことが嫌いである。

また、キュルケがトリステイン人ではない、隣国ゲルマニアの人間であることもあって、当たり方はよけいに凄まじいものといった。

ただ、これについては、ルイズ一人の責任と言つては、酷と言つべきである。

そもそも、ルイズの実家、ヴァリエールの領地は、ゲルマニアとの国境沿いにある。しかも、国境を挟んだゲルマニア側の土地こそが、キュルケの実家がある、フォン・ツェルプスター家の領地であったため、この両家は、過去何度も争いを繰り広げてきた、因縁ある関係なのだ。

争いというのもまちまちで、恋人の奪い合いから始まつたかと思えば、国同士の戦争で、命をかけた殺し合いまで繰り広げているのである。

朱里の世界でいえば、農耕民族の国「漢」と、北の草原の遊牧民族の国「匈奴」みたいな関係と似ていると言えばいいであろうか。

そんなこともあつて、その日もルイズとキュルケは口論を繰り広げたのである。

だが、ルイズがとうとう、魔法での決闘を申し込むまでの事態になつてしまつた。

しかし、生徒同士での決闘は禁止されており、これが先生に見つかると、大変なことになる。

だから、朱里は慌てて止めようとしたが、ルイズたちは言つても聞いてくれそうになかった。

仕方なしに、朱里はことをできるだけ小さく済ますべく、ちゅうど通りかかったタバサの協力のもと、自分が提案した「決闘」で白黒つけて貰うこととしたのであった。

「それで『ウメイ』

中庭に出てきて早々、ルイズが口を開いた。

「それはなにかしら?」

そう言つて、朱里が抱えている、円形の板を指さした。

「これが、今回の『決闘』に必要な『的』ですよ

朱里が答えた。彼女はその辺に転がっていた木材の破片で、一枚の的を急いで作ったのである。それにしても、相変わらず器用なものであった。

「『ウメイちゃん。あなたって、本当に器用ね。どこかの誰かさんと違つて……』

キュルケが朱里を褒める一方、チラッとルイズを見た。ルイズは今にも堪忍袋の緒が切れそうな様子であった。

「それで、それをどうじうといつの?」

苛立ちの表情を見せつつ、ルイズが言った。気のせいいか、自分が爆発するのを、自分なりになんとか抑えているよつとも見えた。

「はい。では説明します」

できるだけ早く、穩便に始めようと、朱里が急いで説明し始めた。

「まず、じゅうじの的を、タバサさんの魔法で、空中に浮かせてもらいます」

「それで？」

「その浮かんだ的を、ルイズさん、キュルケさん、お得意の魔法で、射抜いて貰います。順番はお一人で決めてください。とりあえず、先に的を射抜いた方を『勝者』とします」

「なるほど、ようするに『的當』ね。簡単じゃない

ルイズが腕を組みながら言った。このとき、彼女はたかが的當だと思っていた。

「じゃ、さつあと始めましょう」

「そうですね。では、タバサさん。お願ひします

キュルケが催促したので、朱里はタバサに軽く頭を下げてお願いした。タバサは、「クリと頷くと、短く呪文を唱えた。彼女が唱えたのは、浮遊魔法の『レビテーシヨン』である。タバサが自分の身長よりも長い杖をサッと振ると、円形の的は、夜の闇の、空中真っ只中に浮かび上がった。つい先ほどまでは朱里たちの足元にあつたのに、みるとみるうちに離れていく。そして、月明かりでなんとか見えるかというところで、そのまま停止した。

それを見たルイズは、顔をしかめた。ついさっきまでは自信満々だったのだが、実際に闇の中に浮かび上がった的を見ると、果たしてうまくいかわらないものである。わずかな月明かりで照らされながら浮かんでいるそれは、あたかも「外せ」とでも言っているかのようだった。

「準備ができましたよ。どちらが先に挑戦されますか？」

朱里が聞いた。

「なら、あたしは後攻。ヴァリエール。あなたが先にやりなさい」

「いいわ」

ルイズは杖を構えた。たかが的当てじときで負けてたまるものか、という気になっていた。少なくとも意気込みは十分と言つてもよい。しかし、彼女には問題があつた。それは、魔法が成功するかしないかである。

空中に浮いていた目標に攻撃を命中させようと呪文を使えば、憎きキュルケに先立つて的を撃ち落とせるのか。彼女は悩んだ。しかし、結局有効な手立ては思いつかない。せいぜい、「水」や「土」の属性の魔法では的を落とせない、ということだけである。

いつたいどんな呪文を使えば、憎きキュルケに先立つて的を撃ち落とせるのか。彼女は悩んだ。しかし、結局有効な手立ては思いつかない。せいぜい、「水」や「土」の属性の魔法では的を落とせない、ということだけである。

悩んだ末に、ルイズは『ファイヤーボール』をつうことにした。
むろん、失敗は許されない。

空中に浮かんだ的を、憎きキュルケの顔だと思い浮かべながら、短くルーンを呴き、気合を入れて杖を振った。

だが、結果は彼女の思い描いたものとは大きく異なるものであつた。杖の先からは何も出てこず、一瞬遅れて、的のはるか後方で爆発が起こつただけだつた。

それを見たキュルケが、腹を抱えて笑つた。

「ゼロ！ ゼロのルイズ！ 的じやなくて『空氣』を撃つてどうするの！」

憮然とするルイズを余所に、言葉を続けた。

「あなた、メイジを辞めて、花火職人になつた方がいいんじゃない？ その方が、みんな喜ぶわよ！」

「はわわ、キュルケさん、その辺で……」

ルイズが落ち込んでいるのを見た朱里が注意を促したので、流石にキュルケもからかうのをやめた。

そして、自分の番が來たので、空中の的を見上げると、狩人が如き目つきで、宙の的を見据えた。闇夜に浮かぶ的是狙いが付けづらいが、キュルケは余裕の笑みを浮かべる。ルーンを短く唱え、手慣れたしぐさで杖を突きだす。使用したのは、彼女の十八番、『ファイヤーボール』だ。

キュルケの杖先から現れた、瓜^{うり}くらいの大きさの火球は、あたか

も吸い寄せられるかのように、的のど真ん中に命中した。

「お見事です」

手際の良さに、朱里も賞賛の声をあげ、タバサがそれに頷いた。

「あたしの勝ちね！ ヴァリエール！」

ルイズはよほど悔しかつたのである。じょぼんとして、完全に座り込んだ。だが、このとき座り込んだことが、とんでもない事態の引き金にならうとは、誰も予想していなかつたのである。

ルイズが座り込んだまさにそのとき、何かが彼女の顔面に張り付いたのである。それは、薄い粘液に覆われていて、ヒヤッとするものであつた。

何かが付く感触をルイズが感じた時、彼女は一瞬、それは夜露に濡れた葉っぱかと思った。しかし、それは、明らかに植物ではなかつた。なぜなら、それはルイズの顔の上を動いていたのである。

（この感触……）

ルイズは戦慄を覚えた。冷や汗を流している彼女には、今や先ほどの悔しさは感じられない。いずれにせよ、背筋の凍る感じであつた。そんなルイズに釘を刺したのは、彼女の「使い魔」たる朱里の、何気ない言葉であつた。

「はわわ、ルイズさん。顔にカエルが付いていますよ」

それを聞いた瞬間、ルイズの頭の中で、何かがはじけた。実は、

ルイズの嫌いなものは、キュルケ以外にもあった。それは、「ゲコ」と鳴く生物で、虫を食べる夜行性の動物である。身近な所では、あのギーシュ騒動の関係者にして、同級生のモンモランシーが使い魔にしている、あの動物だ。そう、カエルである。

「い、いやああああ！？」「

ルイズは悲鳴をあげて走り回った。それはそれは、凄まじい声である。

「カエルなんてあっち行けえええ！！！」

必死にカエルを払おうとするのだが、どうすることもできない。そういうしているうちに、彼女は杖を取り出し、当たりかまわず振り回したのである。

結果、暴発した呪文のせいで、あちこちの地面が爆発と煙が噴き出した。

「はわわ、ルイズさん！ 落ち着いてくださいー！」

「ちょ、ヴァリエール！ あなた、危ないわよーー！」

見かねた朱里やキュルケが止めようとしたが、危なすぎでどうすることができない。

そういうしているうちに、暴発した呪文のうちの一発が、近くの本塔の壁に命中した。頑丈な塔の壁にひびが入った。直後、やつとカエルはルイズの顔から離れ、ルイズは杖を納めて溜め息をついたのである。

「ヴァリエール、危ないじゃないの！」

キュルケが怒つたが、ルイズはカツとなつて言い返した。

「つるさいわね！　わたしのせいじゃないわー　カエルのせいよー！」

だが、そんな口論も、すぐに終わりを告げた。そんな悠長なことをやつていられるような状況ではなくなつたからである。

「おー一人とも、どうか落ち着いて……！？」

朱里が駆け寄つて来た時であった。何やら、得体のしれない、大きな気配がしたのは。

「な、なにこれ！」

キュルケが悲鳴をあげた。どこから現れたのか、巨大なゴーレムが、三人のいる方に向かつて來たのだ。

「きやああああ！」

キュルケが真つ先に逃げ出した。策なしにあんなものと戦つて勝てるとは、到底思えない。

「はわわ……！？」

「何、突つ立っているのよ、コウメイ！　早く走つてー！」

朱里たちも一度身を引いたとした。ところが、慌てていたためか、

朱里は転んでしまった。しかも、そこに『ゴーレムの足が迫つてくる。

「何やつてこるのよー！ ほら、早く立てー！」

ルイズが朱里の片方の手を掴んで立たせた。しかし、そういうしていのうちに、『ゴーレムの足が接近してくる。絶体絶命であった。

その時、離れてルイズたちを見ていたタバサが、見かねて「ピイイイーー！」と、口笛を吹いた。すると、何かが物凄いスピードで飛んできた。それは、タバサの「使い魔」である、ウインンドラゴンであった。タバサのウインドドラゴンは、空中から、この状況を眺めると、わかつたと言わんばかりにルイズと朱里のいるほうへと降りてきた。そして、地表すれすれを滑空しながら、その大きな両足で、二人を拾い上げたのである。直後、一人のいた所に、『ゴーレムの巨大な足がめり込んだ。間一髪であった。

「あれが、『』ーれるむ……？」

空中でぶら下がった状態で、朱里が呟いた。この間に皆と戦つた、始皇帝の「兵馬妖」など比べものにならないほどの大さを誇る『ゴーレム』に、彼女は戦慄を覚えたのである。

しばらく、それを眺めていたが、一通り落ち着くと、彼女はいつもの彼女に戻った。

「はわわわーー？」

ふと気が付けば、朱里は今、ずいぶんと高い所にいるのである。そう言えば、彼女は高いところは苦手であった。

「なに？ めんた、高ことじいわせダメなの？」

すぐ隣で、ドリゴンの足にぶら下がっているルイズが言った。

「は、はー」

朱里は震えながら言った。

「まつたく、世話掛けるわね。高ことじいが苦手なら、先に離れて
あなぞこむ」

やれやれ、と言った表情で、ルイズが言った。すると、震えつつ
も、朱里が口を開いた。

「あの、ルイズさん」

「なによ？」

「先ほどは、起き上がるのを手伝ってくれて、ありがとうございました」
した

「そんなの当然じゃない」

なんだ、そんなことが、と言わんばかりの表情で、ルイズはそつ
ぽを向いた。

「使い魔を見捨てて逃げるメイジはメイジじゃない。礼を言われる
筋合はないわ」

そう言っている間に、一人を運んでくるウイングドラゴンは、安

全な場所にいた「主人」の元へと、降り立つたのであった。

なお、あのゴーレムを作りだした張本人は、近くに潜んでいた「土くれのフーケ」であり、その後、ルイズのせいでのひび割れた壁に打撃を加えて破壊し、宝物庫にあつた、「屠龍の宝剣」を盗みだしたことは、言うまでもなかつた。

*

その日の日中、トリステイン王国、某所

袁紹、袁術一行は、必死で逃げていた。彼女たちの後ろからは、ミツバチの大群が追つてくる。

「ひいい！ だれかお助けを！－！」

「美羽さま、どうするんですか！－？」

「妾のせいではない！ 断じて妾のせいではないぞ！ 大体、張勲！ 『とある国の、無口で、犬耳と犬の尻尾を持った娘を見習つて、野生の蜂の巣から蜂蜜を取りつ』などと言いだしたのは、お主ではないか！－？」

「さつすが美羽さま！ なるほど、それは名案じゃ」とか言つて、

まったく反対もしなかったのよ、これとこう時はすべてを廊下に丸投げされるなんて！本当に惚れ惚れしますわ！」

「わけのわからないこと」を言ひてないで、もひと速く走りなさい！ハチに追いつかれたいのですか！？」

「うわ、麗羽さまがまともなこと言つたー！」

「慌てる場合じゃないよー。」

『い、いやああああーーー？』

「ひし、今日も日は過ぎるのであった。

第十六席 フーケ、屠龍の宝剣を手に入れたるの」（後書き）

第六回「ルイーズと孔明のムダ知識講座」

ル「あれ？ こんなコーナーあつたかしら？」

朱「無理もないですよ。何力用もなかつたですしちゃ……」

ル「まったく、こきなり何の予告もなしに復活せらるなんて、一体
どういつ風の吹きまわしかしら？」

朱「まあ、とりあえず、せつかくですから、付き合つてあげましょ
う」

ル「仕方ないわね」

朱「それではまいりましょ。今回のお題は、『ちりぢり』」

ル「今日は噉まなかつたわね」

『隣国との付き合つ』

ル「隣国つて、まさか、本編でわたしと、あのキュルケの関係が出
てきたから、とか言わないわよね？」

朱「残念ながら、その通りのようですね」

ル「まったく、物好きもぽじぽじこわよ。で、今回など
んな話？」

朱「はい。では説明に入つていきましょう」

朱「今回、本編で、『トリステイン人』のルイズさんと、『ゲルマニア人』のキュルケさんとの仲が大変悪い、というお話が出てきました。ルイズさん、どうしていつもキュルケさんはケンカばかりするのですか？」

ル「そんなの、当たり前じゃない！ まず、個人的に気に入らないし、おまけに、あの野蛮なゲルマニアの人間よ。おまけにわたしの家とキュルケの家は国境を隔てて隣り同士。先祖代々因縁あるんだからね！ おまけに……」

朱「はわわ、もうその辺で……」

ル「まあ、そうね。こんな所で言つても仕方ないし……」

朱「とりあえず、このように、いつもどこでも、民族、風習の違う隣国とのお付き合いは、難しいということはわかりましたでしょうか？ さて、今度は私の国、『漢』での事例を紹介しましょう」

ル「あなたの国にも、そういうのはあるのね」

朱「はい。私の故郷の『漢王朝』は、北に『草原の国』の『匈奴きようこ』と国境を接しています」

ル「キョウド？ どんな国がしら？」

朱「はい。まず、私たちが住む『中原』は、農耕民族が暮らす土地であり、人々は土地を耕して生活しています。一方、北の草原は、

主に遊牧で生計を立てる『騎馬民族』たちが繩張りを張っています。つまり、『漢』は農耕民族の国。一方の『匈奴』は遊牧民族の国と言つ風に、生活習慣も言葉、風習も全く違うというわけです

ル「なるほどね」

朱「なお、『匈奴』といつ国が出現するよりも以前から、（中国）大陸北部や西部には、様々な遊牧の部族が暮らしていました。匈奴は、それらの部族を統合して生まれた国といえるでしょう」

ル「で、その国にも、王様とかいたわけ？」

朱「はい。例えば『漢』では、『皇帝』がいるように、匈奴には『单于』^{せんぐ}という首長がいました。匈奴にあつては、单于の言つことは絶対であり、何人たりとも逆らうことはできませんでした」

ル「なるほどね」

朱「では話を進めましょう。中原の農耕民族にとつて、辺境の遊牧民族たちは、全く異質なものでした。まず、生活習慣は違いますし、言語や衣服、食べ物も異なります。彼らの存在は、漢王朝（前漢）が誕生するよりはるか昔の『春秋・戦国時代』から問題になっていました」

ル「問題？」

朱「もちろん、それは国境紛争です。匈奴を含めた辺境の遊牧民たちは、食べ物が不足すると、別の部族を襲い、それでも足りないとときは、中原にまで押し寄せ、様々な乱暴を働きました。国境沿いの街や村を襲い、略奪を行い、農作物や家畜などを奪いました。それ

ばかりか、住民や官吏を殺し、あるいは捕えて奴隸にし、さらには女性まで連れ去つていく有様でした

ル「なにそれ、野蛮じゃない！」

朱「むろん、当時の遊牧民族の縄張りに接した国々は、なんとか擊退しようとしますが、歩兵中心の農耕民族軍団では、機動性の高い遊牧民族の軍には勝てませんでした。なにしろ、草原の人々は幼い頃から馬に乗り、弓の練習をするので、戦い慣れています。おまけに、遊牧民は保存食（干し肉やチーズなど）を携行し、わざわざ重い兵糧・輜重を持ち歩く必要はないので、風のように移動することができます」

ル「それじゃ、一方的にやられてばかりじゃない。なんというか、ハルケギニアの『人間』と『エルフ』の関係みたいに……」

朱「ですから、中原の街は高い城壁で覆われていてることが多いのです。そのつち、街を囲むだけでは飽き足らず、各国は遊牧民族を防ぐために、国境付近に長い石積みや土墨を築くようになりました。のちに中原が『秦王朝』によって統一された際、秦王政（後の始皇帝）がこれらの土墨を、東から西まで、延々と繋げ、大改良工事を行いました。これが、『万里の長城』の起こりと言われています」

（長城の地図と絵が出来る）

ル「なにこれ？ こんなのが、ハルケギニアでは見たこともないわよ！」

朱「とにかく、長いとしか言いようがありません。ほかにも、始皇帝は弩（クロスボウに似た兵器）を改良せらるなど、敵の騎馬軍団

を挫くため、射撃兵器の開発・量産を行わせています

ル「『』んなに凄い『長城』なら、國も安泰じやないかしら？」

朱「いいえ。むしろ、逆でした？」

ル「は？　どいつ」と

朱「これだけの長城を、短期間で作らせたのですから、莫大な労力と経費がかかったことは、言うまでもありません。結果、秦帝国内部は、大勢の民の怨嗟の声で満ちることになったのです。結局、秦帝国そのものは、始皇帝が崩御して、四年後に、国内部の反乱によって滅亡してしまいます」

ル「……」

(絶句し)

朱「さて、秦が滅んだとの中原では、後に漢の高祖となる劉邦さんと、西楚霸王・項羽との天下争いが繰り広げられましたが、この時、北の匈奴では、一人の英雄が誕生しました。ぼくとうぜんう冒頓单于です」

ル「ボクトツゼンウ？」

朱「彼は、父親の頭曼单于じゅばんせんうを殺害して、匈奴の单于となり、素早い行動力と、優れた騎馬軍団を以て、草原の諸部族を統一しました。そして、草原を統一した後、まだ劉邦さんが建国して間もない漢の領域に、40万と称する大軍で攻め込んできたのです」

ル「40万！？」

(腰を抜かす)

朱「もつとも、実際より誇張されている可能性はあります。いずれにせよ、大軍だったことに違いありません。結果、国境に近い代を守っていた功臣諸侯王の韓王・信かんおうが寝返り、劉邦さんはそれを討つために、30万を超える軍勢を組織して、自ら出陣します」

ル「始祖自ら出陣なら、勝てたんでしょうね？」

朱「残念ながら、勝てませんでした。劉邦さんは、主力部隊に先だって、わずかな数の軍勢と共に冒頓单于を討とうとしました。ところが、匈奴は戦わずに逃げるばかりだったので、そのまま追撃したのです。結果、これは罷で、劉邦さんの本陣は、極寒之地・白登山で匈奴軍に包囲されてしまいました」

ル「だらしないわね」

朱「相手をなめてかかると、こうこうことになります。包囲は1週間に及び、多くの兵士が飢えや凍傷で倒れました。そこで、劉邦さんの部下、陳平が单于の婦人に賄賂を贈つて、ようやく包囲を解かせたのです」

ル「始祖が敵に賄賂を贈るなんて……」

朱「結局、漢は匈奴と和平を結ぶ際、毎年貢物をする、匈奴单于に公主（皇帝の娘）を嫁がせるなど、自分にとつて不利な条件で結ぶ羽目になりました。しかも、匈奴はその後もたびたび問題を起こしました」

ル「せっかく和平を結んだのに？」

朱「国付き合いとは、やはり簡単にはいきません。匈奴はその後もたびたび国境を犯しましたし、また、漢帝国内で問題を起こした政治犯や盜賊が、匈奴の繩張りに亡命するといつ、治安上の問題もありました。また、吳楚七国の乱（漢王朝の皇族諸侯王の反乱）の際には、匈奴に接した趙王が、匈奴に援助を頼みましたし、他にも匈奴に派遣された宦官の中行説ちゅうぎょうせつが、漢王朝への逆恨みから匈奴单于に仕え、和平など無視するよつけしかけたといつ話もあります」

ル「ひどい話ね

朱「やがて、七代目の武帝さんの時代になると、我慢の限界だと言わんばかりに、武帝さんは匈奴にたびたび出兵するようになります。武帝さんの皇后・衛子夫の弟だつた衛青將軍えいせいじょうぐん（元々の身分は奴隸の羊飼い。後に大將軍となる）や、その甥の、驃騎將軍ひよつきしょうぐん・霍去病かくぎよへい将軍などが活躍し、匈奴に打撃を与えます」

ル「それでようやく終わったかしら？」

朱「いえ、まだです。武帝さんの時代は、匈奴に打撃を与えましたが、屈服させるには至りませんでした。しかし、武帝さんの曾孫の九代・宣帝さん（中国史上、王朝建国者を除くと、唯一の庶民皇帝）の時代になると、匈奴内部で单于の座を巡った後継者争いが起こり、結果、分裂した匈奴の南半分を率いる单于が漢に帰順を申し込みました。宣帝さんは喜び、匈奴单于に漢の皇族以上の待遇と地位を与えたました。これで、しばらくは友好的な関係が続いたのです」

ル「めでたし、めでたし……」

朱「ところが……」

ル「まだあるの…？」

朱「このせつかくの友好関係を全部破壊してしまった人間がいました。漢（前漢）から皇帝の位を簒奪した、王莽おうもうです」

ル「どうこう」とよ

朱「王莽は衰退した漢王朝から位を奪つた後、極端な儒教政治を行い、時代に合わない復古主義政策を取りました。その際、匈奴の单于や人々を貶めるようなことをしています」

ル「どんなことをしたの？」

朱「例えば、『中原の人間ではない野蛮人』が『王』を名乗るなどおかしいという理由で、『王』の印綬を取り上げ、『侯』に格下げするということをしました。結果、怒った匈奴が報復として国境を犯すと、王莽は『匈奴单于』の称号を貶め、『降奴服于』にしたのです」

ル「いや、子どものケンカじゃあるまこし……」

朱「むろん、『降奴』にされた匈奴の人々は怒りました。それを見た王莽は、今度は『恭奴善子』に改名するということをしています。ほかにも、東にある国、『高句麗』を貶め、『下句麗』にするとう、あまりに稚拙なことまでしています」

ル「なんでこんなのに国を乗っ取られたのかしり?..」

朱「よっぽど国が弱体化していたとしか、言いようがありません。後の豪族や農民の反乱によって王莽政権が滅ぼされた後、漢王朝を

復興した光武帝・劉秀さんは、これらの国々との関係を修復するのに苦労したと言います

ル「他人の尻武具いなんてイヤね……」

朱「さて、今回はこの辺で終わりにしましょう。次回をお待ちください
さい！」

ル「ああ、長かつたわ……」

終わり

第十七席 孔明、犯人を突き止めんとするの」と（前書き）

お待たせしました。

今回は、朱里の推理ショーです。
初陣はまだ次回に引き延ばしです。

それでは、お楽しみください。

第十七席 孔明、犯人を突き止めんとするの」と

荊州の街、襄陽。

五斗米道の名医こと華佗が水鏡宅を訪問してから五日目。彼は、襄陽の料亭にて、五斗米道教団の同志と、最後の打ち合せをしていた。

「これが、張衡様よりお預かりした、『ブツ』だ」

そう言って、華佗と対面して座っている、道士風の男が、一つの包みを手渡した。

「いいか、絶対に抜かるなよ。全ては、お前たちにかかるのだからな」

「わかつてゐる」

華佗が包みを受け取りながら言った。

「俺たちは今度こそ、あの『術書』との因縁を絶ち切る。それまでには、絶対に帰らんからな」

それはあたかも、自分自身に言い聞かせているかのような言葉だった。

それを聞いた道士風の男は、勘定を置いて料亭を立ち去り、それを見届けた華佗は、ただちに水鏡宅へ向かうべく、その場を発つた。

桃花村の恋姫たちの、旅立ちの時は、一刻一刻と迫っていた。

*

トリステイン魔法学院、本塔の前

「おい、見たか？」

「ああ。ありや、ひでえな」

「なにをどうやつたら、ああなるんだ？」

まだ日が昇つて間もないといつのに、本塔の前には人だかりができていた。それもそのはずで、頑丈に作られ、昨日までは傷一つ見受けられなかつた塔の壁には、今や大きな穴が開いているのだ。それはもう、ほっかりとである。

「どうやら、あの『土くれのフーケ』の仕業らしいぞ」

どこから情報を仕入れてきたのか、男子生徒の一人が友人にそう話した。いつの世も、噂が広まるのは早い。

「おいおい、うそだろ！？」

「バーカ、他にいったい、誰がこんなことやるんだよ」

「しかし、おつかないわねえ」

「ほんと。こんな頑丈な塔に穴を開けるなんて、どんだけ恐ろしい魔法かしら?」

「想像できなーいよ」

皆が自分勝手な意見を述べる。彼らから野次馬としての話題が尽きることはないだろう。

たしかに、この塔に大穴を開けたのは、ほかならぬ「土くれのフーケ」である。

しかし、流石に彼らは知る由もなかった。彼らとほとんど年齢の変わらない、一人の女子生徒の「魔法」によつて、塔に穴が開く原因ができたことなど。もつとも、その女子生徒にとつては、それを他の人間に知られてなくて幸いなのだが。

*

一方、じゅうらは塔内の宝物庫の中。

そこでは、学校中の教師たちが集まり、壁に開いた穴を呆然と眺めていた。破壊された壁は、内側から見ると、よけいに悲惨極まりないものであった。それを見れば、三才の子どもにだって、「土くれのフーケ」の攻撃手段が、いかに恐ろしいものであるかといふことがよくわかるものであろう。

しかも、壁の無事な部分には、フーケからの犯行声明文が刻まれていた。その内容は、

『屠龍の宝剣、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』
といふ、非常にふざけたものだった。

「おのれ、土くれのフーケ！」

教師の一人が怒った。

「あの、貴族たちの財宝を荒らしまくっているといつ盗賊が！ 魔法学院にまで手を出しあつて！ 隨分と舐められたもんじやないか！」

それを皮切りに、他の教師たちも騒ぎ始めた。

「衛兵はいったい何をしていたんだね？」

「衛兵？ そんなもの、元々当てにならん！ 所詮は平民じゃないか！ それより、当直の貴族は誰だつたんだね！」

「ミセス・シュブルーズ！ 当直はあなたなのではありませんか！」

「も、申し訳ありません……」

「泣いたって、お宝は戻つてはこないのですぞ！」

教師たちの怒りはエスカレートして、とうとう責任の押し付けにまで発展した。こんな状態が、学院長ことオスマン氏の注意が飛びまるで続いたのである。

この間、朱里はといえば、彼女同様、この事件の「目撃者」であるルイズ、キュルケ、タバサの三人とともに、宝物庫の隅の方で控えていたのだが、この光景をみて呆れてしまっていた。

無理もない。大事な宝物が盗まれたというのに、今日の前で起つてているのは、陰湿な責任の押し付けである。そのようなことよりも、今はフーケと、盗まれた宝の行方を、皆で力を合わせて探るべきであるといつた。

それだけでも十分呆れるといつたのに、さらに朱里をがっかりさせたのは、現在、ここにいる教師たちの中で、まともに当直をしたことのある者が皆無だったということだ。朱里たちの暮らす桃花村では、絶対に夜の警戒は怠らない。桃花村周辺が物騒すぎる所なのか、魔法学院が平和すぎたのかはともかく、開いた口のふさがらない話であった。

だが、過ぎたことを考えていても仕方がない。

オスマン氏を始め教師たちが、事件の目撃者であるルイズたちから話を聞いている間、朱里は一人で犯人について考えていた。

(もし、私が犯人なら、どうじょうか)

彼女はまず、そこから考えた。

(自分の欲しい物が、この学院の中にあるとして、それなら、どうやってそれを手に入れようか)

朱里は、この事件を解決するためには、自分が「土くれのフーケ」になつて考へるしかない、と思つたのである。

孫子の兵法曰く、

「敵を知り、己を知れば、百戦鍊磨危うからず」

である。これは何も、戦場に限つた話ではない。いつの世も、自分の力量を顧みず、相手の力を軽視すれば、とんでもないしつペ返しに遭うこととは明白なのだ。

(そもそも、宝物庫の中のお宝の中に、自分の欲しい物の名前があるかなど、その辺の街や村とかで聞けるはずがない。そうなると、お宝の名前を知っているのは、学院の人たち……)

その通りである。魔法学院の宝物庫の中に、何と言う名前のお宝が入つているかなど、その辺の平民たちは知つてはいるはずがない。まして、ここには城下町から離れた草原の真っ只中に位置する魔法学院である。それはつまり、魔法学院を出入りする人間だけが、「学院内の宝物庫」の存在を知つてはいるということである。しかも、その中の宝の名前まで知り尽くしている人間となると、数はさらに限定される。学院長と、それに近しい人間だけである。

(そもそも、昨日みたいな、あんな大胆なことを、その場の思いつきだけでできるはずがない)

朱里の推理はそこまで行き着いたのである。フーケがいかに優れたメイジであるうと、昨日みたいな大がかりなことを、突然やつてきて、嵐のように去るかのようにできるであろうか。どう考へても、前もつて準備したり、作戦を立てたりする必要があるので。それはつまり、学院長の周辺に、どんなに短くても数日前、長くて数カ月か数年前から、フーケ本人、あるいは彼女の放った内通者が潜んでいた、ということに思い当るのである。太い大木が、いつかは倒れるのはなぜか。キツツキがどんなに外側から穴を開けても、その程度で枯れることはない。むしろ、キツツキがエサにする、白蟻しらありや木喰虫木くいむしが、幹を内側から食い荒らすからである。

(学院長に近しい人と言えば……)

朱里は考えた。学院長のオスマン氏に近しい人間と言えば、その数は自然と限られてくる。それはつまり、ここにいる教師や秘書たち、ということである。その中において、「土」系統の魔法の使い手となると、さりに限られてくるのだ。

それがいつたい誰なのかと考へていた時であつた。

「とにかく、ミス・ロングビルはどうしたね？」

オスマン氏が言った。そう言えれば、ここにいる教師たちの中に、オスマン氏の秘書である、ミス・ロングビルの姿はない。

「それがその……、朝から姿が見えませんで」

「「」の非常時に、「」に行つたのじゅう」

「どうなんでしょう？」

そんな風に噂していた時であった。その、ミス・ロングビルが現れたのは。

「ミス・ロングビル！　どうに行つていたんですか！」

コルベール先生が、まくし立てた。それに對し、ミス・ロングビルは落ち着き払つた態度で、オスマン氏に告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「調査？」

皆が首を傾げる中、ミス・ロングビルは語り始めた。

彼女の話によれば、今朝来てみれば、宝物庫はこのとおりで、しかもフーケの犯行サイン。これが國中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業だと知り、すぐに調査を始めたのだというのだ。そして、フーケと盗まれた宝の手掛かりを捜していったところ、なんと、フーケの居所がつかめたのだという。

「な、なんですよ！」

「コルベールが、素つ頓狂な声をあげた。

「誰に聞いたんじゅうね？　ミス・ロングビル」

「はい。近在の農民に聞きこんだところ、近くの森の廃屋に入つていつた黒ずくめのロープの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

それを聞いた、ルイズが叫んだ。

「黒ずくめのロープ？ それはフーケです！ 間違いありません！」

オスマン氏は、目を鋭くして、ミス・ロングビルに尋ねた。

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間といったところでしょうか」

それを聞いて朱里は、「あれ」と思った。

（さつき、ロングビルさんは、今朝方起きて騒ぎに駆付いて、調査に行つたと言つていたのに、どうしてこんなに早く戻つてこれたのかな）

その通りである。ミス・ロングビルは、今朝方起きて調査に行つたはずなのに、「馬で四時間」かかるところから、もう帰つて來たのである。普通なら、どんなに早くても昼過ぎくらいになるはずだ。しかも、魔法学院周辺で聞き込みをやつていたのなら、さらに時間がかかるはずなのだ。どう考へても、計算が合わない。

（まさか！？）

朱里は、のどから出かかっていた声を、辛うじて殺した。彼女は、この事件の犯人が誰なのか、大体の想像はついたのである。だが、

今の段階では、あくまでも想像の域を出ない。

(でも、そつとしか考えられない)

彼女はもう一度考え方直した。確かに確固たる証拠はない。おまけに、この世界の常識では「一平民」に過ぎない朱里が、今この場で発言しても、信じてもらえるかわからない。それどころか、「子どもの戯言」と笑われそうである。

(今はがまん……)

朱里は、冷静に自分を抑えた。今ここで焦ってしまえば、全てがパーになるのだ。そうならないためには、誰もが納得する、確固たる証拠を抑えなければならない。それに何より、盗まれた「屠龍の宝剣」を取り返さなければならないのだ。そのためにはどうしようかと、考えようとしたとき、IJKで捜索隊の編成が行われたのである。

その結果、あらうことか、学院の教師たちは、「案内役」のミス・ロングビルを除いて誰も行かず、代わりに、生徒でしかないはずの、ルイズ、キュルケ、タバサの三人が志願して、行くことになってしまったのである。オスマン氏の話によれば、タバサは実力のある称号、「シユヴアリエ」を持つ騎士なのだというが、やはり生徒であることに変わりはない。

(IJKのままでは、ルイズさんたちが危ない!)

直感からそう感じ取った朱里は、やむを得ず、一計を用いることにした。例え、それが卑怯な手段だと言われようと、やらなくて後悔するよりはいい。そう思つての謀りのことである。

出発を目前に控えた時、朱里はルイズに話しかけた。

「ルイズさん」

「何よ、「コウメイ」

「その、準備がまだできていないので、少しだけ待ってもらえますでしょ?」

「まつたく、早くしなさいよね

「はい!」

返事をすると、朱里は走った。時間が少ない以上、できることは急いでやつておかねばならない。

「楊震ようしん曰いく、『天知る、神知る、我知る、子知る。何ぞ知る無しと謂わんや』。フーケさん。あなたは誰にも知られていないつもりですが、ちゃんと見られているんですよ」

子どもとは思えないことを考えながら、朱里は「フーケ退治」の準備に取り掛かるのであった。もともと、その代償として、出発が遅れたため、ご主人様であるルイズに、じつひどく叱られる羽目になつたが。

*

王都トリスターニアの、とある武器屋にて

「おーい、そこーの姉ちゃんー、何、俺のことじるじる見てんだーー!?」

「ほー、蝶の剣とはおもしろい

「じうじう見てねえで、わざわざ帰りやがれー！」

「やーいー、テル公！『美人な』お密様に失礼なことを言ひつけいやねえ！」

「いや、待て。じ主入。少し、これに触れさせてもいいや
ねえ！」

「え、まあ、」

「おーい、こらー！勝手に触るんじゃねえ！」

「おぬし、口が減らないようだな

「……おでれーた。見損なつてた。姉ちゃん、『使い手』か

「たしかにそつかもな。もっとも、私の場合は、剣よりも槍の方が
むいているがな」

「姉ちゃんも一言かいじやねえか

「ま、こんなおもしろいものは、持つてて損はなかろ？。『帰つた

時』の、ちゅうじこに土産くらこにはなるであつた。『主人、これはいくらだ?』

「へえ、そのインテリジョンスソードでしたらお安くしますぜ。ちよつび、いい厄介払いである」

「わつか。ところで、おぬし、お前とかはあるのか?」

「俺の奴は、デルフリンガーなのだ! オキヤガれ!」

「なら、私も名乗らなくてはな。わが名は趙雲。字は子龍あやなだ」

「変な名前で、呼びにくこじやねえか」

「なら、趙子龍でよい。又の奴め……」

第十七席 孔明、犯人を突き止めんとするの」と（後書き）

いつたい、いつ、朱里は「〇〇」になつたんだ？

そして、デルフが登場しました。
出さない言つていまつたが、気が変わりました。
やつぱり出します。

わい、これからどうなるのか。

今後もよろしくお願ひします。

第十八席 フーケ、苛々するの」こと（前書き）

長らくお待たせしました。

ただ、正直言つて、今回のお話は、中身がない感がします。

しかも、どうも見苦しい訳が混じつてくるようなお話を。

それでも読んでくださる方々に、幸あらんことを。

第十八席 フーケ、苛々するの「」

水鏡宅

華佗が襄陽の街で五斗米道教団の同志と打ち合わせをしていた時「ゴシトウイハイドーオー」の頃。

「愛紗、桃香お姉ちゃん」

「なんだ、鈴々？」

「どうしたの？」

「」の間、華佗のおじちゃんが言つてた、朱里を連れ去つたつていうヤツのことなのだけど……

「ああ、確かに華佗殿の持つてきた予言書に書いてあつたな

「うん。えつと、たしか、『なんとかの術士』だつたかな？」

「そう、それなのだ！」

「それで、その術士とやらが、どうかしたのか？」

「うん。鈴々はね、その朱里を『大秦』とかいう所に連れ去つたヤツが、どんなヤツなのかつて、すつごく気になつているのだ」

「なるほど。たしかに気になるな

「たしかに氣になるよね。もし、華佗さんの持つてきた予言書が正しいのなら、孔明ちゃん、もしかしたら鳳統ちゃんも、今頃その人と一緒にいるかもしないし……」

「やうなのだ。もし、その『なんとかの術士』とかいうヤツが、朱里のことをいじめていたら、鈴々がケチョンケチョンにしてやるのだ」

「鈴々ちりんって、本当に友達思いなんだね」

「別に、鈴々はちつとも優しくなんかないのだ」

「相変わらず素直じゃないな、鈴々」

「愛紗まで何を言つのだ？」

「まあまあ。それより、その『術士』って人、要は、妖術とか使えるんだよね？」

「妖術か……」

「ん、どうしたのだと、愛紗？」

「いや、妖術と聞いて、なぜか不安になつたのだが……」

「妖術使ひと言つたら、この間の于吉おき、がそつだつたよね」

「まさか朱里のヤツ、あんなヘンテコ眼鏡をかけた、怪しいヤツに

……」

「なつ！ そんな！？」

「落ち着いて、愛紗ちゃん。妖術使いと言ひても、みんながみんな、悪い人たちじゃないでしょ？！」

「ん、ああ、そうだつたな、姉上」

「やうなのだ。それを言つたら、華佗のおじちゃんや、張三姉妹もそうだつたのだ」

「でしょ？ 孔明のやんのことだから、あつといい人に拾われているはずだよ」

「はたしてそうかな……？」

「え？」

「馬鹿がやん？」

「もしかすると、その『術士』つてヤツ、本当にあつかないヤツかもしれないよ？」

「なに言つてるのだ！ どんなヤツが来ようとも、鈴々と愛紗の手にかかるば、ちよちよいのちょー、なのだ！」

「やうだ。だいたい、『予言書』には、『大秦国の戦乱を鎮めんとする』つて書いてあつたであら？ 少なくとも、千吉のような悪人ではないはず……」

「でも、予言って、そういう当たるのかな？ もしされが外れで、
とんでもない化け物だったりしたり、どうする？」

「決まつていいのだ！ 鈴々がケチヨンケチヨンにしてやるのだ！」

「でも、もしかしたら、全身が血のよじに真っ赤で、顔には赤くて
ギラギラーっとした目が一つだけあって、身の丈七丈（およよそ2
㍍）で、頭のてっぺんには一本の角があつて、しかも馬の三
倍もの早さで駆け回る化け物を出してくるかもしけないよ。」

「そ、そんなものいるわけないのだ！ ねえ、愛紗ー。」

「あ、ああ。そうだぞ、鈴々ー。」

「そのわざにせ、やけに震えていたり見えたるナビ、氣のせいかな？」

「あ、氣のせいなのだ！」

「そ、そうだ。」「これは、武者震えだー。」

「くえー。」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん。大丈夫だよ、きつと」

「あ、姉上までー。わ、私は別に、こ、恐がつてなんかー。」

「あ、せつなのだー。馬の三倍も速いヤツなり、う、鈴々は、それ
三倍の速さでや、やつけてやるのだー。」

「一人とも落ち着いて。とりあえず、お茶でも飲んで落ち着けよう。
私、水鏡さんに頼んでくるから」

「ち、違う！ 私は別に恐くなんか……！」

「そ、そうなのだ！ 鈴々は、お、お化けなんか、ちーっとも恐く
ないのだ！」

「……えへへへ……これはおもしろいぞ……」

*

トリステイン王国の、とある街道

「クシユンー？」

荷馬車の上で、ルイズは盛大にくしゃみをした。

「はわわ、大丈夫ですか、ルイズさん？」

「ヴァリエール。あなた、風邪でもひいたの？」

「んなわけないでしょーうー？」

声をかけてきた朱里とキュルケに向かつて、ルイズは恥ずかしさのあまり、大声で怒鳴り返した。

(まつたく、いつたい、なんなのよ)

やむを得ず、高そうな絹のハンカチで鼻をかみながら、ルイズは思つた。

(なんだかわからないけど、どこか遠いところで、誰かがわたしの噂話をしているような気がしたわ……)

我ながら馬鹿馬鹿しいと思いながらも、そつ考えずにいられないと。

すると、そんなルイズを見ていた朱里が、ふと空を見上げた。そして、じつ言つた。

「なんだか、雲行きが怪しくなつてきましたね」

それを聞いた、ルイズとキュルケもつられて見上げる。確かに、朱里の言つとおりだつた。

学院を出発するときは、雲もほとんどない、きれいな青空が広がつていたのに、時間が経つにつれて、みちみち雲が多くなつてきたのである。すでに空全体が、灰色の厚い雲に覆われていて、いつ雨が降り出してもおかしくない状態だつた。

「言われてみれば、そつよね

キュルケが言つた。

「雨とか降らなければいいけど」

「いやよ、そんなの」

迷惑そつこ、ライズが言った。

「学院に帰るのに、ずぶ濡れで帰るなんて、まっぴらだわ」

たしかにその通りである。出発するとき、彼女たちは、まさか雨など降るまいと思っていたので、雨具の類は、まったく持ち合わせていいなかつたのだ。しかも現在、彼女たちが乗っている荷馬車は、屋根など付いてないのである。もしひと雨でも来られたなら、全員、全身ずぶ濡れになることは間違いないであろう。

「まったく。こんなことになるのも、きっとどこかに『雨女』でもいるんじやないかしら。そもそも案外近くに」

ライズはそう言つて、自分の嫌いなクラスメートの方を横眼でチラッと見た。むろん、それに気付かぬキルケではない。

「あーら。少なくとも、あたしではないわ。だって、あたしは『水系統』のメイジじゃないもの」

「誰がアンタなんて言つたかしら。自己解釈もいいところじゃない」

お互いに火花を散らしあう一人。荷馬車の上は、たちまちのつりに、曇り空以上の嫌悪な雰囲気に包まれる。

「はわわ……、喧嘩はダメです」

一触即発の空氣の中、見かねた朱里が仲裁に入る。

「あら、大丈夫よ。『ウメイちゃん』

キュルケがそう言ったので、朱里はホッとした。しかし、それもつかの間のことであった。

「あたしは『雨女』なんかじゃないから安心して。だつて、今ここで雨を降らせたら、『カエル嫌いのルイズ』に、吹き飛ばされてしまつわ」

「う、うるさい！」

キュルケのよけいな一言に、ルイズが噛みついた。昨日の塔の前での一件の事を言われたからだ。

「だつたら、今すぐ吹き飛ばしてあげるわ！」

「はわわ、ルイズさん、落ち着いて、落ち着いてくださいーー！」

広々とした野原の真っ只中だとこのに、騒がしい荷馬車である。

そんな喧騷を背景に、タバサは一人、自分は関係ないと言わんばかりに、本に読みふけっていた。

*

(なんで、こんなバカなことに…?)

「土くれのフーケ」は、苛立っていた。

昨日、塔に開いた穴から宝物庫内に侵入して、お皿等のお宝であつた、「屠龍の宝剣」を手に入れたまではよかつたのだ。その後の余計な行動がなければ。

まったく、私としたことが、今回に限つて、どうしてこんなことをしたものかね……。

後になつて考えてみれば、考えてみるほど、後悔の念が浮かぶ。

宝剣を盗みだし、それを学院の外に持ち出したまではよかつたのだ。いつもだつたら、そのまま事件現場から姿をくらまし、そしてそこには一生戻つてこないのである。

それなのに、どうしてまた戻つてしまつたのであるうか。それは、大怪盗、「土くれのフーケ」とはいえ、逃れることのできない、人間としての性のせいであった。

まったく。何を血迷つて、こんなことを考えたのか……。

実は、朱里が推理した通り、「フーケ本人」は、学院内に潜んでいて、今までじつと、目的達成の機会を伺つていたのである。その

間、ずっと本性を隠して、おとなしい人物を装っていたのだ。その間には、いろいろな思い出もあつたし、そこそこの対人関係も築き上げていたのである。だが、それらの思い出や関係が、全て良かつたかと言えば、必ずしもそうでもない。

どうして彼女は事件現場に戻ったのかと言つと、その理由は二つあつた。

一つは、一部の教師たちへの「お礼返し」のためであつた。

フーケは学院内に潜入していた際、様々な教師たちと話したり、食事したりしていたのだが、中には、どうしても嫌な人間もいるものである。学院長のオスマンや、禿頭のコルベールなどは自分によくしてくれた（オスマンはセクハラまがいなこともした）が、魔法学院の教師連中の貴族の中には、権勢を恃んで傲慢なふるまいをする者も多かったのである。しかも、フーケ自身は「貴族の身分を無くした流れ者」としてさすらっていたところを、オスマン氏に拾われた、と周囲からは認識されていたこともあって、そういう連中が彼女を見る目は、どこか冷やかなものがあった。いや、それだけならまだいい方だ。時には、陰口を言つ、本当に嫌な奴もいたのである。

このまま帰つてしまえば、連中に一矢も報いることができない。

そう思つたフーケは、仕返しを思いついたのである。

連中は誰よりも栄華を求めていた。だから、「フーケ」の情報を探けば、我も我もと手柄目当てに捕まえに来るに違いない。そして、のこのことやって来たところを、叩いてやる。

これが計画だったのである。

の「」とやつて来た連中に、私の力を見せつけられ、驚いて腰を抜かすに違いない。そして、絶望に染まつた顔で逃げていくことだらう。ある意味、殺すよりも痛快だわ。

そう考へていたのである。だが、現実はそっぽいかない。連中のボンクラ具合は、フーケの予想の遙かに斜め上を言つたのである。

連中は戦つ前から恐がつて、誰一人として来なかつたのである。そして現在、空には曇天をいただき、背後には、ガキの喧嘩と言わんばかりの喧騒である。こんな展開になるなど、誰が予想できたであらうか。

怒りのあまり、途中で「」の四人を放り出してやるつかとも思った。しかし、なぜか思いとどまつてしまつのである。

まったく、私もいつの間に物好きになつたものかしらね。

我ながら馬鹿馬鹿しいと思つても、どうしても考へてしまつのである。

どうして、あの宝剣が、「屠龍の宝剣」などと云つて、物騒な名前で呼ばれているかである。

おそらく、何か秘密があるに違いない。しかし、盗んだ剣を調べてみたところ、なんの魔力反応も無いし、見たところでは、実戦向けの剣ではなく、どちらかと言えば、装飾向けである。しかし、長年、様々なお宝を扱つてきたせいか、どうしても気になつてしまつ

ものである。

これも怪盗の性つてものかしらね。まあ、ダメでもともとだ
し、実験くらいはしてみる価値はあるかも……。

フーケはそう考えていた。そしてこの後、フーケは、自分でもわ
からぬ期待を胸の内に秘めながら、「実験」を行う運びになる
である。

だが、流石のフーケも、まさかこの「実験」が、大成功に終わる
など、夢にも思っていなかつたのである。

そして、フーケはもう一つ、気付いてないことがあつた。現在、
ルイズたちが乗っている荷馬車の遙か後方に、馬車の車輪跡をこつ
そりと追いかける、騎馬の一団が存在していたことに
。

*

同時刻。トリステイン王国、とある村の近く

「ヒナちゃん。これはなに?」

「これは、『セイロ草』。おなかが痛い時に使つんだよ」

「うひー、うひー、うひー？」

「『ウツバキ』、『サロンパ草』。呪をくじいた時に、よく効くの」

「すうーーい。じゃあ、このきれいなお花はー？」

「『オタイサン』のお花だよ？ 食べ過ぎた時、すりつぶして、お水と一緒に飲むと、スッキリするよ。凄く苦いけど……」

「へえー。ヒナちゃん、物知りなんだねー！」

「あわわ……、そんなことないでしゅ、あう……。私も、最近覚えたばかりなの……。前に、いろんなことを知ってる、私の大切な友達に教えてもらつて……」

「すうーーー！ どんな子なのー？」

「うう。すうーく優しくて、そして、いろんなことを、たくさん教えてくれる子だよ……」

第十八席 フーケ、苛々するのじと（後書き）

いかがでしたでしょうか？

グダグダとすみません。

本当に、朱里の初陣を引き延ばしてしまって、読者の皆様にも、そして朱里にも申し訳ない気持ちでいっぱいです。

せめて、最後の離里たちのほのぼのとした雰囲気に癒された方がおられましたら、幸いです。

これからも、微力をつくしてまいりますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4712p/>

三顧の零～伏龍、魔法使いに召喚されること～

2011年5月16日01時19分発行